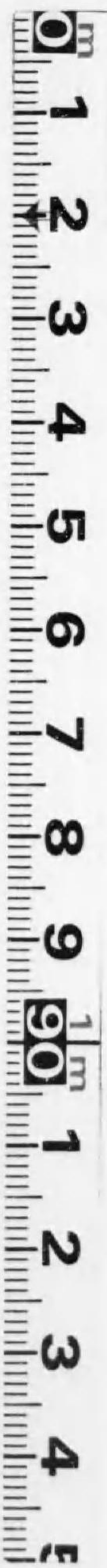


501

247



始



50/247

傷ける群

加能作次郎著

新潮社出版

大正
10 12.15
内交

若之日

2263

傷ける群

加能作次郎著

一九七

十一



小村と金井とは、もう一年餘も同じ下宿に居た。二人とも前の年の夏大學を出て、小村は或る雑誌の編輯をやつて居り、金井は某新聞の記者をやつて居た。

彼等はその下宿に居るのが疾うから飽き／＼して居た。落莫とした寂莫な下宿生活そのものの故もあつたが、それはりも寧ろ周圍の情味のない空氣が堪へられなくなつたのだと彼等自身は思つて居た。そこは學校が盛大になるにつれて、新しく開けて來た場末の學生街で、あたりの空氣がいかにも殺風景で、趣味が至つて低級で貧弱なものであつた。古本屋、文房具屋、安洋服屋、安雜貨店、ミルクホール、西洋一品料理屋、怪しげな女などの居る俗惡な安料理屋、それから下宿屋といつたやうなものが、家並がいかに不揃に亂雑に、ごた／＼と入り交つて、宵の口など、角帽を冠つた學生が、琵琶や校歌などを大聲に呶鳴つて歩いたり、無作法な姿態をしたおかみさんが、買物に出た下宿屋の女中などとベチャベチャと立話して居たりするのが目立つやうな、野暮くさい田舎じみた街であつた。都會らしい華やかな氣分や、趣きや、味ひや、濕ひといふやうなものは何處にも見出されなかつた。山の手の高臺町のやうな上品な靜かな落着いたところもなく、また下町のそのやうな華やかさ、艶めかしさ、豊かさ

や、堂々とした大仕掛の賑はしさなどはもとよりなく、すべてが薄つべらで、下等で、いやにさは／＼と小忙しく、こせ／＼して居た。

『實際殺風景だね。』

『全くつまらない。厭だな、こんな所は。』

『晩なんか全く歸つて来る気がしないよ。』

『早くどこかいゝ所へ引越したいものだ。』

二人はよくこんなことを言つて、こゝらならと思ふ所をよく散歩がてらに探して歩いた。

彼等は二人共、静な高臺の屋敷町で、生垣をめぐらした門構への家が立ち並んで居て、日が暮れるとしんとして了つて、琴の音や謠の聲などが暗い垣根の内から洩れて来るといつたやうな、所謂山の手趣味の所はあまり好かなかつた。尤も始めて東京へ出た當座は、宿を探すにもなるべくさういふ静かな所を選んだものだが、都會の生活に慣れるに従つて、だん／＼趣味が變つて来て、今ではさういふ單純な貴族趣味の所は、あまり彼等の心を牽かなかつた。もつと華やかな、都會らしい情調や氣分の漂つた、色彩の濃厚な、複雑な、下町風な情趣の豊かな界限に居たかつた。例へば何處か賑やかな大通の横町か裏通りあたりで、コトコトと溝板を踏んで狭い路次を入つて行くと、小さな格子作りの家がある、入口をあけるとすぐ茶の間になつて居て、大きな拭き込んだ艶の出た長火鉢がどしんと据ゑてある、その側

には、これも同じやうに拭き清めたさびのついた茶棚や箆笥やその他大小の道具が、狭いけれど面もきちんとさつぱりと片附けられ、上には神棚があつて灯が點いて居り、山の手の女學生や奥様風の束髪の女のかはりに、しつとりと艶々しい、髷か銀杏返しに結つて、黒襟のかゝつた着物を着た、年増のおかみさんが火鉢の前に斜に坐つて、きれいな襟筋をこちらへ向けて爪弾きで粹な端唄でも歌つて、娘の踊のおさらへでもしてやつて居る、といつた風な家の多い、そして一寸表通りへ出ると、そこには電燈や瓦斯の青や赤の灯が華やかに、ぼつと霞んだ水のやうな夜霧の中に浮いてるやうに輝いてゐる、街の兩側には夜店が列んで、夕化粧をしたいろ／＼の女がぞろ／＼通る、それがあたりの情調と溶け合つて、どんな女でも皆美人に見える、夜は十二時になつても、一時になつても人通りがあつて、すし、天麩羅、おでんなどの屋臺店が並んで居る、といふ風な純下町式の所に住みたかつた。

『何處か何だね、長唄が清元なんかのお師匠さんの家で、いゝ部屋が空いて居るところがあつて、そこを貸して呉れるといゝんだけれどな。』

以前長唄の稽古に通つたことなどのある金井は、よくそんな空想的なことを言つた。

『さういふ家だと洒落てるが、そこまでいかになくてもいゝさ。多少さういつた風な氣分のする所でさへあれば。』と小村が言つた。

併しさういふ所は容易に見當らなかつた。

或る日の午後、小村が社から歸つて來ると、濱の家といふ知り合の藝妓家から端書が來て居た。下宿のことについて、いろいろ話や依頼があるから、今晚でも暇だつたら散歩がてら寄つて呉れといふのであつた。

小村は濱の家の女主人の文龍といふ、この土地での姐さん株である藝妓を古くから知つて居るので、今では客といふよりも友達のやうにして、始終その家へ遊びに行つた。そして文龍の阿母や、別に一軒家を持つて相場をやつて居る父親とも心安くして居た。金井も小村との關係から、文龍とは知り合つて居るので、小村と一緒によくそこへ遊びにも行つた。

その邊はその區内の中心地で、或る坂の上の賑やかな街路を中心として、兩側の横町や裏通りには藝妓家、待合、料理屋などが軒を列べて居るやうな所であつた。毎晩夜店が出て、年中夕方から雑沓する所であつた。半分山の手らしいところがあり、半分下町趣味のあるところで、藝妓も、奥さんも、下町風の娘さんも、お邸の令嬢風の女も一緒になつて通るやうな所であつた。そして彼等は皆、周圍の華やかな空氣に化せられて、誰でも美しく見えた。

『東京の女は夏の夕方背後から見ると、そりや全くどんな女でも、美しく思はれるからね。』

かう小村が女について大發見でもしたかのやうに、女の話が出れば常にさう言ふのであつたが、それは始終此の邊を散歩などして歩いて得た彼の實感であつた。實際小村でなくとも、その邊を夏の夕方通

るものは誰でもさう感ずるであらう、と思はれるほど、種々の階級の女がたくさん出て、そして彼等が夜の光、夜の色彩、夜の空氣の中に浸つて皆な美しく見えるやうな所であつた。

金井も小村も、散歩といへばこの邊へ出て來るのであるが、彼等はさういふごくや／＼した人込の中をぶら／＼しながら、行きずりに異性の匂ひを嗅いで、若々しい動き易い官能のときめきを感じたり、夜の前に立つたり、屋臺店で立食をしたりするのを、如何にも情趣のあることであり、且つ都會生活の氣分に觸れるものの如くに感じて居た。

『この邊なら宜いね。』

『さうだね、この邊なら便利だし、それに何より氣分が違ふよ。』

『一寸散歩に出ても宜いからな、綺麗な女が見られるし、一寸すし、位つまめるからな。』

『さうだよ、今の所だと全く仕様がな。たまに此邊へ散歩に出ると、どうしても一晩つぶれるからな。おまけに時とすると、歸りに一寸蕎麥屋でも一杯やるだらう、するとつい宜い氣になつてあんな暗い淋しい下宿へなんか歸るのがいやになつて、どこかへ行つて了ふからな。第一、時間の不經濟だ。』

『この邊の横町あたりで、うまい工合の所があるといふんだが。』

二人はずつと以前からさう言ひ合つて居た。この邊ならいくらか彼等の望みにかなふやうに思つて、今度新しい宿を探すにも、大體この邊に目星をつけて居たのだつた。

そこで小村は、濱の家の文龍にも阿母にもその話をして、どこかいゝ所があつたら世話して呉れるやうに頼んで置いたのであつた。

小村は端書を見て、金井と一緒に往つて見ようと思つて、日暮まで待つて居たが、その日は金井は遅かつたので、彼は一人で飯をすまして出て行つた。金井には八時過ぎまで濱の家に居るから、來れたら來て呉れと事情を書き置きして。

二月の末で、冷たい風が吹いて居た。晝間霜解のして居た場末の道はもう凍てゝ居た。小村は外套の襟を立てゝ、寒さうに腰をうかせて小走りに歩いた。

例の坂の上の街路はそれでも矢張り中々賑つて居た。小村は繪ハガキ屋や小間物屋の飾窓の前に立つたり雑誌屋の店先に立つたりして、暫くぶらついた後に、濱の家の方へ行く狭い横町を曲つた。右側に大きな料理屋があつて、その向うの細い路次口には、藝妓屋や待合の小粋な軒燈が四つ五つかたまつて出て居た。小村はそれを一寸見上げてその路次の中へ入つて行つた。

『今晚は。』

小村は格子をあけて、いつものやうに自分だけにしか聞えないやうな小さな聲で言つて、答へも待たずに中へ入つた。と小村は文龍のかはりに阿母が長火鉢の前に坐つて、その皺のよつた細長い下卑た顔をあげて、背の高い小村が外套を着たなりに入口の二疊に、よきつと立つて居る姿をまじく眺めて

居るのを見た。

『小村さん！』と阿母はもう一度小村を頭から足まで見下した。そして、『随分、背が高いのね！ 小村さん。』と今始めて氣がついたやうに大袈裟に言つた。

また始まつた、これで何度聞か知れない、と小村は思つた。そして軽く笑つて、帽子も外套も脱がずにそのまま茶の間へ入つて火鉢の向側に坐つた。

『外は寒いでせう？』と阿母は鐵瓶を下ろして火を少しいらけた。

『え、随分寒いね。』と小村は帽子を取つて、うしろの床の間に投げやり、その手で長い髪を撫でて、そしてあたりを見まはした。

『お文は今お座敷へ行つたばかりなの。』

お文とは文龍の本名であつた。

『さうですか、皆な？』と小村は他の二人の抱へ妓のことを聞いた。

『え、あの妓等も先刻出たの。』

『大變景氣ですね。』

『え、お蔭さまで——でも家の妓は平のお座敷ばかりだから、祝儀や玉高があがらないから、駄目よ。』と阿母はその長い、皺の顔を左右に烈しく振りながら言つた。

また例の自慢が始まつたなと小村は思つて眉をひそめた。

小村はこの阿母が、いつでも同じ平凡なとりとめもない話を、幾度も繰り返し、相手のことなんか少しもかまはずに早口にべら／＼話したり、同じことを聞いたりするのを、殆んど堪へられぬほど退屈なことに感じて居た。殊に藝妓としての自分の娘について、半ば辯解的な半ば賞讃的なことを幾度も聞かされるので、其の度に不快な壓迫を感じるのであつた。文龍は此の土地では指折仲間の姐さん株だこと、他の藝妓のやうに見轉を稼がないこと、お座敷に出る料理屋でも待合でも皆な一流の所ばかりだこと、けちな待合などからかゝつて來ても、どん／＼斷ること、だから客が小つぽけな待合などへ行つて文龍を呼べと行つても、その待合では『文ちゃんは駄目よ』と言つて、最初から呼ばないこと、そんなやうなことを澤山例を擧げて際限なく語り出すのである。それからまた小村や金井やの勤め先のこと、仕事のこと、収入のことなどについても、一つ事を幾度もうるさく聞くのであつた。

その時もいつもする文龍の自慢話を暫らくしてから、

『今日葉書が行つたでせう。』と漸く要點に觸れかゝつた。

『え、有難うございました。何處かいゝ所がありますか。』

『何時頃着いて？』と阿母は小村に答へないで言つた。

『何時頃だか、僕が歸つて來ると來て居ました。』

『毎日何時頃歸るの？』

この阿母はまアなんといふ記憶が悪いんだらう。そんなことは何遍話したことか知れないのに。そんなことはどうだつていゝぢやないか。——小村はさう思ひながらも仕方なく、

『なに、きまつて居ませんよ、一寸出席簿に印を捺しに行くやうなものですから。』

『今日何時頃？』

『三時頃。』

『さう？ さうしたら來て居たの？ 家であのハガキを出したのが、かうつと。』天井を眺めながら『さう／＼、お正午頃だつたのよ、さうすると三時間位で行くんだわね、随分早いわね。』とひとり合點して居た。

そんなことはどうでもいゝのになア、と小村はもどかしがつて居たが、阿母が次々と話し出すので彼は容易に用事を言ひ出せなかつた。

『金井さんはいつ頃歸るの？』

『金井君ですか、毎日遅いですよ、仕事が忙しいと見えて。』

『朝も早いんでせう？』

『え。』

「ぢや小村さんの方はずつと樂なんだわね。」

「どうですか。」と小村は譯のわからぬことを言つて、こんなことでこの婆さんは人間の價値をつけるのだ、と心の中に嘲つた。そして、「どこか宜い所でもあるやうですか。」とやつと話を要點へ持つて行く機會を捉へた。

「あ、そのことでいらつしやつたんだわね。」

「そればかりでもないんだけど、一寸散歩に出たので。」

小村はそのことの爲めに態々來たのだと思はれるのが、なぜだか忌々しかつたので、さう言つた。

「さう、金井さんはどうなすつたの？」

また横道だ！ と小村はうるさく思ひながらも「金井君は今晚遅かつたから。」と答へねばならなかつた。

「いつも何時頃歸るの、定まつて居ないの？」と阿母は今訊いたばかりのことを尋ねた。

何といふ變な婆アさんだらう！ と小村はじれ／＼して忌々しさに舌打した。が一向そんなことは阿母には通じなかつた。で彼は「え。」と簡単に答へて、「何處かありませうか？」と再び訊いた。

「あのね、こんな所があるのよ。こちらからお願ひするんですの。あんと金井さんとは是非來て貰ひたいといふ所があるの。」

「何處です場所は？」

「なに、ついこの近くの。」

「さうですか、何處です？」と今度は小村は横道へ外れられないやうに、すかさず口早におつかぶせて繰返した。

「あのね、待合の菊水さんね、知つてるでせう。菊水さんのすぐ向ひなの。」

「ふむ、宜ささうな所だね。どんな家？」

「いゝ家よ、新建の二階家よ。そら今迄あすこに空地になつた所があつたでせう、黒い板塀で圍つた。」

「ふむ、ふむ。」と小村ははつきり知つて居なかつたが、話を進めるためにいゝ加減に頷いた。

「そしてあすこの角を曲ると寫眞屋さんがあるでせう、大きな。その寫眞屋さんの地所なの。」

また迂遠なことを言ひ出した。地所など何所のだつていゝぢやないか、どうしてこの婆さんはこんなんだらう、何故手つ取り早く要點を話さないんだらう！ と小村はしまひには腹立つよりも可笑しくなつて來て獨りで笑つて居た。阿母はいつもの癖で、例の長い皺のよつた顔を左右に烈しく振りながら、

「あそこに今度新しい二階建の家が三四軒建つたのよ。小村さん知つてゝ？」

「ふむ、ふむ。」と小村はたゞ頷いて居た。

「知つてるでせう？ そこを借りてね、今度素人下宿を始めようかといふ人があるの、私とこの知り合

の者なの、——そりや堅い人なのよ、矢張り自家と同じ故郷の者で、自家の亭主なんかと友達の人ですの。』

と、今度はその人について、今迄關東の或る機業地で手廣く商賣をやつて居たこと、今度都合で東京へ引拂つて來たこと、主人の徳太郎といふのが毎日蠟燭町へ出て米相場の仲買のやうなことを始めるといふこと、そこでその細君と娘とが留守仕事に素人下宿を始めるのだといふこと、——かいつまめばそれだけのことだが、例の通り彼方へ引つかゝり此方へ脱線して、説明やら辯解やらを細々と交へながら、小村には三四十分も経つたかと思はれるほど喋舌りつゞけた。

『そんなわけで、なんですよ、別段それを商賣にしようといふぢやないの、勿論人の二人や三人位置いで下宿屋を始めたつて儲かりなんかしやしないわよ。ただ東京に誰も知り合もなし、——それや全くないのよ、今度來るにしても私とこばかり頼りにして來たやうなもんですからね。』とこゝに力を入れて言つて、『——まあ謂はゞ何でせうよ、徳さんが毎日留守だしするから家のものが淋しいからやらうとでもいふやうなもんなの。それで誰かごく確かな、かたい人に頼んで、居て貰ひたいといふんですの、貼札なんか出すとね、どんな悪い者が舞ひ込んで來ないとも限らないから、なるべく自家あたりで知つた人がないかつていふのよ。でね、先達而もあなたから話があつたからね、丁度いゝ工合だと思つて、これ／＼の所へ勤めてゐらつしやる極くかたい、しつかりした、自家でも古くから懇意にして戴いてる人

で、小村さんに金井さんていふ方があるから、その人に話して見て上げようと、かう言つたの、するとね、そんな方なら丁度いゝ幸だから是非來て貰つて呉れると言ふんでね、それでお文にもさういふと、お文もそりや丁度いゝ都合だつて言ふから、今日お文に端書を出さしたの。』と漸く話に一段落をつけた。そして

『小村さん如何?』と改めて諾否を訊いた。

小村は阿母が一人でべら／＼喋舌るのを呆氣にとられながら聞いて居た。そして如何にも長い話に聞き疲れたといふ風に『ふうう』と大きな息を吐いた。

近所の待合から、三味線の音や、歌聲や、キヤツ／＼いつて騒ぐ男や女の聲やがごつちやになつて聞えて來た。

『いゝでせう、さうなさいよ、小村さん。金井さんと二人でいらつしやる方がいゝわ。』と自分でもう定めて居るもののやうに阿母は言つて『さうするとなんだわ、近いからお文や私なんかも時々遊びに行けていゝわ。』とつけ足した。

『さうですね、よさうだが、部屋の工合はどうかな。それを見てからでない。』

小村は、兎に角場所は申分なしであるし、家内も少く、それに田舎から出て來たばかりだといふから却つて親切でこちらを頼りにする位でいゝだらうと思つたが、態とはつきりした返事をしなかつた。

「部屋は、何でも二階が六疊に三疊二間だつてことよ。」

「ぢや僕等二人しか居られないね」

「え、さうよ……」と暫く間をおいて、「でも何とか言つてたわ、その家がね、あの、二軒長家に出來てるんでね、都合によつたら二軒とも借りるやうなこと言つてたわ。なんでも外に一人二人來たいとか言ふ人があるとかいふことだつたけれど、そこんとこ私よく聞かなかつたから、どうだか……。」と少し調子を低くして、曖昧な口調で言つた。

小村は阿母の言ふことに少し矛盾したところのあるやうにも思ひ、また今言つたことを少し言ひ憎さうに言つたので變だと疑はぬでもなかつたが、あまり大したことでもないので、氣にかけなかつた。

「どうですかね、部屋を見たいんだがいつがいゝだらう、明日でも連れて行つて呉れますか？」

「いつでもいゝわ、今晚どう？」

「今晚でもいゝけれど、夜だから先方が迷惑でせう。」

「そんなことアありやしないわよ。もう暫く待つてゐらつしやい。もうお文がやがて一本迎ひになるから。」と阿母は茶箆筒の上の置時計を見て、「その案内だけしといて、歸つてもお直しになつても、私が一緒に行くから——なるべく早く定めちやつた方がいゝわ。」

「さうしてもいゝ。」と小村は帯の間から自分の時計を出して、此家のと見較べながら言つた。「金井君も

その中にひよつとしたら來るかも知れないから、一緒に行けりや尙ほ都合がいゝ。」

「さう、金井さんも來るの？」

「えい、八時過ぎまで此家に居るから來られたら來いと譯を言つて來たの。」

「ぢやもう直ぐだわね。」と阿母はもう一度時計を眺めた。「もうあと二十分だ。」

暫く話が途切れた。小村は顔をあげて近所から聞えて來る散財の騒ぎに耳を傾けて居たが、ふと思ひついたやうに鰐口から銀貨を二つ三つ出して、臺所に何かゴト／＼さして居た小女に言つて壽司を買はせにやつた。

「何か奢つて下さるの？ 小村さん。」と阿母は媚びるやうな眼付した。「御馳走さんだわね。」

「なに、僕が食べたくなつたから壽司を買つて貰つた。」

「さう、毎度すまないことね——。早く行つといで！」と阿母は下女に向つて言つた。

「娘さんといふのは別嬪かね。」と小村は笑ひ／＼訊いた。

「大橋のお千代さん？」

「さういふ名なんですか。まだ知らないが。」

「え、——ですがそんなこと聞いて何なさるの？ 行つて見りや分るぢやないの？」と妙に意味ありげに阿母は笑つた。「なんだね、小村さんは、もしか別嬪だつたらどうかしようといふんだね。」

「さうぢやないさ、たゞ訊いて見たゞけさ。」

小村は、何でもあけすけと喋舌るこの阿母が言ひ過ぎるのを不思議に思つた。ひよつとしたらその娘といふのが、非常な醜婦か不具者かでないかしらと一瞬間疑つた。

「たいして別嬪といふほどぢやないが決して悪い女ぢやないことよ。——さうね、あれで美しい方なんでせうよ。」

小村はこの阿母の口振によつて、その娘は決して美しい女ではなく、むしろ醜い女に相違ないと想像した。それはかういふ一種媒介口のやうな場合には、誰でも眞價以上に吹聴するものだと思つたからである。

「嫌だなア、醜い女なんか。おまけに若し白痴でもあつたりしようものなら大變だぞ！」

彼はさう思つて眉をひそめたが、すぐその後から、そんな無意味な馬鹿々々しいことに無用な取越苦勞をする自分の病的に神経過敏なのを自ら嘲つた。

實際小村はかうした取越苦勞をする男だつた。過去の境遇や經歷によつて、人生の暗い方面を見ることに慣れて来た彼は、未發の事件に對しても、その光明の方面よりも、寧ろその暗黒面を徒らに豫想したり空想したりして、要もなき心配をしたり恐怖を抱いたりするのが常であつた。今の場合でも、まだ行くとも行かぬとも定りもしない宿の娘が、醜くからうと美しからうと、事實何等の關係もない筈であ

さうぢやないさ

る、妙にそれが氣にかゝつた。もしその娘が醜婦であるか、または白痴であるかした場合には、毎日その顔を見て、不快な思ひをさせられるに違ひないだらうことを豫想して、一種重々しい壓迫を感じるのであつた。

「美しい女であつてくれゝばいゝがな！」

かう彼はたゞ何等の理由もなく心の中で願つた。

壽司が来た。

「さあ、来てよ、小村さん。美味しさうね。」と言つて、阿母は茶を焙じにかゝつた。

小村は一つ摘んで、阿母にも勧めた。

「一つ戴きませう。どれが美味いかしら。」と阿母は鮎だの、海老だの、赤貝だの、海苔卷だのが大きな鉢に體裁よく並べられたのを態とらしく見まはして居たが、やがて何か獨り語を言ひながらその中から慎しやかに一つ摘まみ取つた。

小村は香りのいゝ焙じ花を一口ぐつと飲んでから、再び話を元へ返した。

「一人娘ですか？」

「誰れ？ お千代さん？——えい、さうなの。」

「他に兄弟がないの？」

くからぬ事を言ふな。斯の様な事にも自分の人様の一端がうかがはれる。解らぬ。馬鹿。

「えい、ないの。たつた一人きりなの。」

「年は幾つです？」

「いやに氣にかけるわね。今に行つて見ればすぐ判るぢやないの——」と阿母は妙に笑ひながら言つた。
「そりやさうだけれど……」

小村は別段何の考へもなく、たゞ話柄として聞いたのだが、何か目算でもあるかの如く阿母に思はれ、
そしてその心の中を見透かされたやうな氣がして、氣恥しく思つた。

「お文と二つ違ひだからたしか二十一よ。お文なんかと學校友達だつたの。そして一緒に常磐津や、
活花やお茶の稽古に通つて居たから、何でも一通り出来るわ。それに裁縫も一人前だし。」

「ぢやもう養子を取る時分だ。」と小村はひとりで思つた。

やがて狭い路次の雨垂下の敷石の上を、カタ／＼と慌た／＼しさうな下駄の音を立て、文龍が歸つて來
た。

「おや、小村さん、いらつしやい、今晚は。」と彼女は入口の室に無遠慮に立つたまゝ、小村の方に艶か
しい笑を送つて、「ちよいと御免なさいね。」と、帯の間からバチや紙入や煙草入やを手早く抜き取つた。
下女は上敷の莫塵をもつて、着換の手傳に行つた。

「まあ、嫌なこと、／＼、今晚のお客さんの嫌なことつたらない！ いゝ加減愛想がつきて、逃げて來

ちやつた。人を馬鹿にしてる。……」と文龍は自分だけにしが判らないことを言ひ罵りながら、重さう
な帯をキュウ／＼と扱きながら解いた。そして腰から足に小田巻なりにからまつたのをその儘ふり落し
て、藍色鼠の縞お召の上衣を、すらく／＼と肩から滑らすと、粹な友染縮緬の長襦袢に細帯といふ艶やか
な後姿が現はれた。彼女は手早く紐を解いた。そして白いふつくりした中肉の肩から腰のあたりの曲線
がパツと小村の眼を奪つたと思ふと、すぐ銘仙の平常着姿に變つた。——小村はぼんやりと暫く見とれ
て居た。

暫く三人で話して居た。もう九時過ぎにもなつたが、金井はまだ来なかつた。そして今日は遅くて先方に氣の毒だから明日にしようと言つたけれど、阿母はかまはないと云つて、先になつて出かけた。彼女等にはまだく宵の口であつたのだ。

その家は濱の家から三四町の所にあつた。坂の上の通りの裏通りで、片側には待合や藝妓家などがあつて、片側は普通の町家になつて居るやうな所であつた。

待合の菊水の前に来ると、なるほど新築の二階家が三四軒あつた。ほんのまだ建つたばかりで、どの家もまだ人の住んで居るらしい様子にも見えなかつた。みな戸が締つて居た。

『こゝなのよ。』と阿母はその中の一軒の戸口に立つた。そして、その家のおかみさんの名でもあるのか、『お民さん、お民さん。』と二聲ばかり呼んだ。そして返事をも待たずに、『もうお寝みになつたの？お民さん。』と續けざまに呼んだ。

ふと小村の心に、臆病な、一種の恐怖ともいふべき感情が起つた。

『なんだ、馬鹿々々しい！ そんな用に來たのか。人の寝て居るのに態々起しやがつて！』

かうそこの家の人達に思はれるやうな氣がした。彼はこゝの家の人が起きて呉れなければよいがと密かに願つた。あまりに小心な、いろくくと周圍を氣にする彼の性癖は、こんな場合にも彼を臆病にした。彼が歸らうくと引止めるにも拘らず、阿母は一向無頓着で尙ほ呼び續けるので、彼はひとりほらはらして居た。

『もう止ませう。』

小村は軒下から二三歩離れた。途端に、

『はい、どなた様でございます？』と中から女の聲がした。

『もう駄目だ。起きて來た！』

小村はさう思つてそのまゝ立ち止まつた。

がら／＼と格子戸の音に續いて、大戸をあける音がした。そして黒い姿が現はれた。

『おや、長田さんの小母さんですか？』

『今晚は。もうお寝みになつたの？』と阿母は一寸小村をふり返つて、『あのね、まことにお氣の毒でしたけれど、先達而の話の方が見えてね、兎に角家を見せて貰ひたいと仰有るんで……』

『あゝさうでございますか、どうぞお這入り下さいませ。』

お民は田舎風な妙なアクセントで言つて、家の中でも片附ける爲めにか急ぐやうに引返して行つた。

小村は仕方なしに濱の家の阿母の後に續いて中へ入つたが、暗い土間に立つた儘暫くもじ／＼して居た。入口の室の暗がり、黒いものがむく／＼動いて居た。そこに寝て居たものが起きたのであつた。小村は大變なところへやつて来たもんだとそのまゝ逃げて歸りたいやうにも思つた。

『まだ早いと思つて居たのに、もうそんな時ですかね。』

濱の家の阿母は意外だつたといふ風に言ひながら上にあがつた。

『いえ、まだ早いですよ！ 今日朝から片附物して疲れたもので。』とそこらを片付けて居るらしいおかみさんが言つて居た。

『さあ、どうぞこちらへお入りなして下さい。』と今度は奥の方で、太い重々しい男の聲が土間に居る小村に言つた。

『はあ。』と小村は嚴格に答へて尙ほもじ／＼して居た。

『小村さん、お入りなさいよ。』と濱の家の阿母が口を添へた。小村は漸く外套を脱いだ。

『さあ、どうぞこちらへお入りなして。大變散らかして居りまして、失禮でございますが。』と主人は丁寧にもう一度言つた。

入口の室の黒い姿は、隅の方へよつてもく／＼動いて居た。小村は薄氣味悪いやうな恥しいやうな思ひで、一寸そこに立つて居た。そして主人夫婦の寝て居た部屋との境に坐つて、丁寧に初對面の挨拶を

した。

六疊の部屋には寢床が延べられたまゝであつた。箆笥や茶棚などの道具が壁側にまだ落着きもなく置かれてある上に、寢床が二人寢の廣いものであるので、部屋中寢床のやうな氣がした。そして閉ぢ込めであつた部屋の中は、人の息や煙草の煙などで空氣が濁つて、戸外の冷たい空氣の中から入つて来た小村には、息詰まるやうな氣がされた。五燭の電燈はボンやりと力なさうに此の濁つた部屋の中に光を漂はせて居た。

主人は寢衣の上に羽織をかけて枕元に坐つて居た。

『失禮でございますが、どうぞ御免なして……少し早寝をいたしましたもので。』

『いや、私こそこんなに遅くまゐりまして失禮しました。』

小村は始めて主人の顔を見た。四十七八の頑丈な、裸にしたら岩のやうであらうと思はれるやうな體格であつた。顔は圓く廣く、血が濁つて居るかと思はれるやうに淺黒い上に、胡麻鹽の濃い髯面であつた。稍凹んでぎよろつとした眼、尖の少し内に曲つた小さな鼻、額の深く刻んだやうな皺、何となく邪惡な、酷薄さうな形相であつた。殘忍な、犍猛な野獸性が漲つて居るやうに思はれた。殊に毬栗頭の短い髪が、額から兩方の揉上げにかけて、前側だけ細い弧線を描いて縁取つたやうに白くなつて居るのが、尙ほ更その人相を悪くして居るやうであつた。

『田舎から出て来たばかりでございますして、一向素人でございますから、何分にもよろしくお願ひ致したいもので……』

二六

主人は小村等がもうこの家へ来ることに確定して了つて居るものと思つて居るやうな態度であつた。主婦はこちらへ背を向けて、長火鉢の残り火に炭をついで吹いて居たが、やがて小さな瀬戸の火鉢に火を取り分けて小村と阿母の方へ出し、自分は主人の側に疊の上に小さくなつて坐つた。

『何といふ色の黒い女だらう！』

小村は主婦の顔を瞥見してさう心の中で叫んだほどそれは實際黒い顔であつた。鐵のやうであつた。而も黒人種のやうに本來地肌から黒いのではなくて、何か激烈な悪性の病氣にでも罹つて、そのため汚れたのではあるまいかと思はれるやうな汚ない黒さであつた。そして卵を倒さまに立てたやうな輪郭の額から頬、頬から額へと段々細くなつて行つて、口元の兩顎が猿のやうに少し突出した容姿は、何となく劣等人種を思ひ出させた。黒い額が馬鹿に廣いので、その下に光つて居る小さな圓い兩つの眼は、顔の真中頃について居るかと思はれる位で、まるで風船玉に眼をつけたか、または章魚が帽子を立て、眼を光らせて坐つて居るやうな容姿であつた。四十前後とも見える年恰好で、小皺などもよつて居た。

『變てこな連中ばかり居る家だ、これで娘が醜婦と來たら、申分がないや。』と小村は心の中で笑ひながら『御家族は……？』と何の考へもなく、たゞふと胸に浮かんだまゝ訊いた。こゝへ入る前とは別人のやう

に、彼はすつかり落着いた氣分になつて居た。

『家内は至つて小勢でございます。私共二人に、娘の子と、それからそこに居ります小僧と四人きりでございます。』と主人は入口の部屋を指して、『小さい子供は居りませんから至つて静かでございます。』とつけ加へた。

小村はふり向いて、その暗い部屋の隅に、夜具の上に寢衣のまゝ寒さうにきちんと坐つて居る小僧を見た。

主婦は茶をすゝめて、

『全く田舎者で、何も知りませんのでございますから、何事も行き届きませんけれど、如何様にでもお小言を仰有つて、いゝやうに教へて下さいまし。』と心元なげな調子で言つた。地方から始めて東京へ出て新しい生活をしようとしてゐる者の正直な不安さがあらはれて居た。

『あなたが此家へ來て下さる御先祖様ですから、いろ／＼御遠慮なく御注意下さつて、どうか……』と主人は、『御先祖様』といふ言葉を見出したのが、此場合最も妙を得たものと思つて、得意さうに笑ひながら言つた。

『さうですわね。御先祖様になりますね。』と主婦も微笑した。殆んど半分もと思はれる位に、金の入齒が澤山してあつた。

小村は少しく意外に思った。

『この人達は、こちらから来るとも来ないとも、まだ何も言はないさきに、自分等の方でちゃんと定めて居る。濱の家の阿母が宜い加減なことを言つたものと見える。』

かう彼は心の中で呟いた。此人達が、無意識に、一種の責任を自分に負はして居る様にな気がして、心苦しくさへ思つた。そして小村は主人夫婦の抱いて居るらしい豫期には觸れないで、かう先づ訊いた。

『部屋の工合はどうですかしら？』

『え、部屋は何でございます、前側の方が六疊で、隣が三疊になつて居ります。六疊の方には縁側と床の間がついて居りまして、押入は兩方共一間宛ついて居りますから、お二人御一緒にお出でになるのに丁度もつて来いでございます。日當りが極くようございますし、風通しもようございます、それに何より疊建具が眞新ですから、第一氣持がようござんすよ。』

小村は主人が何を言つて居るかといふよりも、その如何にも上手な、物慣れた落ち着いた、そして抜け目のない、むしろ要領を得過ぎる位な言ひ振りに感心しながら、聞いて居た。しかしあまり何もかも獨りぎめにして居るやうな、人の心を見透いたやうな調子が快くはなかつた。

『そちらでさう思つたつて、俺達がそんな風な部屋が嫌ひかも知れないぢやないか、何故そんな部屋が二人一緒に居るのにもつて来いであるか、風通しや日當りのいゝのが俺達にいゝかどうか分らないでは

ないか。俺達は普通一般の人と反對で、暗い陰氣な、疊建具の古びた部屋が好きかも知れないではないか。いつそ來なかつたらどうだらう、この主人の、どこか人を食つたやうな心持を裏切つて、その豫期をすつぽかしたら面白いだらう。』と小村は妙に頑なな反抗的な心持になつたが、すぐまた『そんな小さな悪戯が何になるんだ！』と反省した。そして自分の片意地を嘲つた。『なぜ何ごとも素直に易々と受け容れることが出來ないのだらう、なぜすぐその裏を考へたり、對手の心持を批判したり、またそれに對して自分自身を反省したりして、つまらないことに神経を惱ますのだらう？ 俺はこれまでこんな片意地な性質のために、どれだけ精神的にも實際的にも損をして居るか知れない。また今後どれほど損をするか知れない……。』

二階にはまだ電燈が引いてなかつたので、主人は提灯をつけて小村を案内した。入口の室との界の襖をあけると狭い板敷の廊下になつて臺所に通じて居た。二階へ上る梯子は入口の方へ裏を見せてそこにあつた。梯子を上つて唐紙の開き戸をあけると、ブンと新しい木や壁や疊やの匂ひがした。そこは六疊であつた。まだ障子が貼られて居なかつた。

縁側の雨戸をあけると、待合の菊水の軒燈がすぐ下に見えた。門の上の忍び返しの上から、松の枝が往來へ突出て居た。その隣の西洋料理店の二階が右手の正面に見えた。硝子窓を透して白い布をかけた卓子が見えて居た。少し離れた左手の方の一段高い所の、待合らしい家の二階からは、三味線の音が聞

えて居た。女らしい人の影が、明るい障子に映つて動いて居た。その先の方は、坂の上の大通りで、その邊の上の空は、一たいにパツと明るくなつて居て、賑かな物聲が手に取るやうに聞えた。すぐ眼の下の往來は極く静かであつた。向側の藝妓屋や待合の軒燈がついて居るだけで一體に薄暗かつた。時々藝妓が女の箱屋を連れて通る位で、あまり人通りがなかつた。繁華な街の裏通の花柳街——小村はかうした都會式的情調を想像しながら、主人が何かと説明するのを耳にしないで暫く外を眺めて居た。そして先刻の不快な反省も忘れて、すぐにも引き越して來ようと思つた。

主人は更に隣室との界の襖をあげて見せた。そこは北向の三疊敷で、そこだけ獨立したものではなかつた。六疊の方から通らなければ入れないやうになつて居た。

『障子は明日経師屋が來て貼ることになつて居ります。それから電燈は、貴方がたがお出でになり次第點けますから。』と主人は言つて梯子を下りた。

もとの所へ戻つて來ると、主婦と濱の家の阿母との外に、今一人の若い女がそこに交つて、火鉢に手をかざして居るのを小村は見た。

若い女は言ふまでもなく、此家の娘のお千代であつた。主人夫婦の居室と襖を界にした隣室に一人寝て居たのであつたが、小村が二階へ上つて居る間に起きて出たのであつた。

小村が坐ると同時に彼女は黙つて頭を下げた。小村はちらとその女の顔を瞥見した時、ハツと思つた。

強い電流が身内を傳はつて行くやうに感じた。けれども

『僕は小村と申します。』彼はつとめて平靜と沈着とを見せて挨拶した。

判然と見ることは出來なかつたが、また席についた今でも、隣に坐つて居る濱の家の阿母の陰になつてよくは見えなかつたが、最初の一瞥によつて、彼女は非常な美人であるやうに小村は思つた。色は思ひきつて白かつた。瘦せぎすな面長な少し大形の顔の輪郭は極めてくつきりとして居た。眼も大きく、切れが長く、鼻も高かつた。そして何よりその唇のふつくりと柔かくふくらんだ、まるで熱しきつた櫻實のやうに水々しく紅く透き通つて居るやうなのが、ある甘い温かい快い感覺を小村に與へた。

彼は實際この女が、この主人とこの細君との間に出來た娘かしらと疑つた。そして今一度改めて、その野獸のやうな逞しい主人の顔と、女將の滑稽な黒い顔とを見た。

『本當の娘ではない、きつと養女だ、でなければ神が悪戯に奇蹟を行つたのだ。』

かう思つて小村は自分が見損ひでなかつたことを確かめるために尙ほよく娘を見ようとしたが、何となく氣おくれがした。そして、

『それで何でせうか、あの……どういふ條件でせうか。』と娘の居ることなどに氣なんかかけて居ないらしい風を見せて、主人の方を直視して言つた。『宿料はいくらです？』と簡単に露骨に訊けばよいことを、『條件……』などと妙に氣取つて言つたのが自分ながら可笑しかつた。

「何でございますか、宿料の方でございますか、……それならば何でございます。如何程でも宜うございます。その點は私共には一向様子がわかりません。貴方がたの方がよくお分りでせうから、何れとも仰有る通りに致します……」

そんなことが出来るものか、と小村は思ひながら微笑して居た。

「……その代り何でございます。別段にお構ひもいたしません、家の者同様にして戴きたいのです。……何も營業的にやるといふのではございませんので、たゞ此奴等が」と細君と娘とを顎で指して、「淋しいから留守仕事に何かやりたいと言ひますし、それに手前共も東京へ来たばかりで知合といふものは一人もございませぬので、それで極く確な方に居て戴きたいといふ譯なんですから、どうぞ家の者だと思ひになつて……」

この主人の巧みな辭令を小村はその儘素直に正直に聞くことは出来なかつた。眞情から言つて居るのではない、どこか言つてゐることに虚偽があると思つた。「この親爺中々食へないぞ、うっかり油斷が出来ないぞ。」と警戒せざるを得なかつた。

「さうですか、それが何より結構です。僕等も實はさういふ家族的なのを望んで居るのですから」
「どうかさういふことにお願ひしたいもんで……」

「ほんとに全くの田舎者で、それに大の我儘者ばかりで、どうせ皆様のお氣に入ることには出来ないにき

まつて居ますけれど、……どうかうんと叱つておくんないまし。」と主婦は金齒をびかつかせて微笑んだ。

主人の言葉巧みな、自分の心底から言ふのでないらしいに反して、主婦のお民は正直に、率直に、眞實を語つて居るといふことは、簡單ではあるが、その言葉の端々にもよく知られた。

小村は宿料のことをはつきり確めないではわからないと思つたが、この場合それを繰り返して訊くのがふさはしくないと思つてそのままにして置いた。そしてまだ種々細かい打合せや何かしなくてはならぬことが澤山あるやうな氣がしたが、一々はつきりと胸に浮んで來なかつた。併しそんなことはどうでも、兎に角一日も早く引越して來ようと思つて居た。それにも拘らず、彼の片意地な負嫌ひな心は、歸りぎはに彼をして、

「兎に角、今私と一緒に居る金井といふ友達にも相談した上で、都合によつたら御厄介になるかも知れません。」と形式的な遁辭を言はせた。

彼は外へ出て濱の家の阿母と別れた。と彼の眼の前にはすぐ娘のお千代の幻が現れた。一種の満足と幸福と羞恥と自己嘲笑との感じがごつちやになつたやうな、ある得體の知れぬ一種の氣持を味つた。

「何か面白いロマンスが起りさうだ！」

一種の狡い微笑を唇頭に浮べながら、彼は落ちつかぬ氣持で大股に歩いた。

「俺は御先祖様だ！」

三四

小村は暫くしてから心の中で叫んだ。彼はこの一時の座興的の言葉が、何かしらある幸福なことを意味して居るやうに感じさへした。

彼は賑やかな街を通り過ぎて、静かな暗いところを歩いて居た。二三月来、始終霧のやうに頭の中にもや／＼して居た屈托が晴れて、気が軽くなつたやうであつた。轉宿問題もこれで解決がついたやうな気がした。大橋の家に暫く居た間の印象が、善悪となくひとりでに頭の中に繰返された。そしてそれらのばら／＼の印象が、いつか自然に統一され調節されて、自分に都合のよい、快いもののみが一つになつて、色濃く彼の心に残つた。

『明日にも引越して行かう。』

思ひまうけぬ幸福が彼を待つて居るやうな気がした。自由な空想の翅は、とんでもない所へまで彼を引張つて行つた。

(……年頃の美しい一人娘を持つた一大家族が破産して田舎から東京へ出て來た。併し東京にはこれといふ知己もなく頼りにするものもなかつた。破産といふ傷ましい經驗を嘗めた彼等は、更に不安な心もとない、そして淋しい生活を送らねばならなかつた。娘は美しい容色をもつて居たに拘らず、『今』といふ時に一家が悲境に陥つた爲に養子を迎へることも出来なくなつた。彼女は強いヒステリイに罹つた。主

人は毎日ある所へ稼ぎに出た。妻と娘とは、せめて淋しい氣をまぎらす爲にもと思つて素人下宿を始めた。……

(一番最初に下宿することになつたのは、大學を出たばかりの青年であつた。小村陸夫といつて、二十六七の、丈の高い凛として立派な青年だつた。色の淺黒い、眉の濃い、鼻の高い、眼の黒いくつきりした男だつた。言葉つき、舉動態度、すべて男らしく、確乎しつぷした、同情に富んだ、頼りになるやうな青年だつた。主人も細君も娘も、みな彼を頼もしく思ひ、彼を尊敬し、大切にした。親子三人でよく小村の噂をして賞め合つた。『小村さんは、ほんとに親切ないゝ方ね。』と細君が言ふ。『さうだな、中々確乎しつぷした立派な男だ。年に似合はずよく道理の分つた人だ。』と主人も心から言ふ。『それに男つ振りも中々いゝぢやないの、さつぱりと男らしい……』『さうね……』と娘は思はず口走つて顔を赧らめる。『あんな人を養子に貰へるといゝわね。』と細君は言つて娘の顔を見る。娘は急所をつかれたやうに思つてうつむく。でも父も母も自分と同じ意見なので嬉しく心強く思ふ……

(……娘は毎日小村の部屋へ遊びに来るやうになつた。そしていろ／＼身の上話などした。小村は娘に同情を寄せ親切にいたはつた。娘の小村を慕ひ且つ頼る情は益々強くなつて行つた。——いつの間にか二人の間に戀愛が成立つた。楽しい、そして恐ろしい祕密の生活が開けた。しかし兩親は黙認して、むしろ彼等の戀に便宜を與へるやうにした。二人は幸福であつた……)

小村は心の躍るのを感じながら、果てしなくこんな空想を馳せて行つた。

併し下宿に歸るともとの冷靜に返つた。金井が歸つて居ることを下女から聞いて彼は自分の部屋へ行き残して行つた紙片の文句を読んで居た。

「やあ——今歸つてこれを読んで居た所だつた。どうも遅くなつちやつてね……行けなかつた。」と金井は濕んだ鳩のやうなやさしい茶色の眼で小村を見上げながら言つた。

「あ、さう、相變らず忙しいんだね。」と小村は兄が弟に對するやうな態度で言つて、帽子も外套も脱がずに、その儘火の熾い火鉢の前に坐つた。

「なに、さっいふ譯でもないんだけど、まだ慣れないもんだから。……ところでどうだつたね、いゝ家が見つかったかね？」

「あ、あつたよ、あすこならいゝと思ふんだ。」

小村は詳しく事實を話した。

「さうか、そりや非常によささうだね、早速引越さうぢやないか。」と金井は乘氣になつた。

「まあ、兎に角、明日の朝、君の出掛けに、もう一度一緒に行つてよく見ようぢやないか、それに宿料も、はつきり確めなくちやならないし。」小村は冷靜に言つた。「主人といふのが中々食へない男らしいよ。」

つい先刻まで無邪氣な空想家であつた小村は、今は極めて冷靜な理智的な實務家らしい男に變つて居た。

小村と金井とは翌朝早く出掛けて行つた。大橋の家では丁度主人が出掛けようとして居るところだつた。小村は金井を紹介して、金井も一度部屋を見たいといふので今朝来たのだといふことを言つた。

『小村さん、實はかうしたいと思ふんですがね。』と主人はもう小村を古くから知つてでも居るやうに馴馴しく呼び掛けて言つた。『實は最初あなた方お二人だけに居て頂かうと思つてましたが、どうせ人様の御飯焚をするなら、三人でも五人でも同じことだし、その方が却つて賑やかでいゝと噂共も申しますんで、丁度隣の家がこの家と同じで御覽の通り二軒長家ですから——間の壁さへ抜けば一軒になりますからさういふことにしまして、そして何です、来て下さる方があつたら五六人さんに居て貰ひたいと、かう思ふんです、それでこれは何ちらでも御隨意であります、私の考へでは、あなた方お二人は隣の方の二階に居て頂いた方が御都合がよからうと思ふんです。何分にも私共がこゝに居りますと、がや／＼自家のことが聞えて、御勉強の妨げにもなりません、お出入にもうるさいでせうから、その方がよからうと思ふんです……如何でせう?』

主人は勿論異存はないことを自信して居るやうな態度で言つた。

『ぢや何ですか、隣の家の上下全部と、こちらの二階とに人をお置きになるんですね。』と小村はきまりきつたことを態々尋ねた、それでは全く營業的ではないかと婉曲な皮肉のつもりで言つたのであつたが、主人にはそれが通じなかつた。

『さやうです。……それにその方がお連れさんがございまして、皆さんによからうと思ふのです。』

『それはそちらの勝手な口實といふもんだ。』と小村は心の中で批評しながら、

『さうすると何時頃それが出来上ります?』

『えい、もう造作はありません、そのことは豫め家主にも、若し都合によつたら斯々したいと話してありますし、その入口の部屋の壁と二階の梯子段の上の壁を三尺抜けばいゝんですから。家主の方へさういつてさへやればすぐ大工が来ることになつて居ます。今明日中に出来上ります。』

主人は一寸時計を出して見て、出掛けるやうな素振を見せたので、小村は急いで訊ねた。

『お出掛でお急ぎでせうから、部屋の方は後にでも見せて頂くことにして、あの何でせうか、宿料のことは如何でせうか。』

『その方は昨夜申した通りで、私共は、一向経験もございませぬし、東京の様子も一向に知りませぬから、實はあなた方の仰有る通りにするつもりですが、大體申しますと、かういふことに願ひたいと思ふんです。實は昨晩からも度々申す通り、何も營業的に儲ける積りでやるのではありませんが、さうか

と申して全く口ハで人様の御飯焚をするといふのも、これまた道理に合はんことですから、打ち明けて申すと、實は私自身も皆さんと同じに下宿料を出しまして、噂と娘と、小僧一人が、この三人がその世話料として食つて行けるやうにしたいと思ふんです。これは極内輪のお話で甚だ失禮でございますが、貴方がたは御先祖様で、自家の者同様にして頂くつもりで無遠慮に打ち明けますんですが、……それで如何でせう、お二人で何もかもすつかり纏めまして、他の方ならば三十圓といふところですが、あなた方は御先祖様ですから特別に二十八圓といふことに願ひましては、若し高いと仰有れば、何とでも仰有る通りに致しませうが、實は此の家は十五圓の家賃でして、二階と下とを分けますといふと、どうしても仰有る二階だけで十圓頂かなければ、下と釣合がとれません。ですがそこはあなた方だけ特別にしまして八圓だけ頂くといふことに願ひたいんで。あとは食料やら電燈やら——電燈は十燭を一つつけます——その外一切を込めましてお一人十圓といふことに。」と主人は例の落ちついた如才ない調子で盛に自家辯護をしながら言つた。「それからお二人ぎりでは少し廣過ぎるやうですが、今お一人誰方かお連さんに来て頂けば大變都合がいくですが……あなた方もいくらか室代がお安くなる譯ですから。」

小村は主人が非常に打算的に利己的でありながら、さう思はれまいと頻りに辯解し、のみならず何かにつけてそれを人の爲にするのだといふやうな偽善的な、見え透いたことを言ふのを不快にも思ひ、蔑みもしたが、また自分を清く潔く見せようといふ、誰にも共通な人間の弱點を思ひ、假面を脱ぎ得ず、

赤裸々に、正直になり得ないで、辯解に辯解を重ねる苦しさを思ひやると、昨夜來この主人について抱いて來た反抗的な嘲笑的な感情が、やがてむしろ憐むといつたやうな氣持に變つて行くのであつた。

間もなく主人の徳太郎が取引所の時間に遅れるからといつて出て行つた。

主人が出て行く背後から、お民がカチ／＼と切火を切つて送り出して居るのを、小村と金井とは物珍らしく思つて眺めた。かういふ縁喜を祝ふ社會に行はれるこの舊い風習は、彼等には何となく趣味深いものに思はれた。

『面白いね。』

『さうもんだね。』

二人は私語き合つた。

主婦は戻つて來て、新しく茶を入れかへた。一寸した菓子も出された。

『お千代、お前さんも出てお出でな。』と主婦が呼んだ。

『ハイ、只今。』

小さいが、併し透き通るやうな高い聲が、すぐ次の室から聞えた。

小村も金井も期せずして同時に、そして殆ど無意識に居座を正した。襖が開いた時、二人ともその方とは反對の方へ眼をやつて居た。が彼等の嗅覺が若い女が來たことを知つた。香水とも白粉ともつかぬ

——異性の匂ひが強く二人の若い男の官能を刺戟した。

お千代は型のやうに彼等と挨拶をかはして、『寒いわね、母さん。』といくらか甘えた調子で言つて母親の側へ寄つた。それは若い女が若い男の前に出た時に感ずる、一種不確かな心の動搖を彼女も感じたのであるが、それを押しかくして態と平靜と馴々しさを繕つたのであることはすぐ知られた。

黒い汚ない顔と、白い美しい顔とが、小村と金井との前に並んだ。額の廣いといふ點を除けば、その容貌のどこにも、この母親とこの娘との間に、少しの似通うたところが認められぬほどの著しい對照をなして居た。それは單に一人が女の盛りを過ぎ、一人が今正に妙齡であるためばかりとはどうしても思はれぬほどだつた。

お千代は今まで化粧して居たのであることがすぐ男等に分つた。大きな銀杏返しに結つた髪は一本の亂れ毛もなかつた。

『よく出来たね。』と母のお民は客の前も忘れて我娘の美しい髪を惚れ惚れと見て嬉しさうに賞めた。

『駄目よ、母さん、ちつともよくなんか出来やしないわ。』

お千代は微笑しながらかう言つて、少しうつむいてそうつと髪へ手をやつた。黒い滴るばかり艶々した鬘の下に眞赤な酸漿のやうな簪の珊瑚の球がまるで闇黒の中の灯のやうに見えた。白粉のよくのつた綺麗な顔に、切れの長い濃い眉と、紅い柔かい唇とが一層くつきりして居た。二つの大きな眼と、その

すぐ下の、一寸尖つたやうに高い頬骨のあたりに、何となく、つんとした、自ら美人であることを自覺して居るやうな一種の誇りを示して居た。黒襟のかゝつた粗い縞銘仙の綿入と同じ柄の羽織を着て立ちんと坐つて居る姿は、まだ十七八としか思へぬほどの若さと初々しさと、艶やかさを見せて居た。

それに比べて、その母親は何といふ見すばらしさであらう、この娘の母親とは誰が見ても思はれない。まだ身繕ひしない前ではあるが、髪も亂れて、鬘の上には毛がさゝくれだつたやうになつて居る。着物も木綿の洗晒しで、色も柄も、只單に着物であるといふのみで、何の嗜好もあるとは思へない。よしどんなに化粧をなし、どんな立派な着物を着たところで、此の女にはそれだけ無駄なことだと思はれる位だつた。夙く人の家に嫁して、舅姑には柔順な下女となり、夫には温良な娼婦となり、そして自分の子に對しては忠實な乳母となつて今日まで来たやうな女だ。曾て我身の存在を意識し人生の幸福や快樂などを思ふ暇もなく、ただ正直に柔順に周圍に盲従し、無自覺の間に自ら我身を虐げ傷けて、而もそれに慣れ切つて了つて、苦痛とも感じないといつたやうな倂がある。かうして娘と並んで坐つて居ても、母らしい權威もなければ、また一家の主婦たるの貫目も見えない。併し温良と正直と柔順と忍従と、これらの特質がどことなしに現はれて、それがその容貌風采の多くの瑕瑾にも拘らず、相手をして、ある寛いだ、自由な親しみ易い、一種の好感情を抱かしめる——

小村はそんな風に、彼女から受けた印象を自ら説明して居た。

主人が居なくなつて、みな幾らか寛いだやうな氣持になつた。お互の故郷のことなどについての平凡なありふれた談話が暫く續いた。

『いつ東京へお出でになつたのですか。』と小村はお民とお千代との何れともなく聞いた。

『まだ一週間位にしかありませんわ、ねえ、母さん。』とお千代は自分が直接に答へたのが面はゆいやうに感じて、母親の方へ言葉尻を持つて行つた。

お千代が母を呼ぶ時にはいつも母さんと言つた。この言葉が、甘つたれて居るやうで聞きにくくもあつた。

『さうね、まだそれ位しか経たないわね。』とお民は娘だけに答へるやうに言つた。

『東京へは幾度も前にいらつしやつたことがあるんでせう？ 勿論。』

『二三度見物かたぐゝ来たことがございます。』

『ちやよく御存じですね。』

『あの時分は景氣がよくて、お父さんと三人でよく方々遊びに行つたわねえ。母さん。』

かうお千代は思ひ出したやうに口を入れた。彼女はやゝ調子づいて居た。併しお民が黙つて居たのでお千代は拍子抜けしたやうに黙つて了つた。と急に現在の境遇に對する冷たい意識がさめて來た。『都合によつては藝妓ともならう。』かう覺悟した時のことがふと思ひ出された。伯母がそれを聞いて、『どう

してそんなことをさせてなるもんか、お千代だけは妾が引き取る。』と大聲に泣いて叫んだつけ……愈々東京へ出る事になつた時、もう故郷を出れば自分の一生の破滅のやうにも思ひ、また思ひもよらぬ幸福に出會はすかも知れないと思つた。『東京へ行けば、またどんなにやうにも思ひ、また思ひもよらぬ幸が回復しが出來て、またお前にどんな立派な養子が出來まいものでもない。』と母のお民も、自分の悲しさを冗談にまぎらしながら、氣休めに言つたが、それもさうだと、何だかそんなこともありさうな氣もされたのであつた。

小村と金井とは、この暫時の沈黙を機會に二階を見にあがつた。

『大變いゝぢやないか。來ることにきめよう。』と金井は一通り見てから言つた。『第一場所がいゝ。』

『さうか、君がいゝなら、さういつてなるべく早く引越さう。』

『あ、さうしよう。家の者もあれなら善ささうぢやないか。親爺さんは分らないけれど、おかみは正直さうぢやないか。』

『さうだらう。——ぢやさう極めるか。』

小村は金井の意に従つて決するやうな素振りを見せた。彼は何事にも金井よりは優越して居ることを感じて居、何事でも金井が自分の言ふ通りになることを知つて居たが、否、それを知つて居るが爲に尙ほ更、自分の獨斷で物事をするやうに思はれないやうに注意を怠らなかつた。これまでも、共同に何かす

る場合にはいつもさう云ふ態度を取つて居た。——娘のことには二人とも一言も觸れなかつた。再びもとのところへ戻つて來た。そして金井の口から二三日中に引越して來るからよろしく頼むと言つた。

『今迄あんまり人様の中へ出たことがございませんので、全く我儘者ばかりですから、どうぞせい／＼叱言を言つて下さいまし。』

かうお民は眞面目に言つた。今までの豊かで自由であつた生活を暗示するやうでもあり、また眞實その時分の我儘が出はしないかを怖れて居るやうでもあつた。今迄とは違つて、侮蔑を感じるやうなこともあらう、つらいこともあらうけれど、蟲を抑へて我慢をするんだぞ。かう自分をも戒め、娘にも嚴重に言ひきかして居るやうに思はれた。

『我儘なのが却つて結構です、僕等も我儘を言はして貰ひますから。』と小村が言つた。

『その方がお互に遠慮がなくてよいですよ。』と金井も言つた。

『どうぞ宜しく願ひます——一向様子が分らないもんで、どんな方がお出でになるかと内々心配して居たんですよ。貴方がたのやうな善い方に來て頂くことになつて本當に仕合です。何分こんなことは始めてですから。』

それは單にお世辭とは思はれぬほど眞情のこもつた言ひ方であつた。純朴な素直な感情をそのまま言

つたやうに思はれた。

『どうぞよろしく——』

やがてお千代の美しい高音とお民の低音と入り交つた聲を背後に聞きながら、二人の男はそこを出た。

引越すことに話をまとめてからは、小村は一日二日の間碌々氣も落ちつかなかつた。何をやる氣にもなれなかつた。書物を読むにも、物を書くにも、すべて中途半端のやうな氣がした。一日も早く新しい所へ行つて新しい氣分になつて、それから何事も始めたい、かう彼は思つてその日の來るのを待ち遠しがつた。

三日目になつて、その月の俸給が手に入ると、彼はすぐ引越して行くことにした。金井は晦日まで待たねばならなかつた。小村は僅に二三日を争つて自分ひとり先きに行くのは、金井に對して後めたく思はぬでもなかつたが、彼はただ一圖に早く行きたかつた。

『早く行くもんなら行つて了はないと、かう中途にぶらさがつてるやうなのが苦しくて堪まらない。何も出來ないからね。』

彼は金井にかう辯解するやうに言ふのであつた。

荷車の後について、その家へ着いた頃は、もうあたりの待合や藝妓屋などの軒に灯の入る時分であつ

た。艶かしい女の聲が、そこらの粹な格子戸の家の中から洩れて來たりした。

小村は一種の昂奮に浮ツ調子になつて、大きな聲で車夫を指圖して荷物を二階へ運ばせた。主人も出て來て、小僧に指圖などして手傳はせた。

二階はもう界の壁が抜かれ、障子も新しく貼られてあつた。小村は一應何もかも押入の中へ入れて了つてから、澤山の雑誌や書籍のなかに屈まつて本箱へ本をつめて居ると、

「お片附になりましたか。」と主人が上つて來て小村の背後から聲をかけた。

「やあ。」と小村は一寸ふり返つた。

「大變な書物ですな、みんなこれは要るんですか？」と主人は稍驚いた風に言つた。

「どうも下らないものばかり多くて厄介で仕様がありません。」

「尤もこれがあなた方の生命ですからな。飯の種なんだから。」

主人は感心しなやうな、またこれが當然であつて決して驚くに足らないといつたやうな調子で言つた。小村はたゞ微笑して居た。

湯に行きたかつたが、御飯が出來たといふので後にした。小僧が御飯を持つて來た。そして小僧の給仕で食べた。小僧は十五六の、頬の肉が張り切つてそれが爲にもとから小さな鼻が、無いやうに見える位タリ／＼肥え太つて居た。仙吉といふ名であつた。手の甲から手頸にかけて霜焼で暗紫色に腫れあが

つて居て、見るからに痛々しく、また不快であつた。小村はこの汚らしい黝黒い手のかはりに、白魚のやうに細く美しい娘のお千代の手が給仕して呉れるのであつたらと、ふと思つた。彼はまだお千代の顔を見なかつた。まだ聲さへ聞かないのであつた。どうしたのだらう、留守なのかしら？——小僧に聞いて見ようと思つたが、氣が咎めてよした。

湯から歸つて來ると、何とも言はれぬ宜い氣持になつた。軽い疲れに關節々々や筋肉も弛んで、のんびりと、甘い美酒にでも酔つたやうな氣分であつた。彼はふら／＼と縁側へ出た。冷たい風が湯上りの熱つた肌心地よく沁み渡つた。つい向うの家根の上と思はれるあたりから彼方は、坂の上の街路の華やかな灯が夜氣に反映して、まるで紅い霧が立罩めて居るやうであつた。そしてその中から歌聲とも話聲ともつかぬ、一種の合奏曲のやうなどよめきが聞えた。

空は冷たく澄んで星がまいたやうに輝いて居た。しかしもう春が近づいたことが何となく感ぜられるやうな夜であつた——何もかも小村の氣に入つた。

今迄の下宿と何といふ相違だらう！ 彼はかう思はざるを得なかつた。そして同時に、もうあの厭な學生臭味に充ちた雰圍氣の中から抜けられるだらうと思つて嬉しかつた。自由で純潔でそして豪放であり得るのが學生のみの特權だといふやうな誇らしい顔して、而もその自由と亂暴と純潔と無智と、豪放と無頼とを穿き違へて、淺薄で幼稚な癖に無暗に豪がつて昂然として居るやうな多くの學生の氣風を、

五〇
小村は自分が學生である頃から好まなかつた。學校を出て、やがて一年にもならうとする今も、學校の側の學生街の、學生ばかりの下宿屋に居た彼は、矢張り自分にもさういふ一種厭な學生臭味が取つついて居るやうな氣がされて居たのである。——今こそ本當に一個の人間として、本當の世の中に出られるのだ、新しい生活が開けるのだ、といふやうな氣さへした。

しかし、こののび／＼した宜い氣持は長く續かなかつた。或る極めて些細な突然な考へが、それを根柢から滅茶々に破壊して了つた。それは實際笑ふべきほどのつまらない事柄であつたが、しかし人間の微妙な心理の上に時々起る状態であつた。

小村はふともう何時だらうと氣がついたのであつた。時計を見ると早や九時近くになつて居た。まだ寝るには少し早くもあり、またあまり惜しくもあるやうな時間であつた。彼はこれからの一二時間を如何に費さうかと思つた。この何となく印象深く自分には思はれる第一夜を、無意味には過ごしたくなかつた。といつて讀書などする氣分にはもとよりなれない。階下へ行つて家の人達と世間話でもしようかと思つたが今引越して來たばかりなのでそれも遠慮された。通知かた／＼濱の家へ行つて遊んで來ようと思つても見たが、あの饒舌家の阿母の對手になつて居るのが苦痛だし、のみならず引越した晩早々遊びに行つて歸りが遅くでもなると、宿の者に對して迷惑でもあり、場所が場所だから變に思はれはしないかと、妙に自分自身を信用しないやうなことを考へて怖れもした。では一寸一廻り散歩して來たら？

それはあまり平凡でつまらない——彼は自ら作つたとりとめもない幻影に囚はれ、周圍を憚る馬鹿らしさを自ら嘲りながら、矢張りそれに囚はれて行くやうな心持になつて行つた。そして自ら恥ぢた。

彼は幾度も立ちあがつて梯子段の上まで行つては、また思ひ返して元の所へ戻るのであつた。——かまはない、行かう、いや寝た方がいゝ、だがつまらないな。——靜かに溢れるやうに淇へられた水が、ふと揺り動かされて波立つやうに、心の平衡が破れて妙に焦立たしくなつて來た。

『餘つ程どうかしてる！』

彼は自分の姿を滑稽的に眼の前に描いて、それを他人かの如く嘲笑したりした。

『馬鹿！ 何を愚圖々々して居るんだ！ 時間が経つばかりぢやないか。』

かう自分で自分を叱つたりした。三四十分もと彼には思はれたほどの間、立つたり坐つたり、部屋の中を歩き廻つたり、縁側へ出たりして居た。

『もう駄目だ、おそくなつた、寝よう。』

やがて斯うあきらめたやうに呟いて寢床を敷いた。けれども、どうしてもそのまま床へ入る氣になれなかつた。彼は懐手のまゝ枕元に立つて、呆然と寢床を見つめて居た。

この冷たい寢床の中に、一人寝るのか——ふと自分がたゞ一人空家の二階に居ることに氣がついた。さうだ、階下の部屋にも、隣の二階にも誰も居ない、一軒にしたといふものの、もと／＼二軒だつたの

だ、家の人達は隣の方の階下に居る、そこへ行くには梯子を下りて、暗い板敷を通つて、それから入口の室を二つ越さねばならない、今自分の居る方の家は、事實空家だ、そこに俺一人しか居ないんだ、たった一つの電燈がついてるばかりだ。——この意識は小村を無暗に寂しがらせた。襲はれるやうな恐怖さへ感じた。

寢床は依然冷たく眼の前に横つて居た。彼はいよ／＼思ひあきらめて寢衣に着換へようとした。が今迄、たとひ實際つまらないことであつたにせよ、これほど神経を悩まし心を煩はしたそのことに對しても濟まないと思つた。そして外套も着ないで無意識に階下へ下りた。

一寸ことわる爲に家の人達の部屋を覗くと、主人は寢床に入つて、枕に顎をもたらせて夕刊の相場欄を熱心に見入つて居た。お民とお千代とは長火鉢に向き合つて居た。お千代はこちらへ背を向けて居た。少し離れて仙吉は前垂の下へ両手をさし込んで木像のやうに坐つて居た。

『御免なさいまし。』と主人は新聞を下に置いて、『まあお入りなさい。』とお民と同時に言つた。『お寄り遊ばせ。』とお千代も言つて少し身動きした。

『お一人でお淋しいでせう。お話にお呼び申さうと思ひましたれど、失禮だらうと存じまして。——さあ、どうか狭いけれど火鉢のそばへ。』と主人は勧めた。

座蒲團がお千代のすぐ隣に敷かれた。

『はあ、有難う、今漸く片附けたので、これから一寸買物に行かうと思ひまして。——かうつと、もう何時かしら？』

小村は態と平氣に言つて時計を見た。そして、すぐ歸るからと言つて、逃げるやうに外へ出た。

「お千代に養子のあつたことなんかは、決して知らさないやうに注意しなくちやいけないよ。」
主人の徳太郎は今迄の話に段落をつけるやうに言つて、蒲團の中から太い手を出して、ボンと強く吐
月峰をはいた。

「仙なんかも氣をつけるんだよ。」とお民は亭主には答へないで、自分もその命令する一人であるといふ
ことを示すやうに仙吉に向つて言つた。

「え、決してそんなこと言ひません。」と仙吉は足に痺をきらして、尻をもち／＼動かしながら答へた。

小村の出て行つた後で、皆なで、故郷での生活のことなどを話し合つて居たのであつた。

お千代はその話が多くは自分に關係して居ることなので、始終黙つて居た。養子を迎へてから、つい
三ヶ月餘り前に離縁するやうになるまで三年ばかりの間のことが、捉へどころもなく彼女の胸を往來し
て居た。長い繪巻物を一時にパツと眼の前に擴げられたやうで、どこを中心に考へてよいのやら掴まへ
どころに困るほど考へが前後に飛ぶのであつた。

結婚當時は、家はまだ盛であつた。少くとも自分だけでも、よそ眼にもさう思はれた。或る有名な温泉

場へ新婚旅行をしたこと、間もなく夫が入營したこと、聯隊のある町へ時々行つて、そこに泊つたりし
たこと、その中自分の父と夫の父とが、酒の上でふとしたことから喧嘩を始め、それが原因となつて遂
に離縁沙汰が起つたこと、二三ヶ月も紛々した揚句、夫がまだ隊に居るうちに無理矢理に引裂かれたこ
と、その後男が除隊になつて、一二度夜更に忍んで来て、居間に近い裏口の板塀を叩いたが、會ふこと
が出来なかつたこと、ついで家の破産——それでもう一切の望みは斷たれて了つた。

まるで新派の悲劇のやうだと時々思はれたそれからの出来事が、今何の聯絡もなく、秩序もなく、走
馬燈のめぐるやうに急激にお千代の心に浮かんだり消えたりして居た。どこか或る點を捉へて、それを
中心に自分の生活をしみじみと思ひ悲しまうと努めたが駄目であつた。

「お客さんは大變遅いわね。」とお千代は氣持をまぎらすやうに言つて四方を見まはした。

「さうだね、どうなすつたんかね。」とお民も言つて、時計を眺めた。

十時を大分過ぎて居た。

「すぐお歸りになるつてことでしたが。」と仙吉も口を入れた。

「もうお千代なんか寝たがいよ。何もお客さんが歸らないたつて待つてることなんかありやしない。」と
徳太郎は素氣なく言つて横になつた。そして大きな欠伸をして眼をつぶつた。

一寸の間しんとした。

「おう、痒いッ！」と突然お千代は神経的に叫んだ。そして顔をしかめながら、簪で髭の根元を強く突き刺すやうに搔いた。

「えい、畜生！ イ、イ、……」と齒ぎしりながら、一層烈しく自暴氣味に突つ搔くのであつた。大きな黒い髭がふら／＼と上下に動いた。顔は赤くなり、眼は吊りあがるやうになつて居た。

「どうしたのさ。」とお民は優しく、しかし氣遣はしげに言つた。お千代がヒステリイを起す時には、いつもかういふ發作になるのであつたから。

お千代は黙つて尙ほ搔き續けた。

「もつと氣を落ちつけなよ。——仕様がないわね。」とお民は心にはいたはりながら叱るやうに言つた。沈黙が續いた——。

床の中に横になつて居る徳太郎も、お民もお千代も、片隅に黙つて坐つて居る仙吉も——皆な何か各自に思つて居るのだが、誰も何事をも口に出して話し得ないやうな捉へどころのない心の状態であつた。ふと何か心に浮かんでも、それがはつきりと纏まつた思想とならないうちに、水が指の間から洩れて行くやうに何所かへ抜けて行つて了ふのであつた。

「どうなるのかしら？」

といったやうな、極めて漠然とした不安が誰の心にもつきまとうて居たのである。しかし誰も、それをしつかり捉まへて、どこまでも突きつめて考へて行くでもなかつた。たゞ何物にも取りつくしまもないやうな状態であつた。暗い、前途の見えない、足元の不確かな、まるで空を手探りして居るやうな状態であつた。

お千代はよく夢に見るやうに、底のない無限の暗黒の中へ沈んで行くやうな氣がした。

「母やん、これから今迄とは違ふわね。」

やゝあつてお千代は氣をかへて言つた。この言葉は二様の意味に解かれた。今迄有福に、奉公人などを多勢使つて、自由な安樂な生活をして來たものが、今後は却つて他人の爲に働き、他人の機嫌を取らねばならぬといふ意味にも、また、つい此頃迄の淋しい悲しい思ひばかりして來た生活が變つて、賑やかな新しい日が來るかも知れないといふ意味にもとられた。お千代はただ漠然と、どちらかと言へば前の方の意味に重きを置いて言つたのだが、母のお民はむしろ後の方の意味にとつた。

「あ、さうだよ。これから多勢になるから、賑やかになるよ。お前さんも少し陽氣になつておくれ、何もさう案じることはない、運が向いてさへ來れば、またどんなことがあるか判らないもの。」

かうお民は言つた。とりとめもない不安の念が何所かへ消えて行つて、そこに何等か新しい途が開けるやうな氣がして來た。

「でも煩さいだらうよね、母やん。何所の誰だか知らない人ばかり來るんだもの、——そんな人の世話

しなくちやならないなんて、母やんは本當に氣の毒だと妾大に同情してよ。」

『だつて仕様がな。お父さんのことを思ふと、どんな苦勞したつて。』

お民は低聲で言つて亭主の寝姿をちらと見た。お千代もその方へ眼をやつた。徳太郎はまだ眠つきはしなかつたが、黙つて身動きもしなかつた。

『お前さんだつても、可哀想で仕方がないけれど、斯うなつちやつたんだもの、何とも仕様がな。誰もこんな風にしようと思つて爲たことではな。自然にさうなつたんだから、まあ諦め一お呉れ、一旦あんなことになつては、誰の力でも及ばないからね。——謂はゞお前さんの運が悪かつたのだよ、あまりくよくよ思はないで暫く我慢してお呉れ。』

『あゝ、妾も、もうすつかり氣をかへちやつてよ。——あゝ！ くさくしたつて仕様がな、母やん、これから妾も陽氣になつて、何でもして働くわ。』

お千代は調子をかへて元氣よく言つた。

『本當にさうしてお呉れ、くさくして身體を悪くでもしちや、何にもならないからね。身體さへ達者なら、これから以後どんないゝことがないとも限らないんだから。——なに、必然あるよ。どうせ世の中は七轉八起なんだから。よし駄目だつたにしろ、身體が達者なら、種々な世の中を見られるだけでも得ぢやないか。』

欠

欠

五

三四日して金井も引越して來た。今迄同じ下宿に居たのであるが、斯うして新しい所へ引移つて來て、一つ部屋に机を並べて坐ると、更に新しい若々しい友情が、小村にも金井にも湧いて來るのであつた。それは中學生同志のやうな初々しいものであつた。共に助け合ひ、勵まし合はうといったやうな氣持であつた。金井の歸りのおそい時には小村は待つて居て一緒に夕飯を食べるやうにした。飯をすますと二人はおきまりのやうに一まはり散歩して來て、それからまた暫く火鉢を挟んで話し合ふのであつた。すべてが彼等の氣に入つた。宿の人達のこと、賄のこと、待遇のこと、それから周圍の雰圍氣などについて噂し合つた。彼等は何事も善意に解して、意味のないことでも意味のあることのやうに思つて喜んだ。子供のやうな心、——それが引越した當座四五日間の彼等の心の状態であつた。

月がかはつて三月になつて暫らくしてから、階下の部屋もふさがつた。表の六疊へは河瀬といつて、株屋の客引をして居る若い男が來たし、その隣の三疊には、金造といふ經師屋の職人が居ることになつた。金造は濱の家へ時々仕事に來て、知合であるところから、河瀬は此家の主人と株屋町で知合になり且つ生國が同じいといふやうな關係から、それ／＼來たのであつた。しかし宿の人達の居る方の二階は

まだふさがらなかつた。

晩などは賑やかであつた。一人々々別々に御膳を出すのは面倒でもあらうし、それに皆一緒にかたまつて食べる方が美味しくもあらうといふので、こちらから話してさういふことにしたので、晩には宿の人達の居る所で、多勢賑やかに餉臺に向つた。仙吉が給仕したりお民が給仕したり、たまにはお千代がすることもあつた。

そして食後はそのまゝそこに居残つて、色々の話に笑ひ興じながら夜を更かすこともあつた。金造は落語家の眞似が上手で、よく滑稽けた話をして皆を笑はせた。

小村も金井も、さういふ人達とすぐ馴染んだ。今迄學生ばかりの間に居た彼等は、自分等と全く世界を異にして居るかうした人々の間に居ることが、非常に面白いことに思はれた。主人夫婦やお千代なども親しんで、互に遠慮気兼ねなどがなくなつた。

河瀬は毎朝主人の徳太郎と一しよに株屋町へ出掛けて行つた。金造はそれと前後して、いつもきまつたやうに大きな風呂敷を四つ折にして、それに刷毛や小刀や紙織などをくるくると巻いて近所にある親方の店へ出て行つた。金井も九時頃までには出掛けて行くのが常であつた。

小村だけはいつも正午過ぎまで残つて居た。彼は午後に出て行つて、二時間あまりするとすぐ歸つて來た。終日家に居ることも時々あつた。

『小村さんは大變樂です。遊んでてお金が取れるんですから。』

或時お民は小村に言つた。小村は半ば得意でもあり、半ば心外でもあつた。彼はお民の言葉によつて、自分が偉く思はれて居るやうな氣にもなり、また、自分の爲て居る仕事、容易なつまらぬことのやうに思はれて居るのではないかとも思つたからのである。

『そんなことはありませんよ。その代り自宅をやつてるんですから。』

『でも随分氣儘なんです。それでいゝんですか。』

お民は月給取りといふものは、朝八時から午後四時までといふ風に、毎日きまつて勤めるものだといふ思つて居たのといふ調子で言つた。

『えゝ、兎に角毎月雑誌一冊こしらへればそれでいゝんですから、必ずしも出て行かなくても出来るんですよ。』

『ようござんすね、そんな身分の方は。——だから月給取りがいゝわね。』とお民は隣に坐つて居るお千代の傍へ來て同意を求めるやうに言つた。

朝飯がすんで、皆出て行つた後に、小村はそのまゝ居残つて、仙吉が二階を掃除して居り、お民が臺所を片付けて居る間、お千代と火鉢に對ひ合つて話して居たのであつた。

『本當だわね。何といつても月給取りは宜いことよ。』とお千代はお民に同意した。

この話は今迄にも一二度、主人や河瀬やその他の人々と、小村と金井との間に論ぜられたことであつた。主人始め皆の者は、勤め人がいゝと言ふし、小村と金井とはそれに反対して商賣人などの方がいゝと言ふのであつた。で小村は今更このことについてお民やお千代などと言ひ争ふまでもないと思つたが、それでも矢張り黙つて居ることが出来なかつた。

『どうして！ 勤め人ほどつまらないものはありませんよ。』

『そんなことがあるもんですか。遊んで居ても、ちやんときまつたお金が入るんですもの。』

『その代りそれきりぢやありませんか。』

『それほど結構なことがありますか？ 降つても照つてもですかからね。』とお民は小村の言つたことを耳にしなかつたものの如く言ひ續けた。『商賣人なんか明日の日が分りませんからね。始終危ない綱渡りして居るやうで、何時落つこちるか知れないんですもの、家内中が心配しなげやなりません。』

『そりやさうかも知れないけれど、その代り少し景氣よく行くと占めたものですからね。尤も商賣のことですから、始終儲かつてばかり居ることはないでせうが、たとひ一度や二度失敗しても、またすぐ取り返すといふ見込があるぢやありませんか。まあ何より張合がありますよ。それに比べると月給取りなんて、全くつまりませんよ。表面は偉さうに見えて、その實本當に惨めなものですからね。僅ばかりの金に身體を縛られて、毎日てく／＼やつてゐるんですもの、それでも月給でも多けりや何ですが、どう

せ高が知れてますからね。そりや哀れなものです。九分九厘までやつと食つて行く位ですからね。』

小村は痛切に感じたもののやうにしみ／＼と言つた。

『それでも氣樂なのが何よりですわ、心配がありませんもの。』とお千代も口を挿んだ。

『何が氣樂なことがあるものですか、その證據に生活難々々と喧しく言ふのは皆月給取りぢやありませんか。實際みじめですよ。それに第一單調です。生活の有様から言つても、収入の點から言つても、ちやんときまりきつた函の中へ入れられたやうに、そこから一步も出られないんです、それに第一人間が卑屈卑劣になつていけません。自由な獨立した精神といふものが段々となくなつて了ふんです。官吏でも、銀行員でも、會社員でも、最初のうちこそ大きな野心も抱負もあるんですが、三年五年と経つうちには、どうでもして椅子にかじりついて居ることばかりを考へるやうになりますよ。免職にでもなりはしないかとそればかりびく／＼して、上役の鼻息を伺ふことばかり上手になるんです。さうして毎日機械のやうに手足を動かして居るうちに、いつの間にか人間が腐つて了つて、そして最後には老朽淘汰と來るんですからね、大抵きまつてますよ。』

『さう小村さんのやうに言つて了つては何だつて仕様がありませんわ。あなた方は立派な腕を持つて居なさんですもの、これからどんな出世でも出来るぢやありませんか。』とお民が言つた。

『は、は。皆なさう思つて働いて居るんですがね。さうでも思はなけりや……』と小村は哄笑して、『

體世間の人は何故勤め人がいゝといふのか譯が分らない。』といくらか嘲笑ふやうな口調でつけ足した。

『何より確ですからね、妻子を路頭に迷はすやうなことがありませんから。』

『全く商人ほど浮沈みのはげしいものはありませんわ。小村さんはさう仰有るけれど、どうしたつて月給取りの方が宜いわ、妾もう商人はつくづく厭になりました。いゝ時にはいゝけれど、何時どんな事があるか知れませんもの。ねえ、母やん。』とお千代は本氣になつて言つた。

小村はお千代の身の上について、一二度お千代自身の口からも、お民の口からも聞いて居た。で今のお千代の言葉が彼女が嘗めた最近の苦い経験が言はせるのだと思つた。勤め人の生活をば一圖にいゝものと思ひ込んで了ふほどに浮沈の多い商人の生活を恐れて居るのだと想像した。そしてたとひ彼等は公平に勤め人をば勤め人として、商人を商人として考へて居るのでなくて、妻としての立場から利己的に判断して居るのであるにしても、女としては然もあるべきことだと同情せず居られなかつた。そして彼はもつと、具體的に勤め人の生活の惨めさ、卑屈さを説明し、且つ罵倒しようと思つて居たのであつたが、さう思つて口を噤んだ。

『本當ですよ、小村さん。』とお民は今迄の議論がましい調子をすつかり變へて言ひ出した。『此の子でも私でも、今までほんとに辛い目に遇つたものですからさう思ふのです。實際あなたの仰有る通りかも知れませんが、——此の子も、もう養子でもしようといふ時分に、家が滅茶々々になつたんですから

ね。』

『それで今度は月給取りを養子にしようといふんだな。』と小村はすぐさう皮肉に推察した。

小村は其の日も彼は二時間近くもそこに坐つてゐたのであつた。二階へ上つて仕事をしようとして二度も三度も決心しながら、ついお千代の傍を離れがたく、愚圖々々になつて居た。彼は無爲の疲れを覺えて居た。

『あゝ、今日も半日遊んぢやつた——どうれ、少しやらうかい。』

態とらしく欠伸しながら斯う獨語つた。それはお千代かお民かが引止めるのを知つて居て、それを待つて居るものやうな口調であつた。

『まあ、小村さん、もつとお話して居らつじやいな、いゝでせう。』

案の如くお千代はさう言つて、媚びるやうな微笑を以て、斜眼に小村を眺めた。

その微笑がたまたまなく小村の官能を刺戟した。男をあやつる娼婦が洩らす微笑のやうに、妖艶な中にどこか卑しい影がないでもなかつたが、相手の男を魅するに十分であつた。

『さうばかりもして居られません。』といはねばならないやうな氣がして言つた。

『いゝぢやありませんか、どうせ午後でなければ行らつじやらないんですもの。』とお民も言つた。

『でも毎日ですからね、ちと勉強しなくちや。此頃は遊んでばかり居て仕様がな。』と彼は両手を高く

擧げて背伸びをした。

「妾が我儘言つてお邪魔するからですわね。」とお千代が言った。
「そんなことがあるもんですか。」

小村は此頃、お千代がある不思議な力を以て、彼の心の上に及んで居るのを感じた。朝飯がすんで、皆な出て行つた後に、かうしてお千代ととりとめもない話をして、半日を無爲に過ごすのが毎日のやうになつた。彼はお千代に惚れてでも居るやうに思はれはしないかと恐れたり、恥しく思つたりしながら、やはりお千代の側を離れ難かつた。

小村はもとよりお千代に惚れて居るなどとは自分では是認しなかつた。深くきはめて行けば或はさうかも知れないが、さう思ふことは彼の自尊心が許さなかつた。けれどもお千代のことを思ふことが、日に／＼多く、且つその度が強くなつて行くのを自ら感じもした。讀書の折や、仕事の最中などでも、よくお千代に對する思ひが頭を往來した。お千代の例の媚びある微笑や、孤獨の寂しさを訴へる時の、官能をそゝるやうな物の言ひ方や、聲音などから、特別に自分にのみさうするのではないのかといふやうな、都合のいゝ想像を逞しうしたりした。

「ねえ、小村さん、わたしほんとに寂しくて仕様がありませんわ。誰も友達はないし……」
かう、細い聲で、お千代は恰も小村にのみ秘密を囁くかのやうな調子で、よく孤獨の寂しさを訴へた

が、それを小村は特別に意味ありげに、何事かを彼れに求めて居るのだといふ風に解釋して、卑しい妄想に耽つたりするのであつた。

實際お千代は寂しさうであつた。火鉢にもたれて、腋の下から手を懐に入れて、ぼんやり物思ひに沈んで居ることが多かつた。時々「あゝ、あゝ」とか「焦れたい！」などと叫んで、火箸を強く灰の中へ突き刺したりした。それは時とすると、相手の同情を求めするために、態と人前に誇張して居るのだと思はれるやうなこともあつた。悲哀を虚飾にして居るんだといふやうな、不快な感じを與へることもないではなかつた。

でも小村は、優しい言葉をかけてお千代を慰めたり勵ましたりするのであつた。そしてかうしてお千代の側に愚圖々々して居るのをば、彼女の孤獨を慰めるために、話相手になつて居るのだと、自ら自分に辯解し、またお民やお千代に對しても、さういふ態度を装つて居た。

「小村さん、今日はお忙しいの？」とその時お千代は嬌然として訊いた。

「いえ、忙しいといふことはありませんが……何故です？」

小村は何か彼の心を喜ばすやうな依頼を豫期して居た。

「何故つていふこともないのですけれど、もし御都合が悪くなかつたら、お勤めに行らつしやるまで、此所に話して、頂戴ね——お厭？」

お千代は殆ど小村の顔と接する位までに、自分の顔をかしげて甘えた調子で言った。それは相手の男の心をとろけさせずに置かないやうな誘惑的な表情であつた。小村は額をかすめる温かい呼吸を感じた。彼は自分の呼吸がつかまるやうな気がした。そして最早殆ど心の平衡を失ひかけた。お千代の言つた言葉の眞實の意味を考へようとした。たゞお千代の何か求めるやうな眼付、誘惑するやうな微笑、手管の上手な妖婦のやうな媚びを含んだ物の言ひ様、それらが小村の心の窓を閉ぢて了つて、徒らに特殊の官能を鋭敏ならしめた。彼は身體中に血が動くのを感じた。彼はそこに、お千代と火鉢を挟んで坐つて居ながら、自分の身體が、お千代の身體に觸れて居るかのやうに感じた。淫らな夢から覺めて、尙その幻影を追つて居るやうな、齒痒い、遺瀨ない、一種言ふべからざる快感を覺えた。

彼は勿論お千代の願望を拒まなかつた。

『本當に我儘ばかり言つてすみませんわね。小村さんは温和おとなしいものだからつい、ね。勘忍してやつて下さいよ。』とお民が言つた。

『どういたしましたして。』と小村の聲はかすれて居た。

『御先祖様ですものね。』とお千代は、戲談のやうに笑ひ／＼言つた。

小村もはゝあと笑つた。

『とんでもない所に御先祖様が祟るわね。』とお民も笑つた。お民はお千代が斯うして晴々しく笑ふことの出来るやうになつたのを喜んだ。そして沁々と言つた。

『ほんとに、小村さんのやうないゝ方に來て頂いて、私達はどんなに喜んでるか知れないのですよ。お千代もお蔭で、此の頃は大變陽氣になりました。今までは無暗に鬱ぎ込んで居て、仕様がなかつたんですよ。』

『さうですか。』と小村はお千代の顔を眩し／＼と見て、『何故そんなに鬱ぐんですかね。』

『矢張り何でせうよ。家がこんなになつて知らない所へ來たので、自分も心細くなつたんでせうよ。——全く年頃に不幸な目に遇ふほど惨めなものはありませんからね。』とお民が説明した。

『そりやさうでせうね。』

しかしお千代は、お民のこんな平凡な、ありきたりな解釋にあきたらなかつた。

『そればかりでもないことよ、母やん。』と彼女は言つた。『わたしそんなことを何とも思つて居やしないわ。ですけれどね、かうしてただ一人居ると何だか妙に堪まらないほど寂しくなつて來るのよ。——何うしてでせうね、小村さん。一種の病氣なんでせうか。自然に暗いところへ落つちて行くやうなんですわ。』

『さあ、どういふものですかね、僕にははつきり解らないけれど、何かかう、たよりない、物足りない心持がするんぢやありませんか。何か求めては居るんだが、何を求めて居るのか自分では分らないやう

な氣持ちやありませんか。』

『さう言へば、そんなやうなものですわ。』

お千代は自分の心の中を言ひあてられたやうな氣がした。

『だから始終快々として、氣が焦らだつて仕様がなないのですわ。』

『その理由は極く簡單だ。男が欲しいんだ。肉の満足を欲してゐるんだ——。』

小村は急に冷靜な心になつて、さう皮肉に思つた。さう思つてお千代の顔を見ると、全體がぼつと熱つたやうな顔の、少しく高過ぎると思はれるほどの頬骨のあたりから、ぼこりと膨らみ上がったやうな紅い唇の邊に、抑へ難い欲求を藏して居るやうに思はれた。

『矢つ張り血の道の故ですよ。』とお民は何氣なく言つた。

『いやな母やん！ 妾、血の道なんかありやしないわ。』

お千代は言下に打ち消してお民を睨んだ。彼女はお民の言ふことが誤つて居るためではなく、そんなことを男の前に言ふのは恥づべきことだと思つて、母親をたしなめた積りであつた。

『さうです、血が多過ぎるんです。血のはげ場がないんです。養子をおとりなさい、すぐ治ります。』

小村は無暗に皮肉な心持になつて、さう言つてやりたいとさへ思つた。だが極めて穩かに言つた。

『矢張り一種のヒステリイなんぞせう。男の所謂神經衰弱ですね。僕なんかも始終さうです。どんなこ

とにも満足出来ないし、何をしても物足りなくて焦れつたくてならないのです。此の頃の若い者は、男でも女でも皆なさういふ病に罹つてゐますよ。『ふさぎの蟲』といふやつですね。』

小村は口から出任せに、相手にかまはずに言つた。自分ながらあまり漠然とした空疎な、善い加減なことを言つてると思つて可笑しかつた。

けれどもお千代はそれで満足を感じた。お民のやうに物質的ではなく、精神的に美しく解して貰つたのが、寧ろうれしく思はれた。そして彼女は自分もさういふ若い人達に共通な、何だか高尙らしい病に罹つて居る一人と思はれるのを、むしろ誇らしく感じた。

『さうですかね。どうしたらいゝんでせうね。』

『どうしたのですかね。何でも無理にでも面白いことをして遊んだ方がいゝですよ。したいと思つたことは何でもやるんですわ。兎に角世の中を面白可笑しく暮すやうにさへして行けばいゝんでせう。』

『もう私なんか駄目ですわ。面白いことなんかありませんわ。』とお千代は投げだすやうに言つた。

『何故です？』と小村は詰問するやうに言つた。『そんなことがあるもんですか。これからちやありませんか。』

『でも今更……』

『何が今更です？ 今更どうだといふんです？……女といふものは直ぐそんなことをいふから厭になつ

て来る。まるで虚飾みえにしてるやうに。」と小村は少し荒々しく言った。

「あら、随分ですわ、虚飾みえになんかそんなこと言ひませんわ。けれども實際さうなんですもの。小村さんたちは男だし、それからどんなことでも出来ますけれど、妾等女ですもの。それに家がこんなですから、駄目ですわ。」

「兎に角貴女にはまだそんなことを言ふ資格がありませんね。いくら女だつて、まだ二十かそこいらで、今更でもないぢやありませんか。そんなお婆さんじみたこと言はないで、もつと若々しく氣を大きくしてゐらつしやいな。惜しいぢやありませんか、そりや色々事情を聞くと、貴女がさう思ふのも無理はないと思ひますけれど、それだからつてそんなに悲觀したもんぢやありませんよ。」

「ほんとにさうですよ。」とお民は口を出した。「お千代はあんまり悄々せうせうし過ぎるんですよ。小村さん、ちつと叱つてやつて下さい。」

「まあ、家にばかり引込んで居ないで、時々銀座か浅草あたりへ遊びに行つて来るんですね。つまらないやうだけれど、またいくらか氣晴しにもなりますよ。」と小村は調子をゆるめて言った。

「行きたいと思ふんですけれど、妾一人ではいけませんわ、誰か連れてつて下さる方が出来るといふんですけれど。」

暗に小村に求めて居る様なのを小村は知つた。で「僕がお伴しませうか。」と言はなくてはならないや

うに思つて言った。

「御迷惑でせう？」とお千代は小村の心を誘ふやうに媚びを見せた。

「いゝえちつとも。貴女さへ構はなければ。」

「妾からお願ひしますわ、ねえ、母やん、連れてつて頂いてもいゝわね。」

「あゝ、いゝとも、小村さんが御迷惑でさへなかつたら、連れてつてお貰ひな。」

「ぢやどうぞお願ひします。」とお千代は嬌然けうぜんした。

「えゝ、近々に何處かへ行きませう。」

此時お民は立ち上つた。

「小村さん、私一寸髪結さんとこへ行つて参ります、歸つたらすぐ御晝飯にしますから、それまでお千代とそこに居らつしやいな、すぐ歸りますから。」

そして彼女は支度して出て行つた。

小村とお千代とは、そこに残された。粹な叔母さんかなんかが戀人同志を密會ひそかにせて置いて、體よくその場を外したやうだ、と小村は自分に媚びて思つた。

お民は、小村とお千代とが、かうして二人きりで居るのを、一向氣にかけなかつた。むしろ却つて、それを望む様子があつた。お千代が小村と話して居る時は常とは異つて元氣になり、愉快さうであるのを見て、彼女はお千代の寂しい境遇や心の中を察するあまり、なるべく二人を近づけるやうにさへ心掛けた。それで小村が二階に居るやうな時、お千代が一人つまらなさうにして居ると、

『ちつと二階へ行つて、小村さんと話でもしてお出でな。』と勧めることもある位だつた。

小村もそれを知つて居た。しかし今日に限つて、お民が態と氣を利かして行つたのではないかと怪しまれた。彼はさう思ふと何となく胸さはぎがして来るのであつた。彼は黙つて火鉢の中を見つめて居た。お千代も矢張り黙つて、灰をかきならして居た。小村の目は、お千代の動かして居る火箸に従いて動いた。

二人はふと顔を見合せて互に嬌然した。

お千代の顔はぼつと熱つて居た。少し眼を細くして、態と小村の視線を避けて、あらぬ方へそらして居た。何か心の中に湧きあがる情を仰へつけようとして居る様子があり／＼と見えた。

『何といふ誘惑的な表情をして居るんだらう！』

小村はさう心の中で叫んだ、もし自分の手が一寸でもお千代に觸れたならお千代は恰も熟しきつた果實のやうにそのままくづをれて来るだらうと思はれた。或はお千代自身も、さうされるのを待つて居るのではないかとさへ思はれた。

『さうだ、たしかにさういつた風情だ！ この手を動かせばいゝんだ。この手に鍵がにぎられて居るんだ！』

小村の手はぶる／＼慄へた。

しかし彼はその手を自分の意志で、または衝動で、動かすことを恐れた。もし此の手がひとりで、然り、自分が動かすのではなくて、手自身が自由に、勝手に、自動器械のやうにひとりで、伸びて行つたならと思つた。さうしたら、自分が自分のした行爲に對して、責任を負ふことはないと思つた。

彼は再び眼を火鉢の中へ落した。そして深く息を吸つた。髪の毛の匂ひ、香油の匂ひ、白粉の匂ひ、——それは『女の香』とでも言はねば説明し得ないやうな、一種美妙な匂ひが、お千代から流れ出て、小村の嗅覺を強く刺戟した。小村は火鉢の中へ顔をうつむけて、その匂を嗅いだ。そしてそのまま上眼をつかつて、すぐ自分の頭の前に、火鉢の縁から斜に膨れ出て居るお千代の胸のあたりを見た。彼はお千代の心臓の鼓動を聞くやうな氣がした。

「馬鹿！」

小村は心の中で自分を罵つた。そして弾機に弾かれたやうに頭をあげた。

「何といふ男だ！ 色情狂め！」

正午近い暖かさうな日光が、表通りに面した格子先の障子に一面にてか／＼と射して居た。ごと／＼とその下の溝板を踏んで通る人の影などが、影繪のやうにその障子に映つたりした。

「温かさうですわね、あすこは。」

お千代はうつとりした調子で言つた。小村もふり返つた。

「さうですね、あちらへ行きませうか。」

二人は立つて行つた。

暖かさうに日の照つて居る出格子の障子際に、二人は並んで坐つた。二人の間には何の界もなかつた。肩と肩とが擦れ合ふ位であつた。

障子の箝め硝子を透して射し込む暖い日光に包まれて、二人は暫くの間何も言はずに坐つて居た。長い間火鉢にもたれて、炭火の瓦斯を吸つて居たので、気分がもや／＼して居たが、こゝへ來ると爽然となつた。抑へつけられ狭められて居た胸が、廣く開いて行くやうであつた。

つい今まで小村の心を騒がせ波立たせて居た卑しい妄想は、跡方もなく消え失て、靜かな落ち着いた

欠

欠

『それからまだ出来ますよ。今のところでは、はつきり貴女に気がついて居ませんけれどね、兎に角男について注意なさい、うまく行くと非常に幸福になりますが、ひよつとすると男のために非常な苦勞をすることがあるかも知れませんから。——男難の相がありますね。は、は、は。』

小村は面白さうに笑ひく／＼言つて手を離した。

他愛のない戯れも、お千代には強^{あなが}ちさうとのみ思はれないやうな印象を與へた。お千代はもとより小村の言葉を信じようとするのではないが、しかし何となしに、或意味に於て自分の未來を豫言されたかのやうな氣がするのであつた。男のためであるか、また何の爲めであるか、それはもとより知る限りではなかつたが、自分は或る非常な不幸な境遇に陥るやうな氣がされるのであつた。

『ね、小村さん。』

やがて彼女はしみ／＼と言出した。

『そんな御戲談は別にしてね、妾、何だか大變不幸になるやうな氣がしてなりませんのよ。』
『どうしてです？』

小村はお千代がまた例のやうに身の上を嘆くのだらうと思つて別に氣にも止めなかつた。
『どうしてですか自分にも分らないんですけれど、たゞ何となしにさう思はれますの。』
『そんなことが當^{あて}になるもんですか、杞憂に過ぎないぢやありませんか。』

『さうかも知れませんが——』。

九〇

お千代は小村の同情のこもらない、月並の言葉を物足りなく思つた。もつと何とか色のある、熱のあるやうなことを言つて貰ひたかつた。尤もどんな事を言はれば満足するのか自分にも判然分つては居なかつたが。で彼女は、小村の同情を求めるやうに言つた。

『小村さん、あなたはまだ妾の境遇を詳しく御存じないからなんですけれど、もし父が此上失敗でもしたら、その時妾はどうなるとお思ひなすつて？』

『さあ。』と小村は一寸答に窮したが、『大丈夫ですよ、今からそんな末のことを氣にかける必要がないぢやありませんか。それまでにどうにでもなりますよ。そんな取越苦勞をするから身體を悪くするんですよ。』と言つた。

『でも心配しないでは居れませんもの。小村さんは自分のことでないからさう仰有るけれど、妾の身になつて見れば……妾は自家の犠牲にならねばならないんですわ。』

『犠牲？ どんな犠牲です？』

小村はむしろ嘲笑するやうな調子で言つた。お千代は暫し言ひ淀んだ後に言つた。

『ね、小村さん、妾打明けて言ひますわ。誰にも言はないで下さいね、小村さんだけに話すんですから。……妾都合によると、あの、……藝妓になるかも知れないんですわ。』

『藝妓に？ 何を馬鹿な！』と小村は殆ど一笑に附した。『そんなお芝居めいたことを空想するもんぢやありませんよ。』

『でもさうなんですわ、さういふ約束で来たんですわ。』

『誰と約束したんです？』

小村は尙ほ本氣にしないで、空嘯くやうに言つた。

『郷里くわいを出る時に、父からさう言はれましたのよ。』

『そして貴女はそれを本當にしてるんですか？』

『でも仕様がありませんもの。』

『ではまさかの時にはなる覺悟ですね？』

『……』

『そんな馬鹿なことがあるものですか。それはお父さんが親代々から住みなれた故郷を出なさるについて、非常な覺悟と決心とをなさつた證據に止まつて居るので、實際さうする積りで言ひなすつたんでは決してないですよ。自分自身をはじめ、貴女等を激勵しなされる爲です、たゞぼんやりと、商賣に失敗したから東京へ出て来る、もしそれでも困つたら娘を賣るなんて言ふやうな不眞面目な沙汰ではないのです。それほどもでにしても、必然成功して見せる！ といふ固い決心と希望と確信とを以て誓つて言

ひなさつた言葉ぢやないでせうか。』

小村は固い信念を以ての如く、稍々激した調子で言つた。

親が失敗して娘の身を賣る——世間によくありふれたことだ。しかしそんなことはあり得るものではない。人間はそんなことを爲るものではない……

小村は一方に事實を認めながら、一方感情の上、信念の上ではそれを否定しようとするのであつた。彼はこの實際に於ける明白な矛盾を知つて居たが、それでも尙ほさう信じようとした。勿論、親が自分等の爲に娘を賣つたり、娘が親の爲に身を賣つたりすることが不道德だからといふほどの明瞭した意味でさう思ふのではない。たゞ、『人間といふものは、そんなことを爲るものではない。人間はそんなものではない。』かう一途に信するまでであつた。少くとも信じたのであつた。

『そりやさうでせうけれど……』

お千代は小村の顔色を窺ふやうにして言つた。小村はお千代がまだ自分と同じ氣持にならないのをもどかしく思つた。

『あなたは、お父さんを信用しないんですか、お父さんがそんなことをなさると思ふんですか？』と彼は言つた。

『さういふ譯ではありませんけれど、……』

お千代は小村の言ふことは、もとより道理だと思ひ、且つ親切に激勵して呉れるのを嬉しくも、心強くも感ずるのであつたが、また父の冷酷な、たゞ自分の利害ばかりにかゝはつて、たとひ子であらうが誰であらうが、他人のことにはちつとも思ひやりも斟酌もないこれまでの仕打を、かの養子の離縁一件などに思ひ合せると、どんなことになるかも知れないと不安を感ずるのであつた。そして小村がこんな言ふのは何も知らないからだと思つた。そして言つた。

『世間にいくらもありますから。現に濱の家のねえさんだつてさうですもの。』

小村は自分に極近いところに事實を指摘せられて一寸困つた。

『併し文龍と貴女とは違ひますもの。』

『でも、あすこの家だつて、丁度自宅と同じでしたんですわ。』

『ではあなたは、若し萬一の場合があつて、お父さんが藝妓になれと言つたら、なる積りですか？』

お千代は暫く黙つて居たが、やがてほろりとして訴へるやうに言つた。

『ね、どうしたら可いものでせう？ 小村さん。』

『さうですね、それは一寸問題ですからね、もつと詳しい事情を知らねば何とも言へませんよ。いつかまた折があつたら話すことにしませう。だが併しそんなことは決してありませんから何も心配するに及びませんよ。もつと元氣におなりなさい。』

「有り難うございます。ほんとにつまらないことばかり言つて済みませんでしたわね。でもね、妾、外に話相手になつて貰へる人はなし、ほんとに寂しくて心細いんですわ。今度、小村さんやなんかに来て頂いてどんなにうれしく思つてるか知れませんかよ。」

お千代は甘えるやうな口調で斯ういつて、小村を見上げた。小村もお千代を見た。二人の眼と眼とが出會つた。そしてまた二人はそれを外らした。

瞬間の沈黙の後にお千代はまた言つた。

「どうぞね、小村さん、可哀相だと思つて、妾の力になつて下さいました。」

「え、僕の及ぶことなら。」

小村は口を硬張らせて答へた。そしてお千代の両手を取つてぐいと引いた。お千代は何の抵抗もなく小村の胸に顔を埋めた。

七

小村と金井との二人は、普通の下宿人とは思はれぬほどの好遇を此の家の人達から受けて居た。靴を磨いて呉れたり、留守の間に夜具蒲團を乾して置いて呉れたり、頼まなくとも襦袢やシャツなどを洗濯して呉れたり、出入の度毎に、お民やお千代が送り迎へして呉れたり、食事でも、これでは實際商賣にはなるまいと思はれるほどであつた。まるで客人扱ひのやうであつた。

所謂「御先祖様」だといふこともその原因の一であつたらう。また二人が大學を出た人々であるといふこと、従つて二人とも立派な人物であり且つ裕福な家の息子達だらうといふ想像から起る尊敬の念や、さういふ人達が下宿などして不自由だらうといふやうな同情や、またお千代の爲に此上もない話相手であり慰藉者であるといふやうなことや、種々の事情が交つて特に大切に取扱はれて居るのであつた。

同宿の河瀬でも金造でも、此の事實を知つて居たが、別段これを怪しみもしなかつた。彼等は同じ下宿人でありながら、小村と金井とだけが、自分等とは異つた特別の取扱を受けてゐるのを、むしろ當然のことのやうに思つて居た。

『何しろ善い家が見つかつたものだ。』

金井はよくさう言つた。

『東京の様子を知らないからだらうよ。僕等のやうに學校でも出たものは、非常に偉い者のやうに思はれるんだから。その中に箔が落ちるよ、兎に角暫くでも優待されてる方が僕等のためにいゝね。』と小村が言つた。

『それにね、矢張り以前が善い家で、暮し向きがよかつたんだから、何かにつけて違ふんだね。』
金井はそんなことを言つて喜んだ。

小村も金井も此頃は外へ遊びに出ることは稀になつた。社から歸つて飯になるまでも、飯をすました後も、階下で家の人達や、河瀬や金造などと雑談に耽つて過ごすことが多かつた。主人と河瀬とが相場の話などするのを、小村や金井は珍らしがつて聞くし、また小村や金井の仕事の話などを、外の人達は珍らしがつて聞くといふ風で、殆ど毎晩のやうに話がはずんだ。その上金造が、外の人達の話がやがて盡きる頃になると、今度は自分の番だといふ風に、得意になつて落語家の眞似事をやり出した。口の大きな、殆ど眞四角な、そして切り立てたやうに平つたい、落語家によくありさうな滑稽な顔を歪めたり、しかめたりしながら、手つきや身振などに剽輕のありたけを盡して、多くは聞くに堪へぬやうな、淫らな下がかつた話をべら／＼喋舌つて皆を笑はせるのであつた。いつものことで、聞いてゐる者が飽きようが、そんな事は構はない、誰か一人でも面白がつて笑へば、益々得意になつてやるといふ風であつた。

そんな風で、小村も金井も、今迄に覚えぬ賑やかな家庭的な空氣に浸ることが出来たが、その代り勉強などは少しも出来なかつた。尤も二人ともそれを悔いようとはしなかつたが。

時々小村でも金井でも、宜い加減に切り上げて、二階へ上らうとしても、お千代が『まあ、もつと話して行らつしやいよ。まだ早いことよ。』とか、或は『もう遅いわよ、今から行つたつて勉強なんか出来ないことよ。』とか言つて艶かしい嬌態を作つて嘆願するやうに引止めると、彼等はもう魔術にかゝつたやうに動けなくなるのであつた。

『何だ、俺はこの女の虜になつてるのか！ 馬鹿々々しい！』

小村は時々我に歸つて自ら反抗して見るのだが、何にもならなかつた。そして、

『金井も矢つ張りさうだ。この女の媚びある一瞥を獲るために、この男も馬鹿になつて居る！』と思つた。
今迄、朝は早くて、歸りの遅かつた金井が、此頃になつてすつかり反對になつたのを小村は皮肉な心で黙つて眺めて居た。朝も大抵十時過ぎまで居るし、午後は、小村より早く歸つて居ることが度々になつた。歸るとそのまゝ二階へもあがらずに居ると見えて、洋服を着たなりに、長火鉢にお千代と對ひ合つて凭れて居るのを、小村はよく見かけた。そんな時には、小村は態とさあらぬ體を装つて、二階へ上つて行つた。

『矢つ張り金井も捕虜になつてやがる、ふゝむ！』

小村は心の中で金井を笑ひながら、それでも何となく嫉しいやうな氣持がされるのであつた。そしてそれはくしながらも、態と二階から降りないやうにして居た。

一方の二階へも二人連れの客が来て居た。二人とも矢張り大學を出たといふことであつたが、まだ定まつた職業をもつて居なかつた。中途から来ただけに、彼等に對する取扱が小村や金井に對するのとは全く異つて居た。彼等自身も只の下宿人といふ態度で居り、家の者もまたその氣で取扱つて、お互に向親しまなかつた。朝晩の御飯も、彼等のだけは別にお膳をこしらへて仙吉に二階へ持たしてやり、小村や金井にしてやるやうな世話などは少しもしなかつた。恰も小村や金井や河瀬や金造が此の家の譜代のものであつて、彼等二人は外様だといつたやうな工合であつた。階下へ降りて来て皆の者と交つて話すといふこともなく、また家の者もそれを勧めることはしなかつた。

彼等は何をするといふこともなく、毎日ぶら／＼遊び暮して居た。朝はおそくまで寝て居り、夜は毎晩のやうに遊びに出掛けた。そして歸りは大抵夜更けで、泊つて来ることも度々であつた。時々近所の藝妓が遊びに来たり、料理屋か待合かの女中らしい女が、勘定でも取りに来るのか、訪れて来ることもあつた。

さういふ理由で、彼等は主人はじめ他の人々の間に信用がなかつた。

『今日もまた藝妓が来たのよ、屹度呼び出しに来たのに違ひなくつてよ。だから今行つたんだわ。』

或晩も二人が出て行つた後でお千代は眉をひそめながら言つた。

『何うする積りなんだらう？ あんなに遊んでばかり居て金が要つて仕様があるめえ。』と主人は我が事のやうに氣遣つた。

『妾もう大嫌ひ！ だつて毎日のやうに藝妓なんか家へ引入れたりしてさ。まるで家を自分等の淫賣宿か何かにしてゐるんだよ。お父さん、あんな人達斷つてお了ひなさいよ、家の信用にかゝはるわ。』とお千代は神經的にさも憎さげに訴へた。

『お前のやうにさう言つたものでもないけれど、全くだらしが無いわね。』とお民はやさしく言つた。

『でも藝妓を引入れるのだけ斷つたつて差支ないわ、家は待合ぢやありやしない。』とお千代は尙ほ反抗的にむきになつて言つた。『そしてその偉さうなつたらないわ。人を下女か何かのやうに「おい、お湯持つて来い！」だなんて言ふのよ。』

『はッ、どうも相済みません。へい、お嬢さま、つい、その、どうも……』と金造は馴れた身振をして茶化した。

皆笑つた。お千代も仕方なしに笑つて、

『いやよ、金さん、茶化しちや。』と眼で叱るやうに言つた。

『はッ！』と金造は更に大袈裟に叫ぶやうに言つて、頭を疊にすりつけ、恰も蠅のやうに頭の上に兩手を

合せて拜みながら、詫言を言ふのであつた。

それでまた暫く笑ひが止まなかつた。

「兎に角よほど金持の家の息子さん達と見えますね。」と河瀬は持前のねち／＼と重々しい口の利きやうをした。そしてその小さい眼をしばたゝいた。これも此の男の物を言ふ時の癖で、それが爲に、眼が悪いのではないかと人に思はせるのであつた。

「いくら金持でも、あゝいつまでも金ばかり遣つて遊ばれちや、やり切れないやね、どんな親か知らねえけれど。」と主人は、おれが親だつたらそんなことをさせて置かないといつたやうな氣持を示して言つた。

「全くですね、あれでは大學を卒業しても、まるつきり甲斐がありませんね。」と河瀬はまた眼をしばたいた。

「あゝ／＼、善い親があつたもんだね、大學を卒業するまでに散々學資金を仕送つて、卒業してからは藝妓買ひの金を仕送つて呉れるんだからね。」と金造は皮肉のつもりで、態と感嘆的な口調で言つた。

「金さんが言ふと、何でも可笑しくなつて了ふわね。」とお千代は本當にさう思つて笑ひながら言つた。

金造は「えへ／＼」と笑つて居た。さう言はれたのが得意のやうでもあり、きまりが悪いやうでもあつた。

「如何です、小村さん達もちつとお馴染を連れてお出でなすつては。」と河瀬はやゝあつて小村と金井との方に向つて言つた。

小村は今まで黙つて、此の人達の話を聞いて居たのであつた。此の人達が單に事實の表面だけを見て、自分等の低い見地から他人の全體を輕卒に評價するのを片腹痛く思ひ、また一方には、それによつて批評する彼等自身の氣持なり、物の觀方なり、延いてはその性格なりがわかるやうな氣がして、興味深いことに思つて居たのであつた。お千代のただ感情的に動くこと、徳太郎や河瀬の、ともすれば金錢問題をすべての尺度とするやうな傾向、ただ滑稽ばかりに生きてゐるやうな金造、——かういふやうなことを彼等の話し振りから推察して居たのであつた。

で、今河瀬から冗談半分に話しかけられて、彼はそれに答へるのが面倒くさくもあり、且つ答へるほどのことでもないと思つたが、黙つて居るわけにもいかなかつたので、

「そんな洒落れたものがあると、言ふことがないんですがね、駄目ですよ、我々は——」と眞面目らしく答へた。

「そんなことがあるもんですか、小村さん達がそんなこと言つた日にや仕様がなない。」と河瀬は冗談とは思はれぬほど本氣になつて言つた。

『どうして——？』

「だつて、——學問はあるし、男はよし、月給はうんと取つてなさるんですもの。女の一人や二人ないといふ筈があるもんですか。」

「あはゝ。」と小村は哄笑した。

「そんなだと可いがな。」と今迄お千代の隣に坐つて夕刊を読んで居た金井は始めて口を出した。

「さう思はれるだけでも有り難いね。」と小村は笑ひく言つた。

「巧いこと言つてなさるよ、小村さんは。」とお民は薄笑ひしながら口を挿んだ。「うそですよ、河瀬さん。小村さんに無いなんてことがあるもんですか。」

「小母さんまであんなことを——。」と小村はお民を睨むやうに見た。

「かくしたつて駄目ですよ、ちゃんと知れてるぢやありませんか。」

「ねえ、金さん——。」とお千代も意味あり氣な笑ひ方をして金造を誘ひ出すやうに呼びかけた。

「えへ。」と金造はニタ／＼笑つて、小村の顔をちらと伺ふやうに見たが、すぐ眼を外らして天井を見つめた。

小村は皆が濱の家の文龍のことを諷示して居るのだといふことを知つて、恰も祕密を摘發あはされた時に感ずるやうな、殆ど本能的ともいふべき羞恥を感じた。それは若しこゝにお千代が居なかつたら感じないだらうと思はれるほどの微弱な感情であつた。彼はお千代に自分が文龍と關係があるやうに疑はれて

自一〇三頁

至二二頁

落丁

明治十九年十一月拾四日



呉れるといふんだけれど。』

『小村さんは、賢いからよ。』とお千代も皮肉らしく言つたが、すぐ微笑した。

小村は悲しげな苦笑を洩らした。

『でも、ちやんと惚れてる人があるぢやありませんか。』とお民は薄笑ひしながら言つた。また文龍のことを言ふのだと思つて小村は不快な氣がした。

或る日金井は正午近くなつて漸く出て行つた。

朝寝坊の金井はその日も小村やその他の者が飯を済ますやうな頃になつて漸つと起きて來たのであつた。髪を蓬々とさせ、寝衣のどてらの上に細帯をだらしなく締めて、顔も洗はずに、皆の飯を食つて居る側に先づ新聞を擴げた。尻をおつたてゝ讀んで居る姿は如何にもだらしのないものであつた。

「さ、金井さん、早く顔を洗つていらつしやいよ。」とお民は急ぎ立てるやうに言つた。

「う。」と金井は口の中で答へたが、尙ほ新聞から離れなかつた。

「ほんとに金井さんはだらしが無いわね、早く起きて呉れなんて言つてる癖に、幾度起しに行つても中起きないし、やつと起きたと思ふと、今度は御飯まで中々長いんだから。邪魔つけで仕様がな。い。」とお民は調戲ふやうに言つた。

「ねえ、母やん、金井さんてばね、そりや可笑しいのよ、妾が行つて起してあげるでせう、さうするとね、蝸牛か龜の子のやうに、だん／＼首を縮かめて引つ込んで行つて了ふのよ、こんな風に。」とお千代は身振を眞似て、快活に笑ひながら言つた。

「どうしてあゝ眠がりなんだらう。小村さんはまた馬鹿に早起きなんだのに。」とお民が言つた。

「ほんとよ、小村さんは随分眼早いわね。妾がどんなに窃ちゆうと行つても、何時でもパツチリ眼を開けなされるのよ。氣味が悪い位よ。——矢つ張り金井さんの方が、小村さんよりか、晝間忙しいから、多く疲れなさるんだわね。それでも可愛らしいわね、どんなに眠たくても、起されるとおとなしく起きて來るか。」

小村はもう飯をすまして、煙草を喫つて居たが、今お千代の言つた最後の言葉や、お民の言つたことが、變に金井に同情し、且つ庇ふやうに聞えて、嫉ましいやうな不快な氣持を起させた。

小村は實際早起きであつた。それと正反對に金井は朝寝坊であつた。それは學生時代からさうであつた。金井はこゝの家へ來た時にも、そのことを言つて朝は起して貰ふやうに頼んだのであつた。最初は大抵小村が起した。仙吉もよく起しに行つた。が此頃はお千代が起しに來ることが多くなつた。小村は六疊の縁側の方を枕にし、金井は三疊に、小村と直角になつて寝るのを常としたが、お千代はいつも忍び足に段梯子を上つて來て、窃ちゆうと開き戸をあけて入つて來るのであつた。その時分は小村は大抵起きた後であつたが、寢床に居ても眼を覺まして居た。よしまた眠つて居る時でも、お千代が入つて來ると、彼はすぐパツと眼を開くのであつた。

お千代は窃ちゆうと小村の裾を踏んで、三疊へ入り、金井の枕元に坐つて、

「ねえ、金井さん、ねえ起きなさいよ、もう遅いんですよ、ねえ——」と細い艶めいた、男の官能をそそるやうな聲で起すのであつた。それは男を刺戟せずにはおかないやうな彼女特有の聲であり、調子であつた。

『うむ、うむ。』といつては金井は首を引込める。

『いゝこと？ 早く起きなさいね。』と言つてお千代は降りて行く。やがてまた上つて来て同じやうに起すのであつた。

金井はまるでお千代がかうして起しに来るのを態と待つて居て、そしてお千代の艶めいた聲や調子によつて起される官能の快味を嗜み貪らんがために、態と起きないのではなからうかと小村が疑ふほど愚圖々々して居た。實際金井の朝寝坊は持前であつた。どんな急ぐ用事があつても、ぎり／＼まで寢て居て一刻でも多く寢床の中の快さを貪らうとするやうな男だつた。小村はそれとは反對に、持前の神経質のために、どんな夜中でもどんなに熟睡して居る時でも、一寸自分の室内に人の氣配がするとすぐ眼をさます性質の男だつた。——疲れて居る居ないは、何の關係もないことであつた。朝起きてからでも、小村と金井とは態度が異つて居た。小村は手早く顔を洗ひ、髪を梳ぶり、きちんと身じまひした後でなければ何事もしなかつたが、金井はそれと反對にいつまでものろくさして居るのが常だつた。それをお千代が、晝間の疲れが小村よりも多いからだ、と、金井により多く同情したらしい口吻で言つたのが、小村をして輕いけれど、いやな嫉ましい氣持を起させたのであつた。

それは實際取るに足らないケチな事柄であつた。彼はよくそのことを知つて居た。けれどもそれを氣にし且つ僻ますには居られなかつた。彼はそれを自ら是認して、こんな些細な點にこそ人間の微妙な心理が認められるものだと思つた。そしてお千代の心、従つてお民の心までが、いつの間にか自分を離れて、次第に金井の方に傾いて行きつゝあることを認めないわけにはいかなかつた。

では何の爲にそんなことが氣になるのか？——彼はかう反問して自ら自分のやましさをしさを恥ぢ且つ憤るのであつた。

金井はまだ新聞を讀んで居た。

『さあ、金井さん、早く顔洗つて御飯を召しあがれよ。』とお民は急ぎ立てた。

『う、今。』

『おそくなるぢやありませんか、遅れてもいゝんですか。』とお民は叱るやうに言つて、勝手に金井の飯をよそつた。『さあ、御飯つけましたよ。お千代、金井さんの新聞取り上げてお了ひよ。』

『いゝぢやないの、母やん。金井さんは用事があつて見て居なさるんだもの。』とお千代はお民に抗つて、金井を庇ふやうに言つた。

『もう片付けて了ひますよ。』とお民は氣短かに、しかし笑ひながら言つた。

金井は漸く顔を洗つて來た。その時には主人も河瀬も金造も、もうそれ／＼仕事に出て行つて了つて居た。

それから暫くして、金井はお千代の給仕でひとり緩々と飯を食ひ始めた。お千代も一緒に箸を取つた。そしてそれからまたその儘二人は火鉢に向ひ合つて居た。

小村は金井が顔を洗つて居る時に二階へ上つて了つて居た。

『金井はお千代に給仕させて、二人さし向ひで飯を食ひたいんだらう、俺達が居なくなるのを待つてるんだらう。』

かう小村は邪推して座を外したのであつた。そして彼は机に向ひながらも、妙にそは／＼して落着かなかつた。彼は階下の部屋で、お千代と金井とが夫婦か何かのやうにさし向ひで飯を食べ、それから後、火鉢に相對して話し合つて居るであらう光景を想像した。自分も今迄に幾度も経験したやうに。——とお千代の媚惑的な姿態や、それに捕虜となつて身動きも出来なくなつて居るやうな金井の様子までが眼に見えて、腹立たしくも嫉ましくもなつた。侮蔑や嘲笑さへも感じた。

すつと以前の朝のことがまさ／＼と小村の眼の前に浮んで來た。

『小村さん、どうぞ私の力になつて……』

お千代のあの訴へるやうな、身を任したやうな聲が、今でも聞えるやうに感ぜられた。自分の胸に顔を埋めて、捕はれた小鳥のやうに戦いて居た、あの可憐な姿が、その儘に活々と眼の前に浮きあがつた。その時の異様な官能の刺戟が、今でもその儘に感ぜられるやうな氣がした。そしてそれと同じ光景を、彼は今お千代と金井との間に描いて見ずに居られなかつた。そして異様に心が騒いだ。ちつと無關心には居られなかつた。

そこへ金井が一寸上つて來て、手早く洋服に着換へた。

『おそくなつちやつた。』

かう彼は小村に申譯をするやうに呟きながら階下へ降りて行つた。が、また暫くそこで愚圖ついて居るらしかつた。その想像がわけもなく小村を焦々させた。

『小村さん、お茶が入りました。』

お千代が階下から高い聲で小村を呼んだ。小村は態と下りて行かなかつた。

やがて、がら／＼と表の格子のあく音がして、續いてコツ／＼と金井の靴の音が二階まで聞えた。

『馬鹿！』

小村は思はず口の中で罵り叫んだ。

それからももの二十分も経つてからであつた。微かな、殆んどそれとも分らぬほどの衣摺れの音を、

小村は聞いたやうに思つた。彼は耳を澄ました。そしてお千代が上つて来たことを知つた。

小村はお千代が二階へ上つて来ることを、その足音でなく衣摺れの音で知るのが常であつた。實際お千代が梯子段を上つて来る時に、足音をたてるやうなことは殆んどなかつた。どうして歩くのだらうと怪しまれる位、ひそやかに来るのであつた。それは態と忍び足に来るのではなく、踊のたしなみのある彼女には、自然にその動作にさういふ静肅かさが具はつて居るのであつた。

隣室などで、女の衣摺れの音を耳にするのは何となく床しくなまめかしく、殊に若い男の官能を刺戟して、仇な心をときめかし易いものだ。小村はこれまでお千代によつて、幾度もさういふ氣持を経験させられた。殊に最初の間は、お千代が足音を立てずに忍ぶやうにやつて来るのを、心あつてのことと勝手な意味をつけて、自分の感情を弄びさへもしたのであつた。

彼はつい今迄、彼女と金井との間柄に關して不快な想像に苦しめられて居たにも拘らず、今お千代が例のやうに静肅しじゆうに上つて来たらしいのを感じ知つて、さすがに心の騒ぐを覺えた。

カチリ、と開き襖の把手に手を觸れた音がした。

小村は慌てゝ居坐を直し、無理に机の上の書物に眼を据ゑつけ、態と氣附かぬやうな様子を装つて居た。

「小村さん、御勉強？」とお千代は襖を細目に開いて、半身を露はした。

「あ、お千代さんで——」と小村は始めて氣がついたものの如く振り向いて言つた。

「御勉強？」とお千代は重ねて訊いた。

「いや——」と小村はどぎまぎした。

「今、お茶が入りましたからお呼びしたのよ。來らつしやらかなかつたわね。」

「え、一寸読みかけて居たので——まあお入りなさい。」と小村は火鉢を押し出すやうにした。

「有難うございます。小村さん階下へ來らつしやいな。」とお千代は同じ所に同じ姿勢に立つて居た。「お忙しいの？」

「いや、ちつとも。——まあ、あなたお入りなさい。」と小村は浮腰になつて熱心に勧めた。そして背後にあつた客用の座蒲團を火鉢の向うに敷きさへした。

「階下に誰も居ないんですの。」

「小母さんは？」

「母さんは今一寸買物に——」

「仙ちゃんせんちゃんは居るんでせう？」

「え、仙は居ますけれど——」

「ぢや、いゝぢやありませんか、暫く——」

『ですけれど——』とお千代は振返つて梯子段の下を見下ろして居た。

小村はたゞわけもなくお千代を呼び入れたかつた。彼は此の儘お千代が階下へ降りて行きはしないかといふことを非常に恐れた。

『まあ、いゝでせうがね。』と小村は恨むが如く、少し聲を曇らせて言つた。

今迄、こちらから勧めるまでもなく、自分から『少し居させて頂戴な』とか、『お邪魔でないこと?』などと、媚を呈して入つて來たのにと小村は思つて、自ら暗い心になつた。彼は暫く黙つてうつむいて居た。

お千代は心なくも小村の氣を悪くさしたらしいのを知つて、氣まづく思つたが、さて此の儘入るのも何となく氣が知れるやうに思はれて、尙入り兼ねて居たが、またそのまゝ歸つて了ふほどの勇氣も理由もなかつた。妙な羽目に陥つたやうな心地で、何かいゝ機會を待つつもりで瞬時躊躇して居たが、

『二階は日當りがよくて暖かですね。』と、てれ隠しのやうに言つて入つて來た。併し彼女は小村の期待に背いて彼が身振りで指し示した火鉢の側の蒲團の上には坐らずに、そのまゝ障子をあけて、縁側へ出て行つた。

小村は忌々しげに、そのつんとした(と彼には思はれた)後姿を見送つて、お千代には聞えぬほどの小さい舌打をした。

欠

欠

『何、氣なんかちつとも悪くしません。』

そして小村は腕組して、かたく口を結んで火鉢の中を見つめて居た。お千代は火鉢に手をかざして、その細い美しい指を動かしながら、それを眺めて居た。

『細い指だこと。』とお千代は獨語のやうに言つた。

『美しい指ですね、白魚のやうだとはそんなですね。』

小村はやはり腕組をしたまゝであつた。彼れはその白魚のやうな指を手に取らうとしなかつた。

『駄目ですわ、東京へ来てから、ちよい／＼水仕事するから、すっかり荒れちやつてよ。』とお千代は心に誇りを感じながらもさう言つて、指先を動かして居た。

話はそのな無意味な所に停滞して居て一向進まなかつた。お互に心を開いて話すやうな気分にならなかつた。

お千代は氣づまりなことに思ひながら、それでもそこを去ることが出来なかつた。

『御勉強のお邪魔にならない？』

やがて彼女は何氣なく言つた。

『いえ！』小村は眉を擧めた。『いゝぢやありませんか、そんなに僕のところ居るのが厭ですか！』

小村の聲には怒りと怨嗟と哀訴との情がこもつて居た。彼は鋭くお千代を見つめた。

お千代はハツと當惑した。

二二八

「いえ、そんなぢやないのですよ、お忙しいのだと思つたからですわ。」といくらか不平さうに言つたが、急に氣を換へて、「お茶一つ入れませうね、妾入れますわ。」と機嫌を取るやうに言つて床の間にあつた茶盆を取つて來た。

「有り難う。」と小村はお千代の注いで呉た茶を一口飲んで、一寸視線を外へ向けて、何か考へて居るやうにして居たが、やがて向き直つて、

「お千代さん。」と呼んだ。

「え——？」とお千代は氣遣はしげに答へた。「何です？」

小村は暫く言ひにくさうに下を見て居たが、

「お千代さんは、何でせう？……」と言ひ淀んだ。そして彼はさういふ場合によくするやうに、腕組して膝を揺すつた。「……お千代さん……は怒つて居なざるんでせう？」

「何をです？」お千代は氣輕に答へた。何もかも呑み込んで居て、態と聞き返すといった風であつた。「ちつともそんなことはありませんわ。」

「それならいゝですけれど……」

小村は疑はしげに、また厭味らしく言つた。

「何かそんなことがありましたか。」

「いや、別にそんなことがありませんけれど、たゞ僕の心からか、近頃のあなたの様子が何だかさう思はれるんです。」

「どうしてでせうね、妾にはちつとも分りませんわ。」とお千代は穩かに言つた。そして自分が、此頃他所々しくして居るので、小村がこんな厭味を云ふのだらうと思つて暗い心持になつた。そして尙ほ言葉が続けて、

「……もしそんなことがあつたら遠慮なく言つて叱つて下さいね、ねえ、小村さん、妾こんな我儘者ですから、どんなことがあつたかも知れませんわ。それに小村さんを見さんのやうに思つてちつとも遠慮なんかしないものですから。」と詫るやうに言つた。

かう巧みに下手から柔かく逆襲されると、小村は話の腰を折られて、一寸言葉に窮した。

「いや、そんな譯ぢやないんです。僕は此間あんな失禮なことをしたので、非常に濟まないと思つて後悔して居るんです。」と小村は稍ぎこちなく言つた。

お千代は此間の朝の事を思ひ浮かべて、さつと顔を赧らめた。小村に手を取られたまゝ、小村の胸に自分の顔を埋めて居た、あの取亂した瞬間の光景が再び眼の前に映し出されて、彼女は自ら羞恥を感じざるを得なかつた。

「妾こそですわ、……妾こそあんな失禮なことを……」とお千代はうつむいたまゝ小さな聲で言った。
 「まあ、悪く思はないで下さい。」と小村はお千代の言葉を耳にしなかつたもののやうに言った。「僕はあのことが氣にかゝつて、夙うから謝まらうと思つて居たんですけれど……随分失敬だと恨んで居なさるでせう。」

「恨むなんて……」

「それならば有り難いですが……」

「……嬉しく思つてる位ですわ。」

お千代は深い考もなくさう言つた。

「本當ですか？」小村の語氣は強かつた。

「……」

「ね、お千代さん……本當ですか？」と小村は急ぎ込んで噎れた聲で言つた。

「……」

お千代は黙つてうつむいたまゝ羽織の紐を弄つて居た。そんな話を引出されても、彼女は小村に對して再びその時のやうな氣持に戻ることは出来なかつた。
 長い沈黙が続いた。

「どうしたんです？」

小村はお千代が黙り込んで居るので優しく尋ねた。

「どうもしませんわ。」

お千代は始めて嬌然した顔を見せた。

「でも妙に考へ込んでゐなさるから。」

「いえ、別に——」と言つて、お千代は今一度嬌然となつた。「——小村さんはよく何でも氣にかけなさるわね。」

小村ははつとした。自分の性格の弱點を言ひ當てられたやうに思つた。實際この猜疑心の強いのは彼の弱點であつた。他人の一寸した異様な眼付、身振り、暗示なども、彼はまるで聾者のやうな猜疑の眼を以て、それを意味ありげに眺め、且つ疑ふのであつた。彼が今お千代に言つたことは強ちさういふ意味ではなく、たゞ話を引き出す爲であつたに過ぎなかつたが、お千代のこの言葉はたしかに彼の急所を衝いた。彼れは或思ひに水をさゝれたやうに少しくれた様子で、

「そんな譯ちやありませんが——」と苦笑にまぎらした。

お千代も悪いことを言つたといふ風に、

「戯談よ、小村さん。」と笑ひにまぎらした。

「兎に角ね、お千代さん、」と小村はお千代の手を取りたさうな様子さへして、「此間のことは僕は決して悪戯でしたことではないのですから、どうか悪く思はないで……」とまた話を前へ引き戻して行つた。

「決して悪くなんか思ひませぬわ、わたしは小村さんがあんなに親切に言つて下さるのを有り難く思つてゐるんですわ。」

「さうですか……それで安心しました。」

こんなことを言つて居ても二人の心は一向融け合はなかつた。お互に心の底を打割つて、しんから觸れ合ふことも出来ず、妙な蟠まりを互の胸に抱きながら、強ひて調子を合せて居るやうなところがあつた。

「ねえ、小村さん。」とお千代は暫くしてからしみぐした調子になつて言つた、「妾、小村さんにお願ひがあるのよ。」

「どんなことですか？」と小村は怪訝さうに尋ねた。

「諾いて下さつて？」とお千代は例の媚びるやうな眼差をあげた。

「僕に出来ることなら——何ですか？」

「何でもないことですけど——ねえ、小村さん、あの、何時までも自家に居て下さいますか？」

「え、居ますとも！」と小村は言下に答へた。が、何故お千代がそんなことを言ふのか解らなかつた。

「どうか何處へも代らないで居て下さいな、お氣に召しますまいけれど。」

「どう致しまして——」

「お願ひしますわ、お家庭をお持ちなさるまで。」

「御厄介になります。」

「でも、もう直に奥さんをお持ちなさるんでせう？」

「何を言ふんです。」と小村は咎めるやうに言つた。

「もう、ちゃんと定まつて居なさるんですわ。」とお千代は獨りぎめして言つた。

「そんなことがあるもんですか。」

「本當？ 隠してなさるんでせう。」

お千代は不思議に眞面目であつた。それは小村をして、お千代が何事かを暗示して居るのではないかとさへ疑はしめた程であつた。

「何を隠すもんですか——、そんなこと聞いてどうするんです？」

お千代はそれには答へないで、

「金井さんは定まつてなさらないの？」

「詳しくは知りませんが、勿論そんなことはありませんまい。」

「いゝわね、小村さんでも、金井さんでも、これからどんな奥さんでも好きな方が持てるんですから、美しいわ。」

「またそんなこと！ あなただつてさうぢやありませんか。」

「妾なんかどうせ……此間お話しした通りですもの。」

小村はまた同じことを繰り返すつまらなさを思つて黙つた。

「妾にも兄か、弟か、男の兄弟が一人あるといふんですけれど。」とお千代は稍あつて獨語の様に言つた。

「いゝぢやありませんか、一人娘の方が——」

「でも淋しいし、頼りないことよ。——小村さん達が居て下さるから、妾この頃こんなに元氣なのですけれど、そりや今迄、誰アれとも口をきかないで終日黙り込んでばかり居ましたのよ。さうするとね、何だか悲しくつて心細くて、深い穴の中へでも落ちて行くやうな氣になつて仕様がないの。——妾、小村さん達が居なさらなくなつたら、どうしようかと思つてるんですわ。」

うまいことを言つてる、と小村は思つた。彼はもう此時には平常の冷靜な皮肉な心持に歸つて居た。「また新しい人が来るから大丈夫ですよ。」

「駄目ですわ、どんな人が來たつて、小村さん達のやうに親しくして頂けないわ。それに妾達がそんな氣にならないわ。」

「よく人間といふものはそんな風に思ふもんだけれど、境遇さへ變れば、またその時々の氣持になつて了ふもんですよ。或る時には、この人でなくてはならない、此人が居なくなつたらどうなるだらうなどと思つて居ても、さてさうなつた場合に、矢張り前よりはその時の方が具合がよくなつて、何故あの時あんなことを思つたんだらうなどと自分ながら可笑しくなるやうなことになるもんですよ。僕等が居なくなつたらどうしようかなどと貴女はお世辭にでも言ひなされるけれど、その時には貴女は今の貴女ではなくなつてるんです。人間の心といふものは、水のやうに、始終流れて行つてるんです、動いてるんです。その時々に氣持が變つて行つてるんですから、假に明日にも僕等が居なくなつて、代りに新しい人が來たら、今度はその方が却つてよくなるかも知れないぢやありませんか。」

小村はお千代を諭すやうでもあり、また人間といふものには信用を置かないといふ自分の考へを述べるやうでもあつた。

「そんなことはありませんわ、妾はどんなことがあつたつて、いつまでも小村さん達のことだけは忘れませんわ。」とお千代は熱心になつて言つた。「妾は小村さんが、今に良い奥さんをお娶りになつて、理想の家庭をお作りになつても、いつまでも相變らず懇意にして頂きますわ。ねえ、小村さん。」

「どうぞお願いします。」とお千代は茶化すやうに言つた。

「本當よ、小村さん、ねえ、お願いですから、いつまでも力になつて下さいね、妾は兄弟もなし、東京には外に知合もなし、ほんとに獨りぼつちで心細いのですから。」

「そんなことは問題にならないぢやありませんか、お互に助け合ひませうよ。」

小村は殆ど何等の感動もなしに言つた。お千代の言ふことが、單に女の感傷か、または心にもなく自分に媚びて、自分の感情を和らめようとする彼女獨特の巧みな手管に過ぎないとも思はれた。

「お願いしますわ。」とお千代は首をかしげて媚びるやうに斜眼に小村を見つめた。

小村もお千代を見た。二人の眼と眼とが出會つた。お千代は嫣然と微笑した。心持眼を細め、紅い唇をぼつと開いて、白い齒の間から、それとも分らぬほどかすかに舌先を覗かせながら、ニツと微笑んだ。その瞬間の妖艶さは、どんな頑なな相手の心をでも、柔かく解きほぐさねばやまないやうな魅力があつた。

小村は殆ど前後の考もなく、いきなり火鉢に翳されて居たお千代の手を取つた。そして固く握りしめた。お千代はそれを振り放さうともせず、そのまま黙つてうつむいて了つた。勿論握り返しはしなかつた。

冷たい反省が、次の瞬間に小村の心を固く石のやうに萎縮せしめた。自分の卑劣な醜い淺ましい心の姿を、すつかりお千代に見抜かれて了つたやうな羞恥と自己嫌惡とを感じた。お千代は顔をばつと紅潮

させ、胸に動悸を打たせながら、固く唇を噛みしめて太い溜息を洩らしたが、それは甚しい侮辱を感じ、憤りに燃えながらそれをちつと忍んで居るやうな風に小村に思はれた。

「失禮な！ 人を馬鹿にしてる！」

かう言つてお千代が心の中で自分を侮蔑して居るやうに思はれた。

「失禮……」

小村はそつとお千代の手を放した。そしてその手の遣り場に困つて、きまり悪さうに両手を揉んだ。

お千代も矢張り放たれた手の遣り場に困つたらしく、引き込めもせず、その儘火鉢の縁を撫でて居た。

「いつかもお約束したんですが、淺草へでも一度行かうぢやありませんか。」

小村はてれ隠しにそんなことを言つた。

「え、連れて行つて戴きたいんですけれど……」とお千代は軽く言葉を途切らせて、「近々に君ちゃんつて、もと故郷の家へ出入のやうにして居た人の娘さんが來ますから、そしたら一緒に連れて行つて戴きますわ。」

そしてお千代は君ちゃんといふ女の身の上話などした。故郷に居て情夫が出來、互に固い夫婦約束をしたが、女の親が承知せず、他の男と結婚を強ひられるので、男と相談の上、男は神戸へ出稼に行き、自分は東京へ逃げて出て、今は芝のある知己の家に寄寓して居るのである。かうして親に對して示威的

態度を取りながら、親が我を折つて仕方なしに許すのを待つて居るのださうだ。

『そりや二人とも感心なのよ、そんなにして二人とも逃げ出して來ながら、親の不承知なのに一緒になつては不可いといつて、五年でも十年でも待たうといふんですの、そして男の方から毎月君ちゃんに幾らか宛仕送つてるんですよ。』とお千代は言つた。

此時お民が歸つたやうだつたが、お千代は降りて行かうともしなかつた。

『母やんかい？ 歸つたの？』と格子を開けてすぐ閉める音に聴き耳を立て、言つた。そして『あ。』とお民の濁つた聲がした時、『妾こゝに居てよ。』とお千代は坐つたまゝ梯子段の方へ顔を向けて言つた。暫くするとお民は梯子段に立つたまゝ開き襖を開けて黒い顔を現はした。

『随分長かつたわね。』とお千代は振り返つた。

『あ、一寸序に濱の家へ寄つたもんだから。』

『さう、姐さん居て？』

『あ。』

『まあ、お入りなさい。』と小村は言つた。

『有り難う、もう御飯の支度しなくちや。道草を食つて居て遅くなつたから——小村さん、御飯が遅くなつて濟みませんわね。今直ぐ拵へますよ。』と梯子を降りかけたが、また振り返つて、

『濱の家からちつと遊びにいらつしやいつて。此頃ちつとも顔を見せないがどうしたんですつて文龍さんが大變心配でしたよ。』と冷評すやうに笑つて降りて行つた。

『どれ妾も歸らう。』とお千代は獨語つて、『随分長くお邪魔しましたわね。』

『まだ可いでせう、御飯までゐらつしやい、一緒に降りますから。』小村は引き止めた。

『それでも——』とお千代は言つたが立ち上らうともしなかつた。そして一寸何か思ひ出すやうな様子をして、

『小村さん、此頃濱の家へ行らつしやらないの？』

『えゝ、行きませんね。』

『どうして行らつしやらないの？』

『なに別段どうしてと言ふこともありませんが——』

なるほど此頃は殆んど遊びに行かないな、と小村は思つた。

『文龍姐さん良い藝妓さんだわね、此の土地でも一流ですつてね。』

『どうだか、分つたもんですか。』と小村は態と悪評するやうに言つた。

『藝は仲々達者でせう？ 私と一緒に稽古に通つたんですわ。』

『さうですか？』と小村は前に聞いて居たが、知らない風を装つて言つた。彼はお千代の身の上について

他からも聞いて居るといふことをお千代に知らせたくなかつた。

「十七まででしたかね。毎日學校から歸りに常盤津のお師匠へ通ひましたわ。あの人も私も同じやうに一人娘で、家は矢張り同じ商賣でしたが、運が悪くてその年東京へ行らしたのよ。そして翌くる年、十八の時に藝妓に出なさつたんですつて。今ではもうすっかり姉さん藝妓になりなさつたわね。」

お千代は何氣なくかう言つたが、ふと自分がその境遇に似て居ることを思つて、急に心が暗くなるを覺えた。で彼女はすぐ話を轉じて、

「小村さんはどうして濱の家とお知り合におなりなさつたの？」と尋ねた。

「なに、別段どういふことも——」と小村は一寸口もつた。

「ずつと以前から？」

「いや、さう古くはなりません、たしか去年の夏頃からでした。」

小村は文龍と自分との現在の變な關係を思ひ浮べて、かすかに胸の痛むのを覺えた。今では最早二人は單なる友達同志といふ關係に過ぎなくなつて了つたが、一時は二人は深い戀仲であつた。少くとも小村だけはさう思つて居た。二人は前の年の夏、小村が學校を卒業する頃に知り初めたのであるが、それから半年ばかりの間は、彼等の間には深い濃かな戀愛關係が続いて居た。そんな方面にはまだ初心であつた彼は、殆んど始めて女といふものを知つたもののやうな喜びや驚きや、または怖れの感情をさへも

つて、文龍の胸に慕ひ寄つて行つた。相手が藝者だといふやうな見下した感じなどは少しも持つて居なかつた。文龍は小村よりは二つ年下であつたが、長い間さうした社會に生活して來た彼女は、氣持の上から言へば三つも四つも年上だつた。彼女は姉らしいやさしさで小村を愛した。最初は文龍の方から言ひ寄つたのであつたが、間もなく位地を轉じて、小村の方から憧れ慕つて行くやうになつた。そして文龍の濃かな情愛に深く浸り溺れた。それが半年も経たないうちに、別にこれといふ特殊の理由もなく、自然の様にさうした情的關係を絶つて了ふやうになつた。それは文龍の方から巧みに離れて行つたやうなものであつた。小村はもとよりそれを知らないではなかつた。彼は強い執着や未練を感じた。嫉妬や怨恨の情にも燃えた。けれども彼は決してそれを表にあらはさないやうに努めた。卑屈なまでに弱い性情をもつた彼は、厭がられて居るなと感づいても、自分からもきれいに離れ去つて了ふとか、または強く憎むのあまり復讐的な行動に出るとかいふことは出来なかつた。そんな場合にも彼は忍辱の苦痛をぢつと噛みしめて、却つてそこに一種の悲痛な快感を味はうとするのであつた。

「もうそんなこと廢しませうよ、つまらないぢやないの、そしてきれいな友達としてお交き合ひしませうよ。」

こんな風に言ひ出されると、小村はそれに向つてどうすることも出来なかつた。

「あ、さうしよう。」

彼はかう言つて平氣を装つて居なければならなかつた。そして心の中では、一層深い戀慕と愛着と未練とを感じながら、それを殆んど色にあらはさずに、恬淡な態度で交き合ふやうにして居た。自分が嫌はれたと意識することも堪へ難い苦痛であつたが、情的關係がなくなつた爲に、もう遊びには來なくなつたと思はれるであらうのも辛らかつた。きれいさつぱりと離れてしまふことの男らしさを十分知りながら、それではただの藝者と客との様に、單にそれだけの關係で今迄交き合つて居たのかと思はれるのが厭だつた。彼女に對する戀愛が、情交以上に深い淨いものであることを思はせたかつたし、また自分もさう思ひたかつた。

そんな風になつてからも三ヶ月以上も経つた。そして兎に角今では、小村と文龍との間は純然たる友達關係になつて居るのだつた。それを今でも以前と同じやうに、情的關係があるもののやうに他人に思はれるのが癢だつた。二人の關係は、普通一般の遊客と不見轉藝者とのそのやうな淺墓なものではなく、純潔な信實な友情の上に成り立つて居るのだと、強ひて思ひ、強ひて自ら果敢ない誇りを感じて居るのだつた。しかしお民はもとより、お千代でもさうは信じなかつた。それが小村には自分の自尊心を傷けられるやうで心外でならなかつた。

「金井さんのお馴染は誰ですか？」とお千代は訊いた。「玉助？ 文龍？」
玉助も、文龍も、濱の家の抱へ妓であつた。

「金井君だつて、僕だつて、そんな馴染なんかありませんよ。」と小村は眞面目に辯解した。

「でも——」

「いや、本當ですよ。」と小村はまだお千代の言ひ終らないうちに押つ被ぶせた。「さう思はれるのは無理のないことですが、さういふ關係なんかありません。」

「さうですか？」とお千代は尙ほ信じなかつた。

「藝妓屋と知り合だからつて、その藝妓を買つてるとは限らないでせう。」

「そりやさうですけど——」

「尤も料理屋などへ飲みに行つた場合には、あすこの藝妓を最良にして招んでやりますよ。けれども、そんな馴染なんかありませんよ。——むりやさうと、何だつてまたそんなことを氣になさるんですか。」と小村はうまくお千代を受け流した。自分に事よせて、間接に金井に女の有無を知らうとして居るのではないかと彼は疑ひ始めた。

書飯が出来たといふので、二人は階下へ降りて行つた。

長火鉢の側に餉臺を置いて、小村とお千代とお民の三人が圍んで箸を取つた。仙吉が側に居て給仕した。

「かうやツてると、まるで親子三人水入らずといつた姿だね。」と小村は笑ひながら言つてお民とお千代

とを等分に見比べた。

「眞實ですね。」とお民も笑ひながら言つた。「お客さんと一緒に御飯を食べたりして失禮ですね。」
「此方がいゝんです、氣樂で——」

「小村さんは全く家の者のやうね、ちつとも他人のやうな氣がしないわ。」とお千代は小村に媚びるやうに言つた。

「どうです、本當にさうなりませうか。」と小村は呵々と笑ひながら、お千代の顔を注視した。

「本當にね！ 出来るものならねえ。」とお民はしみじみした調子で言つた。

「では頼んだら、して呉れますか？」

「小村さんのやうな方に、家の者になつて戴けるものなら、どんなことでも——」

「小母さんがさう言つても、肝腎のお千代さんが厭だつたら駄目ですからね。」と小村は笑ひながら、もう一度お千代を見やつて、「どうです、お千代さん。」

お千代はたゞ笑つて居た。

「僕も何處か良い養子口がないかと思つてゐるんですが、ありませんかね。」と小村は戲談を言つた。
「だつて總領ぢやありませんか。」

「總領だつて關ふもんですか、どうせ田舎へは歸らないんですから。」

「小村さんは出任せばかり言ひなされるから駄目よ——養子になんか行かないかつて、どんな立派な所からお嫁を貰はうと自由自在ですがね。」とお民は義齒の金を光らせた。

「また皮肉が始まりましたね。」と小村は相手にならないやうに笑つて居た。

「文龍さんの養子におなりなさい、それなら。」

「それも良いね、藝妓屋の旦那になるのも洒落てますね。」

「今でもさうでせうが！」とお民は飽くまで皮肉に出た。

「あはは——」と小村は仕方なしに笑つた。

「小村さんはね、母やん、そんなことがないつて頻りに辯解なさるのよ。」とお千代は面白さうに言つた。

「小村さんにも似合はないわね、野暮くさい。誰がそんな辯解を本當にするもんですか。」

「實際さうなんでももの。」と小村は本氣になつて言つた。

「駄目ですよ！」とお民は叱りつけた。

一時過ぎになつて、小村は社に行くといつて宿を出た。社といふのは、小村や金井の出た学校のすぐ前にあつた。小村はそこから發行されて居る或る學會の機關雜誌を編輯して居るのであつた。

社へ行くとは言つたものの彼は別段今日出勤せねばならぬこともなかつた。併し外に行く所もなかつた彼は、殆ど無意識にその方へ歩いて行つた。そこまでは普通に歩いて三十分位で行けるのであつた。

朝晩はまだ冬の名残はあつたが、日中はさすがに春らしかつた。空はのんびりと置らかに晴れて居た。屋敷町のある家の庭には梅が白く咲いて居た。遠くの家の屋根の上には高く伸びて居る木蓮の蕾も大きくなつて居るのが見られた。

ぼか／＼するやうな日光に包まれて小村はゆる／＼と歩いた。彼の心はお千代に對する考へで充たされて居た。彼女の紅い柔かい唇、輪廓の正しい彼女の横顔、ふつくらした彼女の胸、すらつとした後姿、さてはそのたをやかな腰のあたりの曲線、それが交互に彼の眼の前にちらついた。初めてお千代を見た時の印象、引越して行つた當座の心ある如き待遇、人懐っこい眼と、媚惑的な微笑、すべて自分に心を寄せて居るらしく思はれた彼女の表情を思ひ浮かべて、彼はほんの暫く甘い情感に浸つたが、すぐ近頃

の彼女の態度を思つて急に心が暗くなるやうな憂鬱を感じた。

『だが俺は一體、どうしてあの女をかう氣にするのだらう？ 彼女の女の一舉一動、心の微細な動き方、それを何故かう問題にするのだらう、俺はあの女を戀して居るのかしら、本當に愛を感じて居るのかしら。』

彼はふとそんなことを自ら問うた。

『俺は一體あの女の何に向つて心を動かして居るのか？ 何をあの女に求めて居るのか？ あの女が俺を引きつけるのは何か？』

彼はそれが只お千代の肉體だけに止まつて居ること、あの美しい容貌、あの妖艶そのもののやうな姿態が、すぐ彼をして肉を思はせることに氣がついて、自らその卑しい陋劣な獸性の持主であることを呪はずには居られなかつた。そして金井もまた自分と同じ心持で、あの女に引き寄せられて居るのだらうと思ふと、何となく嘲笑ひたい氣持になつたが、しかしおとなしい、人なつっこい、不得要領らしくさへ思はれる中にも、自然に女などを牽きつける一種獨特の魅力を持った金井が、やがて戀の勝利者としてお千代を獲るであらうと思ふと、小村はちつとして居られないやうな惱ましい焦躁を感じた。氣がつくと、彼はもう社の入口に立つて居た。

小村の仕事をして居る部屋だけが、他の雜誌や單行本の編輯の人々とは離れて居た。二階を上ると突

き當りの、八疊位の應接室らしい部屋であつた。彼は卓子の上に帽子を脱ぎ捨てたまゝ、皆の居る廣い編輯室へ入つた。

一四八

同僚は珍らしく皆揃つて居た。十人餘り居るのだが、階下の事務の人達と異つて編輯の連中は、俸給日以外に出揃ふのが稀であつた。朝早く出て来て正午頃歸る者や、午後来ておそくまで居るものや區區であつた。

『稀らしく皆揃つて居るね。』と小村は暖氣の僅に残つて居るストーブの側へ行つてあたりを見廻した。

『小村君は下宿が變つてから遅くなつたね。美しい娘でも居るんだね。』と一人が意味ありげに笑ひながら言つた。

『まだ知らないんですか、素敵なお嬢が居るんですよ。』と一度小村の所へ遊びに来たことのある男が言つた。

『さうか！ どうもさうらしいと思つた。そんな所を狙つて歩くんだからな。——君の腕前ぢや、もう夙つくに物にしてるんだらう。』

そんなことから、暫く皆な女の話などして笑ひ興じた。

小村は自分の室へ入つて新刊の雑誌を読んだりして時間を潰した。やがて彼がそこを出た時にはもう編輯室には誰も居なかつた。

外へ出たが、何となく心寂しい氣持がして、その儘すぐ宿へ歸る氣にはなれなかつた。暫く行かなかつた濱の家へでも行つて見ようと思つた。もう街には電燈のつく頃であつた。

『まあ、小村さん、どうしなすつたの？ すつかり見限つちやつたわね！』

小村が顔をあらはすや否や、濱の家の阿母はいつもの大仰な口調で言つた。

『さつきも噂してたのよ、小村さんは、大橋へいらしつてから、家へちつとも來なさらないつて——』

小村はたゞ笑つて、文龍と對ひ合つて長火鉢の向うに坐つた。文龍は今湯上り後の化粧をすましたばかりで、際立つてすつきりと綺麗に見えた。髪は珍らしく束髪に結つて居た。

『本當に暫くいらつしやらなかつたわね。』と文龍は靜かに言つて煙草の煙を吐いた。

『一寸忙しかつたので——』

『さう？』

『嘘よ、毎日家にばかり居るつてぢやないの？ 今日お民さんが來てさう言つてたわ。』と阿母は茶をすすめながら言つた。

『なに、少し書かなくちやならないものが溜まつてたから。』

入口の部屋に玉助と久龍とが、鏡に向つて頻りに化粧して居た。その上の神棚には燈明が明るく賑やかに點つて居た。

「小村さん、小村さん。」と突然けたたましく玉助の聲がした。

「何だ、大きな聲だな。」と小村は態と驚いた風を装った。

玉助は自分でもそれに気がついて『うふふ』と笑つて、

「小村さん、奢りなさいよ、奢らなくつちや不可ないことよ。」

「何を言つてるんだ。」

「ねえ、奢つてもいいわね、久ちゃん。」と玉助は隣に化粧して居る久龍の、鏡の中の顔に向つて言つた。

「本當よ、奢つてもいい理由があるわ。」と久龍も言つた。

「何がさ？」と小村は落着き拂つて嘯いた。この女共は、多分自分とお千代とのことをいゝ加減に想像して言つてるのだらうと思ひながら。

「何がさ？ でもないでせう。ねえお母さん。」と玉助は阿母に言つた。

阿母は例の如く頭を振つて、ニコ／＼笑ひながら言つた。

「あんまり長く小村さんが来ないからよ。きつと良い女が出来たんだつて言つてるんだわ。」

「お氣の毒だね。」と小村は玉助の方へ言つた。

「駄目よ、小村さん、隠したつて、評判なんだから、皆んな知つててよ。」

「さうかね、有り難いね。」と小村は相手にならなかつた。

「でもお千代さんつて女、一寸いゝ女ね。」と玉助は化粧を終へて、そは／＼と小村の側へ来て立膝のまま忙しさうに長煙管に一ぶく喫ひつけて言つた。「素人とは思へないわね。」

「さうかね。」と小村は不興氣に言つた。彼はそんな無意味な、退屈な、徒らに神経を焦々させるやうな話が煩さくてならなかつた。

「小村さんは、もう宜しくやつてるんでせう。」

「馬鹿なこと言つちやいけないよ。人聞が悪いぢやないか。」と小村はいくらか憤いぢとした様子を示して言つた。

「ぢや奢りなさい。」

「執拗しつぱついな！ 此の女は。」と小村は冗談に玉助の頬つぺたを突ツいた。

「小村さん、今大橋から来らしたの？」と此時文龍は皆なの無駄話に耳を貸して居なかつたものやうに、姉さんらしいやさしい調子で言つた。それで今迄の話は一寸途切れた。

「いや、社から直ぐ。」

「さう？ 随分今日は遅いのね。」

「あ、今日は少し——」

「途中だのに、どうして大橋へ寄らなかつたの？」と阿母は傍から話を奪つた。

『何でもなければ、歸つてまた出て来るのが面倒くさいから。』

『だつてすぐ側だもの、何でもなければぢやないの？』

『晩になると、皆んな寄り集まつていろ／＼話がはずむからね。』

『さうぢやないのよ、お千代さんの傍を離れることが出来ないからよ。』と玉助はまた茶化しかけた。

『お千代さんはこの頃どうして？』と、文龍は小村にたづねた。

『うゝん、別にどういふことも……』

『さうこの頃あんまり来ないわ、ちつと遊びにお出でつて言つて頂戴な、私も今度ゆつくり行くわ。』

『あ、暇な時にゆつくりお出でよ。』

『私も姉さんへ行つてよ、よくつて、小村さん？ 私まだ小村さんの居なさるところ知らないから、見たいわ。』と久龍も口を出した。

『あ、お出で、御馳走するよ。』

『でも、見せつけられては堪まらないことよ。』と玉助は憎々しげに言つた。

『何をさ！』と小村は咎め立てた。

玉助は『ふん』と鼻で笑つて、

『お千代さんと、お安くないとこをよ。』

『馬鹿言つてら！ 誰があんな女なんか。』

『あははア！』と玉助はせゝら笑つた。『あんな女はよかつたわね。』

『どうしたといふんだ？』

『小村さん隠したつて駄目。』と、玉助はあかんべいをするやうに顎を突き出して、『人が知らないと思つても駄目なことよ、今日お千代さんと二階で何をして？』

小村ははつと思つた。秘密な罪惡でも暴露あはかれるかのやうに、思はず顔をぼつとさせた。

『何をいゝ加減なこと言ふんだか。』

『でも、悪いことは出来ないものね、誰が何所に見てるか分らないんですから。』と玉助は皮肉に言つた。

『さうだわね、玉助姉さん。』と年下の久龍も言つてニコ／＼笑つた。

『どうしたのさ？』と文龍は怪訝な顔して玉助と久龍とを見やつた。

『小村さんは大變なところ見られちやつたのよ、それを知りなさらないんですよ。』

『へえい——何を？』

『かうなのよ姉さん——小村さん、素破抜いてもいゝこと？』と玉助は小村の顔色を窺ふやうに言つた。

『ちつとも關やしないさ。』と小村は仕方なしに笑つて居た。

「でも、きまりが悪いでせう。」と玉助は態と思はせ振りを言った。

「何んなの？ 玉ちゃん、どんなこと見たのさ？」と文龍は促した。

「私が見たんぢやないんだけれど——かうなの、私今日久ちやんと髪結さん所へ行つたでせう、その時丁度メ蝶姉さんが来たの。」と玉助は、外方ソツバを向いて態と話を耳にしないやうにして居る小村の横顔を覗いて、「可笑しいのよメ蝶さんがね、お正午おひる頃にお客さんと、そら、大橋さんの筋向ひの洋食屋の喜樂軒ね、あそこへ洋食食べに行つたんですとさ、——そら喜樂軒の二階から小村さんとこの二階がよく見えるんでせう——すると丁度あすこの二階の縁側に綺麗な女が立つて居たんですつて、それがお千代さんに違ひないのよ。ちよいと美しい女だなと思つて窓から見て居るとやがて部屋の中へ入つてちやつたの。それから暫くたつて、何の氣なしにもう一度大橋の二階を見るとね、そりや可笑しいんですつて、硝子障子の中に、その女と小村さんに違ひないわ——男の人と、手を握つたり、頬つべたを嘗めたり、何かして、散々なことして居るのが見えたんですとさ、——ねえ久ちやん、さうだつたわね。」

玉助はかう言つて、小村の當惑さうな様子を見ながら、可笑しくてならぬといふ風に笑ひこけた。

「まあ——さう？ 呆れかへつちやつたわね。」と、文龍は半信半疑ながら眼を圓くして、「小村さん、本當？ まあ、どうしたの？」と言つた。

「嘘だよ、そんな馬鹿なことがあるものか！」と小村は吐き出すやうに言つた。

「まさか本當とは言へないでせう？」と玉助は尙ほ調戲てうぎひ氣味に言つた。

「飛んでもないところを見られたもんだわね。」と阿母は笑つて、「それぢやうんと奢あやまらなくちやならないわよ。」

小村は馬鹿らしくもあり、またこんな嘘とも眞實ともつかぬことが、尾緒をつけて吹聴されるのが腹立たしくもあり、不安にも感ぜられたが、彼は辯解する機会を失つて、ただ苦笑して居るより仕方がなかつた。

「卑いやらしいわね、それだから私素人の女は厭になるわ。」

文龍は小村よりもむしろお千代を嘲るやうに言つた。

「本當ね、藝者なんかいくら惚れた同志だつてそんなことしやしないわ。大體汚ないぢやないの。」と玉助はてきばき言つた。

「きたないことなんかありやしないわよ、お互に好きな同志だつたら。」と阿母はいやにニヤ／＼笑つて言つた。

「小オちやんも一寸器量を下げたことね、そんなとこ見られて。」と文龍は笑ひを含んで小村に話を向けた。

「嘘だよ、そんな馬鹿なことが出来るわけがないぢやないか、遠くから硝子越しに見て言ふんだもの、

何を言ふんだかあてになんかなるもんか。」と小村は本氣になつて言つた。

「いゝぢやないの、小村さん、惚れられたんなら仕方がないわ、當り前だわ。」と阿母が言つた。

「でも小オちゃんの方がお千代さんに参つてるんでせう。」と文龍が突き込んだ。

「何を馬鹿な——。」と、小村は平靜に打ち消したが、胸は騒いで居た。

「ちよいと美しい女だし、それにあゝいふねばくした色氣のある女だから、誰でもちよいと惚れるわよ。」
「さうね。」と玉助は言つた。「あれで生娘かしら？」

「どうだか。」と文龍は態と意味ありげな口調で言つた。

阿母は黙つて何か言ひたげに首を振りながらニヤ／＼笑つて居た。知つてるけれど態と言はないといふ風を、小村は素早く見てとつた。

「馬鹿にお粧飾めがしをしてべたく／＼して居るのね——淫賣ぢやないかつてメ蝶さんが言つてたわ。」と玉助が言つた。

「まさか。」と文龍は言つた。「まさかさうでもないけれど、子供の時からあゝいふお洒落だつたのよ、變に卑らしい物言ひをする。」

「本當よ、家のお文なんかと違つて、随分早熟まきて居て、十四五の時分から年上の男とよく遊んで歩いたわ。」と阿母は眞面目になつて話した。

「あんまりそんなこと言つて、小村さんに惡りいぢやないの。」と今迄黙つて居た久龍が突然口を出した。それがまだ年若い、一本になつたばかりの初心な久龍として大出来であつたので、

「本當だわね。」と皆笑つた。小村も笑つた。

「久ちやんも仲々粹を言ふやうになつたわね。」と文龍は言つて、「さては久ちやんも小オちゃんに思召があると思えるね。」と調戲あざわらつた。

「あら、姉さん——」と久龍は恥しさうに見返した。

「そりやさうと小オちゃん。」と文龍は小村に話を向けて、「ね、小オちゃん丁度いゝわよ、お千代さんも小オちゃんを好いて居るんなら、どうだつて關やしないから可愛がつてやりなさいよ。」と殆んど冗談とも思はれぬやうな調子で言つた。

「冗談言つちやいけないよ。」

「冗談ぢやないのよ、小オちゃんだつて満更でもないでせう、お千代さんだつて、もういゝ年だもの、可哀想だわ——私ちやんとお千代さんの氣持を知つてるのよ。」

あまり亂暴な無遠慮なことを言ふので、小村は文龍の眞意を解し兼ね、呆氣にとられて彼女を見つめた。

「どうしてそんなこと言ふのかね。」

『その方が可いのよ。』と文龍は獨り合點のやうに言つた。
『功德になるわ。』と玉助は下品に言ひ足した。

小村は嚇となつた。玉助の圖に乗つた悪巫山戯が堪まらないほど癢に觸つた。『出しやばるな！手前の知つたことか！』と怒鳴りつけて、ピツシヤリと頬つぺたでも殴りつけてやりたいほどの氣にもなつた。

丁度その時電話がかゝつて來たので玉助が立つて行つた。

『私夙うからさう思つて居たのよ。小オちゃん……』と文龍が尙ほ言ひ續けようとした。
『姉さん、お座敷よ。』と玉助は此時戻つて來て、文龍に何か耳語いた。

『あら、さう。』と文龍はすぐ立ち上つて準備に取りかゝつた。

小村は残り惜しさうに、文龍が久龍や箱屋に手傳はせて衣裳を着けてゐるのを眺めて居た。
『小オちゃん、そのうちにまた話すわ、ゆつくりして居らつしやいね。』

文龍はいたはるやうに言つて出かけた。

『あ。』と小村は、如何にも失望したらしく、力のない聲で言つた。

阿母も玉助も久龍も、上り端まで送り出して行つた。カチ／＼と切火の音がした。
小村は兩手を深く下腹のとこまで懷つて首をすくめた。そして自ら自分を嘲り蔑むやうに舌打した。

彼は今晚久し振りに、文龍と飯でも食べながら、靜かにしみ／＼と話したいと思つたのであつた。で、社からこゝへ來る途中、すぐ知り合の待合へでも行つて、文龍を招ぼうかと考へもしたのだが、從來にも度々あつたやうに、萬一彼女が他のお座敷へでも行つて急に貰へなかつたりしてはつまらないと思つて、先づ家に居るかどうかを見るために寄つたのであつた。ところが今の様な、とりとめもない無意義な話をし、且つ玉助の悪巫山戯などに徒らに神経を焦立たせ心を荒ませられて居る中に、文龍が他のお座敷へ行つて了つたので、彼れは少からず失望し氣抜けがしたのであつた。彼は今晚文龍ともう一度會ふには、少くともそれから二時間位は無駄に待たねばならぬことを思つて堪へがたい苦痛を感じた。

皆一時に戻つて來て火鉢をかこんだ。阿母は今迄の文龍の席に坐つた。

小村はこの連中と話して居ることの退屈さを思つて胸がつまるやうに思つたが、文龍が居なくなるとすぐ自分も出て行くのが、如何にも氣が引けたのでその儘居残つた。そして尙ほ三十分の間、自分の心と何等の交渉もない、退屈な無駄話に苦しめられて居た。彼の心は益々荒んで行つた。何の濕ひもなく、かさ／＼になつて行つた。彼は幾度も立ちかけたが、

『奢らされるかと思つて逃げるのね。』とか、『奢らさしないことよ、遊んで居らつしやいよ。』とか、『お千代さんの顔が見たくなつたの？』とか、阿母や玉助に諷刺を言はれると、それでも歸るのが何だか自分の自尊心を傷つけられ、痛くもない腹をさぐられるやうに思ひ、一方にはそんなことを氣にかける自分

の不見識な、卑小な考へに囚はれて居るのを自ら嘲りながらも、つい愚圖々々になるのであつた。そして彼はそんな不快な氣持を拂ひのけようとでもするかの如く、

『何か本當に奢らうかな。』と快活を装つて言つた。

『いゝわよ、冗談よ。』と玉助は遠慮したが、結局小村は、皆が好きだといふ天麩羅と、それから自分のために、麥酒と果物とを買つて貰つた。

皆な丁度いゝ幸だといつて晩飯にした。小村は麥酒を一二杯玉助に勤めて、他は一人でぐいぐいと呷るやうにして飲んだ。

彼是して居るうちに、玉助も久龍も相前後してお座敷がかゝつて來た。

『小村さんが來らつしやると、きつと皆なお座敷がかゝるわね、縁喜がいゝのね。』
『毎晩來て下さるといゝわ。』

こんなことを言つて彼等は出て行つた、家の中が急にしんとした。

小村はいくらか酔つたやうな氣持でふうと息を吐いた。そして時計を見ながら、もうやがて文龍が貰へる時刻だから、そろ／＼出て行かうかとも思つて見た。併しそれは、最初のやうな落着いた快い、一種の憧がれ心からではなくなつて居た。先刻來荒され、平衡を破られた心を、統一させ落着かせようといふ願ひもないでもなかつたが、むしろその反對に、徹底的に、やけに飲んで騒いでやりたいやうな絶

望的な氣持の方が多かつた。

『今日お民さんが來て行つたわ。』

稍々あつて阿母は思ひ出したやうに言つた。

『さうでしたか、何か言つて居ましたか。』と小村は何の意味もなしに言つた。

『いゝえ別に……』と、阿母は例の如く首を振りながらニヤ／＼笑つて居たが、突然、

『小村さん、大橋のとこの聲さんになつたら如何？』と、冗談とも眞面目ともつかぬ様な調子で言つて、小村の顔を見据ゑた。

小村は、この婆さんがまた、何を頓狂なことを言つてるんだか、といふやうな顔をして、もとより相手にならなかつた。

『大橋の家では何なのよ、小村さんを欲しがつてゐるのよ。』と、阿母は重ねて言つたが、それは滿更冗談とは思はれぬやうな調子であつた。

『それもいゝね。』

小村は取合はぬやうに笑つて居た。

『本當よ、小村さん、冗談ではないの。先達て徳さんも來てさう言つてたわ。』と、阿母は眞顔になつて言ひ續けた。

「自家では疾うからお千代さんの養子を目付けて呉れるように頼まれてるのよ、——お千代さんは勤め人が好いつて言ふから、月給のことは今當分多くなくつても、勤め人で極く確かな人があつたら世話して呉れると言ふんだわ。——それで何ですの、小村さんのやうな確かりした人に、なつて貰へると、何よりだけれどなんて言つてたからね、小村さんはたしか總領だとか言ふことだけれど、尙ほよく折があつたら訊いて見てあげようつて、私が言つといたの。」

そして恰も小村の確答でも待つもののやうに、阿母はちつと小村を視つめた。

「この婆さんは、こんな話を當人の俺に向つて、こんなに手輕に、こんなに露骨に言つて、それで俺が承諾でもするやうに考へて居るのかしら？」

小村はさう思つて、自分がこんなに粗略に、安つぽく、輕々しく取扱はれて居るのかしらと氣がつくと、非常に自分の自尊心を傷つけられたやうで不快であつた。そして從來の自分の自重を缺いたやうな行爲を自分ながら腹立たしく思つた。が同時に、その阿母の無分別さ、無思慮さが、寧ろ滑稽にも哀れにも思はれた。

「この婆アさんの考へるやうに簡單に世の中が過ごせるものなら。」

彼はまたかう思つて思はず微笑した。そして、調戲ふやうな調子で言つた。

「一つ思ひ切つて養子にならうかな。」

「おなりなさいよ。お千代さんだつて、そんなに悪い娘ぢやないでせう。」

ふと小村は、さつき文龍が暗示した言葉に思ひ當つた。

「……………」

邪惡な考へがチラと彼の心を掠めた。彼は飲みさしのコップをぐつと干して恰も何事かを決心したかのやうに、長火鉢の猫板の上に、カタツと高く音を立てた。

「かまふものか、女はそれを望んで居るのだ！」

小村はニッと狡い笑ひを洩らした。そしてもうお千代は自分の自由だとさへ思つた。彼の心の眼にはただ一人の美しい女しか映らなかつた。その女の父も母も、周圍の事情も關係もまた過去も將來も——さういふ關係から一切離れて、たゞ一人の若い女——男を欲し求めて居る熟した女が見えるのみであつた。

「でも、小村さんは總領だつて言ふから、工合が悪いわね。」

「なアに、そんなことア關はないさ。」と、小村は無雜作に言つた。彼れには養子とか何とかいふ問題は此の場合毫も頭になかつた。ただ祕密の希望と慾望とに心を躍らせて居るばかりであつた。

が、その瞬間、彼はふと金井のことを思つて、恰も急に堅い壁にでも突き當つたやうな氣持になつた。電話がかゝつて、文龍が出先からそのまゝ次のお座敷に行くことを知らせて來た。小村ももう今夜文

龍を招ぶことの不可能なのを豫想した。またさういふ氣も薄らいで居た。彼は阿母と尙ほ暫く大橋一家の噂などしてやがて暇を告げた。

十

それは暖かい宵であつた。空氣もしつとりと濕ひがあつて空も朧に霞んで居るのが夜ながらそれと知られた。

小村は濱の家を出て宿の近くまで行つたが、ふと思ひ返して坂の上の街路へ出た。

丁度縁日の晩で、そこは非常に賑はつて居た。縁日の夜には車止めとなるその街路は、その晩も人で埋もつて居た。少し高い所から左右を見ると、その長い街路には、ただ人間の頭ばかりが、うよよ動揺めいて居るやうだつた。競つて美しく飾り立てられた兩側の商店の、赤い電燈や青い瓦斯の光で往來は晝のやうに明るく照らされて居た。いろ／＼の露店が道の兩側を塞いで、思ひ／＼に道行く人を呼んで居た。ギオリンに合わせて歌ひながら、歌本を賣つて居る書生や、盲目の尺八吹の周圍や、また蓄音機をかけた商店の前などには、人が黒山のやうに寄り集つて居た。坂の上から、下の電車通にかけて、ずつと植木屋が兩側に並んで、カンテラの油煙が濛々とそこらを立ち罩めて居た。

それは人間と音響と明りとの街であつた。一種の調和を保つた雑沓とも言ふべきものであつた。救世軍が樂隊を奏しながら人込を押し分けて通つたり、活動寫眞の大きな廣告行燈を擔いで、よぼ／＼の爺

さんが、まるで墓が蠢くやうに歩いて居るのなども、思ひなしかさうした夜の氣分にふさはしいものと思はれた。

小村はさういふ雑沓の中を、只無心に彷徨いた。子供の集つて居る自動菓子器の前にぼんやり立つて見たり、縁日のある寺の境内に入つて、輕業小屋の前の群衆の中に交つて、看客を誘ひ入れるために時幕を上げてチラと内部の様子を見せるのをぼんやり待つて居たりした。

それは何時までも斯うしてぶら／＼して居たいやうな氣分であつた。ついさつきまでの焦々した荒んだ氣持がなくなつて、ただ何かなしに悠然とした落着いた氣分であつた。無想無念といつたやうな心の境であつた。喜びも悩みも希望も悔恨もなかつた。

今朝お千代と二階で話して居たことや、お民に文龍のことを調戲はれたことや、社で冗談を言はれたことや、玉助の素破拔や、文龍や阿母の暗示や、それから自分の浮づいた空想や、——そんなことがチラ／＼と掠めるやうに心に浮かんざり消えたりした。けれどそれらのことは、喜びにも悩みにも、何等彼の心を煩はす種とはならなかつた。

時々微笑が、ひとりでに浮かんで來た。それは彼自身にも意味が分らなかつた。謎のやうな微笑——。漫ろ心になつて彼は尙ほ暫くぶら／＼した。ほのかな酔は、もう疾くに醒めて居た。彼は空腹を覺えた。で、顔馴染になつて居る壽司の屋臺店の暖簾の内へ首を入れた。

歸らうと思つて宿の方へ足を向けると、ふとお千代の姿が眼に浮かんだ。すると金井もそこに現はれた。お千代と金井とが話して居る様子が空に描かれた。

小村は一寸足を停めて躊躇した。歸るまでに、何か考へ定めねばならぬ事柄があるやうな氣がされるのであつた。その事柄が何であるか一寸考へつかなくなつたので、彼は群衆を離れて心を集めようとした。

『金井は階下にお千代やお民と話して居るか、お千代と二人だけ二階に居るか、何ちらかに違ない……』かう小村は思つた。そしてその解決があまりに平凡であつたので、彼は自分ながら馬鹿らしく思つた。併しそれ以上の考へが思ひ浮かばなかつた。

『若し金井が階下に居たら、俺は黙つて二階へ上らう。若しお千代が二階へ行つてるやうであつたら、俺は態と階下に居て、お千代の降りて來るまで二階へ上るまい……』

小村は歩きながらさう思つた。と不意に、お千代が二階に金井と二人きりで居て呉れゝばいゝといふ不思議な考へが浮かんだ。むしろ二人がどうかなつて居ればいゝとさへ思つた。さう思ふと、何か非常に面白い、痛快な事が起つて來さうな氣がして、心が躍りさへするのであつた。

『不思議な心の矛盾よ、悲しき空想の戯れよ……』

小村は心に眩きながら横町へ入つた。

『あら小村さんぢやないの？』

突然耳馴れた女の聲が小村を呼び掛けた。振り返ると、俗に藝妓屋横町といつて、藝妓屋と待合ばかりある狭い小路から文龍が出て来た。袂を取つたなりに、小路の出口に立つて居た。

「文ちゃんか。」

「今お歸り？」

「あ、——文ちゃんは？」

「妾？ 妾も今歸るの。」

「何所か外の座敷へ行くつてぢやないか。」

「えい、さうでしたけれど、行かなくてもよくなつたの。」

小村は四邊を憚るやうに見廻した。人々は二人の立つて話して居るのを、異様な眼付で見ながら行つた。

「あれからどうして？」

「うん、あれから玉助も久ちゃんもお座敷へ行くし、暫く小母さんと話して居て、それから今そこから歩してゐたの。」

「さう？ そしてもうずつと歸るの？」

「あ、外に仕方もないから。」

「もう一度自家へ寄らない？」

「有り難う……」

「お寄りなさいな、まだ早いわ。」

「いやもうさう早くはない……實はね。」と言つて小村はもう一度四邊を見廻した。そして暫く躊躇して居たが、

「實はね……あの、今晚は久し振りで文ちゃんと話したかつたのだけれど……」と、思ひ切つて、併しいくらかおど／＼しながら懐しさを見せて言つた。

「さう？ 何を？」

「何つてこともないけれど、暫く逢はなかつたから。」

「さうでしたわね。」と文龍も暫く考へるやうにして居たが、「兎に角お寄りなさいな。」

「あゝ。」と、小村は承諾するでもないやうな調子で呟いた。が動かうともしなかつた。

「家へ行つたつて仕方がない、何處か待合へでも行かう。」

かう小村は言ひたかつた。口まで出かけたが、併し言ひ兼ねた。文龍の思惑も恐れられた。自分ながらも微かな羞恥を覺えた。

待合へ行つたつて、どうにもなりはしない、今迄のやうに泊つて行くことなどは、今は出来ないやうな二人の關係になつて居る。それを知りつゝ行くのは、結局は充たされない心の苦痛を味はねばならぬ、その上、自分が或る卑しいことを求めてでも居るやうに思はれはしないか、はしたないものに思はれはしないか……而も家へ行くのは尙更つまらない……

『さあ行らつしやいな。』

文龍は歩きかけた。

小村は黙つてその後に従いた。

宿の方へ行く四つ角へ来た時、小村はさすがに決しかねて一寸立ち止まつた。

金井とお千代と二人居る有様がありく〜と眼に映つた。

『どうしたの？ 寄らないの？』と、文龍は振り返つた。『――歸つたつて仕様がないでせう？』

小村はギョ〜とした。自分の現在の位置や心持を道破されたやうな気がした。

『さうだ、實際その通りだ！』
彼はかう心の中で叫んだ、また歩き出した、急に淋しい氣持が襲つて來た、自分の行くところのないやうな遺瀾ない孤獨の感じが、ひし〜と迫つて來た。

『俺は行くところがない。かうやつて一晩うろ〜して居なくてはならない。……』と妙に感傷的な自ら憐れむやうな氣持になつた。

『だがさう思ふのがお前のよくない所だ、お前は妙にひねくれて物を考へて、ひとりで苦しんで居るのだ。素直になれ 疑ふな、伸び〜した心になつて居れ、お前を苦しめ、お前の血を涸らし、心を磨り滅らすものは、お前の疑深い、自己否定の心だ。』

かう或る聲が彼に私語いた。

『何をさう考へ込んでるの？』と文龍は言つて傍へ寄つて來た。

『なに、何でもない。』

もう濱の家の近くへ來て居た。路次のすぐ手前の、福住と書いた丸い軒燈のかゝつた待合の前へ來て、小村は今更の如く門の中を見入つた。それは彼が文龍と始めて知り合つた待合なのだ。一面に砂利を敷いた兩側は植込になつて居て、眞中には入口まで一直線に敷石が敷いてあつた。粹な吊行燈が、格子戸の中にほの明るく點つて居た。

『こゝへ寄らないか。』

『さう、さうしてもいゝわ。』と、文龍は存外氣輕に言つた。『あなた先に行つていらつしやいな、妾一寸着換へて來るわ。いゝでせう。』

『あゝとも。』

そして小村は文龍と分れて福住へ入った。

一階の奥の静かな四疊半へ通つて、暫く女中と話して居ると、やがて文龍が来た。襖を少しばかり開けて、敷居側に、

『……どうも有り……』

と、始めての座敷へ出る時のやうな挨拶を、彼女は習慣的にこんな場合にもして、それから襖を開けて入つて来た。そして、まだ香の匂ひのほのかに匂つて居る火鉢を挟んで小村の側に寄つて坐つた。紫檀の小机の上には、もう酒の支度がされてあつた。

『姐さん暫く此家さんへ伺はなかつたわね。』と文龍は女中に挨拶してから、『一つ如何？ お酌……』と首を傾げて微笑みながら銚子を取りあげた。

縞お召の上着に黒縮緬の羽織をちよいと引つ掛けた略装着姿は、きまつたお座敷の時とは異つて、また別種の趣があり、一段の艶めかしさを添へて居た。顔はさして美しくはないけれど、さすがに玄人だけあつて、衣服の着付、化粧の仕様などしつくりと身體に調和して、その容姿は、しつとりと艶な中に、如何にも年増藝妓らしい趣を具へ、男を引きつける力はあつた。しかし早くから世帯苦勞を嘗めて来た文龍は、年よりは二つも三つも老けて見えた。どうしても二十五六の年増藝妓としか誰の眼にも見えなかつた。それに抱の二人も置いて、此の土地での姉さん株だといふ意識と誇りが、彼女をして自らその

態度や嗜好や趣味などに、年増らしい落着と見識と滋味とを加へさせたのも事實であつた。

小村はそんなことを考へながら、文龍の横顔を眺めやつた。そして盃をさした。

女中が退いてから、暫くの間二人は無言で居た。小村は言ひたいことが澤山あるやうな気がしたけれど、何を言つてよいか話の端緒を見出しかねた。

『暫くかういふ所へ來なかつたなア。』と、獨語のやうに言つて今更らしく部屋中を見廻した。床の間の掛軸や長押の額などを意味もなく只眺めたりした。

『酒でももつと飲んで景氣をつけようぢやないか、馬鹿に陰氣になつた。』

小村は強ひて元氣らしく言つて酒を注いだ。二人の關係が今のやうになつてからは、かうやつて二人きりとなると、何となく改まつた氣分になつて、それまでのやうに浮いた安らかな氣持になれなかつた。

『何かお歌ひなさいな、弾きませう、久し振りだわ。』と文龍は三味線を取り寄せようとした。

小村はそれを止めて、

『三味線はよさうよ。何か話しよう。』

『さうね、その方がいゝわね。』

『あ、歌なんかつまらない。』

併し何を話すでもなかつた。

『小オちゃん二人になると、どうしてかう二人共黙り込んで了ふんでせう。いつでも斯うなのね。その癖大勢の時は、小オちゃんでも私でも、人一倍賑やかに騒ぐんだのに。』

『さうだね。』

『矢つ張り二人共根が陰氣な性質なんだわね。』

『それもあるが、そればかりでもないよ。お互に話がなくなつたんだ。寧ろ話が出来なくなつたんだね。』

小村は淋しさうに微笑した。

『どうしてなんでせう。』

『お互に心の底に、何か譯の分らぬ考へが潜んで居るんだが、それを包んで了つて、それに觸れないやうにして居るからだよ。……もつと二人の關係がどうにか變らなきや駄目だ。』

小村は婉曲に現在の關係の不自然なことを諷示した。

『さうかも知れないわね。』

『以前のやうに無邪氣な色戀の關係になるか、それとも根柢から引つくり返して了はなくては……併しお互にどちらにもなれないから苦しいんだ。』

『つまらないわね。』

『つまらないね。』と小村は鸚鵡返しに言つた。『どうかならなきや全くつまらないね。』

『どう——？』

『どうといつて……大體男と女とが、而も一度關係のあつた者同志が、そのまま純粹の友達關係になるなどといふことが出来ないものなのかも知れないよ。不自然だからね、つまり逆だもの。』

『そりやさうね。』

『だから……』

小村は我知らず、文龍に對する平生の欲求を婉曲に暗示したことに氣がついて、急に口を噤んだ。そして自分の文龍との關係は、單なる藝妓と馴染客といふやうな浮いたものではなくて、一步進んだ信實な純粹な友人だなどと思つたり、それを誇りらしく言つたりしたことは、實は自分自身に對する氣休めと、卑怯な虚飾的な自家辯護に過ぎないことを意識して自ら恥ぢた。

女中が銚子のお代りを持つて來た。

『お熱いのを一つ如何？』と小村にお酌した。

小村は黙つて飲んだ。

『どうなすつたの？ いやにお静かね。』と言つて女中は小村と文龍とを等分に見比べた。

『さうなのよ、姐さん、いつでも小村さんと二人だと斯うなのよ。今もその話をして居たの。』と文龍は言つた。

「兎角相惚れといふものは……」と女中は大笑に笑つて、

「一つお歌ひなさいよ、小村さん。追分でもお聞かせなさいよ。いゝ咽喉だわね、小村さんは。妾追分大好きだわ。」と一人で喋り續けた。

「ほんとね、いゝわね。」と文龍は三味線を引きよせて、「お歌ひなさいな、小オちゃん。」と調子を合せた。酔もまはつて居たところで、小村は誘ひ込まれるやうに感傷的なそゞろ心になつた。そして少しうつむいて、手で眼を掩ひかくすやうにして歌ひ出した。

文の表書薄墨なれど

中に戀路が書いてある。

ありや啼く筈だよ野に棲む蛙

見ずに遇はずに居られようか。

小村は自分の感情をでも披瀝するやうに、思ひつめて歌つた。一種の哀調を帯びた彼の聲調は、自然に彼自身をも、涙の沁むやうなしんみりとした氣分に引き込んで行つた。

「ほんとに美いお聲ね。」と女中は感心するやうに言つた。

「かう波の靜かアな月夜の晩かなんかに、船に乗つて歌つたら、いゝでせうね。」
文龍はさういふ場合を想像して見るやうに、ちつと一方を見つめながら言つた。

櫓も權も波にさらはれ只茫然と

何にとりつく鳥もない。

小村は尙ほ歌ひつゞけた。故郷の波の荒い、暗い、北の國の海が彼の眼の前にあつた。冬の夕方の沖の空は時雨催ひに曇つて、黝い遙かな波路は、見るからに荒涼暗澹として居る。岸の高い巖に、波が白く打ちあがつて居る。千鳥か何かが、ピー〜と悲しい聲をたて、居る。……

雨よ降れ〜風なら吹くな

家の親爺は船乗りぢや。

歌へば歌ふほど悲しい遺瀨ない氣持になつて行つた。いくら歌つても歌ひ足りないやうな氣持になつ

て行つた。

「妾どうしても追分は歌へなくつてよ。」と文龍は言ひながら、三味線の調子を變へた。
「六つかしいわね。聲が續かないから。」と女中が言つた。

「そればかりぢやなく、妾達にはあゝいふ調子がどうしても出ないの。」
キイ／＼と天字をまはしながら文龍は言つた。

文龍は小唄を二つ三つ歌つたが、女中が歸ると同時に、パツタリ三味線を下に置いた。
「飲まう！」

小村は急に昂奮して来て、勢よく盃をさした。

「え、頂戴！」と文龍も同じ調子で盃を受けた。「妾今晚うんと飲んでよ。よくつて？」
「あ、いゝとも、いくらでも飲んでお呉れ。」

「酔拂つてもいゝこと？」

文龍は艶めいた嬌態をして、小村にもたれかゝるやうになつて言つた。

「いゝとも！ いくら酔つ拂つてもいゝさ、それが望みだ。久し振りに二人とも酔つ拂はうぢやないか。」
小村は何か幸福なことが湧いて來さうな氣がした。かうした身を打委せたやうなことを文龍から言ふのは、近頃稀らしいことであつた。たとひ冗談にもせよ、また慣用的の手管にもせよ、小村はこれによ

つて、ある満足を覺えた。

「暫くかうして飲まなかつたね。」

「全くね、どうしてでしたかね。」

「どうしてだか、文ちゃんの方が知つてる筈ぢやないか。」

小村は微笑を含みながら何事かを暗示するつもりで言つた。文龍はそれを覺つた風で、

「でも小オちゃんは感心だわ。」

「どうしてさ？」

とかう訊いたものの、小村にはその意味は解つて居た。それは今迄にも一二度聞いたことであつた。彼は揆つたく思つた。そして自ら恥づるやうな氣にもなつた。また冷かされたやうな、軽い侮蔑を感じさへもした。

「何が感心なもんか！」と小村は思つた。

「俺は最初文龍に惚れられて、中頃俺の方が惚れて、そして結局俺が體よく捨てられたのだ。俺はそれを知つて居て知らない風を装つて居るのだ。未練も執着もなささうに、あつさりと潔白らしく装つて居るのだ。一寸見ればさつぱりとして居るやうだが、實はさうではないのだ。大抵の男らしい男なら、かういふ場合には、飽くまで執拗くつきまとうて行く所まで行くか、復讐するか、さもなければ何の未練も

なくきれいさつぱりと見限つて了ふに違ひない。然るに俺にはその何れも出来ないで、今だに愚圖々々してゐる。未練も執着もありながら、未練らしく思はれまいと思ふ卑怯な弱い心から、態とそれを表に現はさないやうにして居るに過ぎないのだ。

「追へば追ふほど女は逃げて行くものだといふことを知り、而も窮極まで追ひつめて行くだけの力も熱情も持たないことを自覺して居る俺は、せめて女に遠く逃げられまいとするために、追はずに、否追ふことが出来ないで、態と淡泊と平靜とを装つて居るのに過ぎないのだ。飽くまで深く入つて行かうとする熱誠もなく、復讐しようとする突きつめた氣持にもなれず、またその力もなく、さつぱりと見限をつけるほどの男らしい勇氣もなく、微温湯のやうな、徹底しない、腑甲斐のない俺なのだ。

「何が感心なものか！ 何がきれいなものか！ 人一倍卑怯未練な男なのだ！……」

小村はかういふ場合にも、尙ほ鋭い自己批評、自己解剖を忘れることが出来なかつた。そして獨りで苦しむのであつた。

併し彼れはさういふ色を少しも顔に出さなかつた。文龍の言つたことを、さも満足に思つたらしい様子で、愉快さうに装つて居た。

「小オちゃんも普通のお客さんとは異つてゐるわ。」
「どうして？」

「大抵お客さんでもものは、殆ど十人が十人まで、その時限りのものだけけれど——色無抜きに、いつまでも心安くして下さる方つてもものは減多ありやしないものよ。」

「さうかね。」

「え、さうよ、小オちゃんのやうに、遠慮なく打ち明け話の出来るやうな方なんか無いといつても可いわ。」

「何だか揶ぐつたいね、賞められてゐるのか、冷評されてゐるのか分らないね。いゝ加減な嬉しがらせはよせよ。」

「そんなことはないわよ、ほんとよ、小オちゃん。——でも妾随分小オちゃんには我儘したわね。」

「随分我儘だつたね。」と小村は皮肉のつもりながら、笑ひ／＼言つた。

「でも有り難いわ、かうして何時までも最眞にして下さるから。」

「随分馬鹿に見えるだらう。捨てられて居ながら……滑稽だね。」

「そんなことありやしないわよ。」と文龍は早口に押へて、「妾何だか小オちゃんを普通のお客さんとは思へないのよ。だから斯う遠慮なしに我儘するんだわ、——本當に濟まないと思つてるのよ。」

「まあ、そんなことはどうだつて可いちやないか。それよりか飲めよ、今夜は大に飲むつて言つたぢやないか。」と小村は銚子を取つた。

「え、飲むわ。」と文龍はなみ／＼と注がれた猪口を一口にぐつと飲み干した。そして小村に返しなが
 『小オちゃんに、いゝ藝者を一人取り持つて上げませうか。』

「藝者なんか要らない。」

彼は素氣なく言つた。

『どうして？』

『どうもしないけれど、僕がかうして時々文ちゃんか、かけたら来て呉れゝば澤山だ。』

『妾なんか、こんな婆さんは駄目よ。もつと若い美しい妓がいゝわ。』

『あはゝ……』と小村は淋しく笑つた。

『矢張り駄目だ！ ちゃんと豫防線を張つて居る。……』

小村はかう文龍の心を疑はずには居られなかつた。そして落膽した。さつきの文龍の思ひ入つたやうな態度によつて、彼は或る事を豫想しながら祕かに喜んで居たのであつたが、それもほんの自惚に過ぎなかつた。忍辱の勝利——永い間忍辱の苦痛を忍んで來た甲斐があつたやうにも思つたが、さう思つただけ一層自分の哀れさ悲惨さが眼に立つた。

彼は酔が一時に醒めたやうに感じて、思はず身慄ひした。

『ちや素人がいゝの？——お千代さんがいゝわよ。』と文龍は生真面目に言つた。

小村は興のさめた顔をして文龍をまじ／＼と眺めた。酔つてるとは言へ、こんなことを露骨に言ふのを寧ろ怪しんだ。

『冗談はよしにしようぢやないか。』と小村は快活に言つた。

『冗談ぢやないのよ、お千代さんなら世話してもいゝわ。』

『何か理由でもあるのかい、先刻阿母さんもそんなことを言つてたが。』

『理由つてこともないけれど、あすこの家でも養子を欲しがつてるんだわ。』

『ぢやア俺なんか駄目ぢやないか。俺だつて養子になる氣はないからな。』

『いえ、養子といつても、必ずしもあの家へ入らなくつたつていゝのよ——手取早く言へば、お千代さんに定まつた男さへ出來ればいゝんだわ。』

『へゝん。』と小村は腑に落ちぬ顔附をして居た。

『つまりね、お千代さんも、もう年も年だし、早くどうにかしなくちやならないんだけれど、家があんなになつちやつたでせう、それで養子といつてもあの家を繼ぐやうな人を貰ふことがちよいと難しいから、誰かしつかりした勤め人でもあつたら、夫婦にして別に家を持たしたいといふのよ。』

『だつてそれぢや矢張り養子に行くんぢやないか。』

『なに、そりやどうにでもなつてよ。當人同志さへよけりや。』と文龍は無雜作に言つた。

小村は文龍でも阿母でも、あまりに男女の関係を無雑作に簡單に見て居るのを不思議に思った。

『さう簡單には行かないからな。當人の意志もあるからな。』

『當人？ 當人なんか何でもないわよ。小オちゃんのことなら、むしろ先方から持ちかけて居るでせう、とづくに。』

『どうも文ちゃん等の言ふことは俺には分らない。』

『いまにすぐ分つて来るわよ。』と文龍は何か意味ありげに言つて、『でも、小オちゃんだつて満更でもないでせう、内々狙つてるんでせう。』

『馬鹿なことを言ふもんぢやないよ。』

『だつて、此頃金井さんと競争だつていふ噂があるぢやないの。』

小村は何といつてよいか分らなかつた。彼は呆れた顔をして文龍を眺めた。そして文龍の言ふことが、單に酒の上の、冷評し半分とは思はれなかつた。何か意味のあることと小村は思った。それによつて、お千代の性行といふやうなものを暗示して居るのではないかと推察した。

『その方がいゝのよ。……妾お千代さんの心を知つてるわ。』とも文龍は宵に言つて居たが、それを思つてもお千代といふ女には、何か特別の裏面——秘密があるやうにも小村には思はれた。

淫蕩な女！ といふ考へが、その時ふと小村の心を掠めた。——きつとさうだ。さうに違ひない。だか

ら文龍等が無遠慮にこんなことを言ふのだ。さうでなければ、苟くも自分の知つてる女について、その女の人格に關るやうなことを、かう無遠慮に言へるものではあるまい。

小村はかう思ふと、お千代といふ女が、まさしくさういふ女のやうに見えた。お千代の恰好から舉動態度、すべがさうした淫蕩の相を示して居るやうに思はれた。

男が欲しいのだ！ と會つてお千代について直覺的に感じたことが、事實であるやうに思はれた。『金井さんてば、あれで中々女たらしだつてね？』

文龍は突然そんなことを言ひ出した。

『誰がそんなこと言つたい？』と小村は咎めるやうに言つた。

『ある人が言つてたわ。前にいろ／＼の女を引つかけたことがあるつてぢやないの？』

『そんなこと俺は知らないな。』
小村は思ひあたることがあつたが、いゝ加減に言つた。誰がそんなことを喋舌つたのだらうと怪しんだ。

『ちよいとそんな風に見える人ね。あゝいふ人には女がちよいと引つかゝるものよ。——だからお千代さんも危いわ。うつかりしていると金井さんに取られて了つてよ。』

文龍はお千代を話の題目として尙ほいろ／＼のことを話した。併し彼女の話は妙にばら／＼になつて

一向まとまりがなかつた。中心が始終動いて統一がなかつた。大分酔つても居たのだつた。

『お千代さんは子供の時分からませて居て、男のことでいろんな噂を立てられたのよ。新聞の娘評判記とかいふのにも書かれたことがあつたわ。』などとお千代の性行を疑はしめるやうなことを言つて、

『あの女なら容易だわ。』と小村にけしかけたり、

『故郷に居ても今ちよいと誰も養子に来るものがないのよ。東京へ出て来たのも、一つは善い婿を探すつもりもあるのよ。ちよいと綺麗な女だから、下宿屋でもしてゐたら、誰か引つ掛かるだらうなんて家の者も思つてゐるやうな様子だわ。』と悪し様に言つて見たり、

『小村さんも男らしくもないやね。あんな女をどうかしようと思つてるなんて。』などと今度は前とは反對に小村を嘲るかと思ふと、

『しかし何處へ出しても恥しくない女よ。顔は綺麗だし、藝事でも何でも女の身だしなみは一通り心得て居るから。』と今度はお千代を賞めて見たりした。

小村は文龍の言葉によつて、漠然ながらお千代の半面をも知ることが出来たやうな気がした。で、一方には、そんな女について今迄多少とも心を奪はれ、疑つたり嫉妬を起したりして心を悩ました自分の愚を笑ひ、お千代を蔑みもすると同時に、他方ではさういふ女なるが故に却つて益々祕密な慾望が挑發されるのでなつた。それは愛の問題ではなく、物欲の問題であつた。女——異性といふものに對して、

若い男が殆んど必然的に感ずるある物の満足を想ふ心が主であつた。小村はさういふ賤劣な考に捕へられて居る自分を淺間しくも恥しくも思ふのであつた。

『人生はすべて試みだ、吾々は精神的冒険に生きて居るのだ。試みよ！』

かう小村は都合のよい理窟を見出して自分自身を是認した。

しかし眼の前に文龍といふ女が居た。お千代のこととお千代のこととして、それはおのづから別問題であつた。お千代に對する考へは心の中にあつても、小村はそれがために文龍に對する戀着の情を打ち消すことは矢張り出来なかつた。

曾て自分が所有して居た女、自分に肉體を許して居た女、自分に自由に享樂を與へて居た女、といふ意識が去らなかつた。そして今その女と、全く他人のやうに、そんなことが毫もなかつたかのやうな態度で、かうして相對して居ることが、どうしても不思議でならなかつた。何といふ不自然なことだらう、こんな不自然なことがあり得ようか……

たとひ嫌はれては居ないにしても、巧に體よく逃げられたことを能く知つて居ながら、小さな自尊心を傷けまいとする心と、女に捨てられたと意識することの恐さのために、強ひて無關心を装ひ、彼女に對して恨み言一つ能く言ひ得もせず、信實な友人關係だなどと自分自身を體よく誤魔化して居る自分が、何ぼう悲惨で滑稽なことであらう！ 第三者から見たらどんなにか自分は甘い頓馬な意氣地のない

人間に見えるだらう。否文龍自身もさう思つて心の中では笑つて居るだらう！

小村はさう思ふと堪へられぬ忙しさの苦痛を感じるのであつた。併しさうかといつて、彼は文龍を思ひ捨てる事が出来ないのはどうしたものであらう。

彼は自分自身のみすばらしい、哀れな姿を想ひ浮べた。そして自分を憐れむの情を禁じ得なかつた。一度醒めた酔は、いくら飲んでも再び元に戻らなかつた。

時計を見るともう十一時を過ぎて居た。小村は豫期の如く、充たされぬ心を抱いて歸らねばならなくなるのを豫想して暗い氣持になつた。

彼はどうにかして、もつとしみじみとした氣持になりたいと願つた。で、以前の思ひ出にでも話を持つて行つたらなどと思つて居ると、そこへ女中が来て『文ちゃん一寸。』と呼び出した。

小村には女中が文龍を呼び出して行つた意味が大體分つて居た。今夜泊つて行く氣か、或は都合で一寸『お退け』にしてもいゝかどうかを確めるのだと思つた。それは少し前に、女中が小村にそのことを尋ねた時、後で文龍が承知かどうか訊いて呉れと言つたのによつてさう察しられるのであつた。

文龍が無論承知しないだらうといふことが小村には知れて居た。そして氣まづい思ひをしながら歸らねばならぬ時が近づいたことを考へて、情ない、遺瀨のない不快な氣持になつた。

やがて文龍と女中とが一緒に笑ひながら入つて來た。小村は自分が嘲られて居たやうに感じた。

女中は小村にお酌をして、

『もうやがて時間になりますから、一つお騒ぎなさいな。』と勧めた。

『お終ひに一つ賑やかに歌ひませう。』と文龍も言つて三味線を取らうとした。

小村はこの言葉でもう文龍の心が讀めたやうな氣がした。一寸義務的に騒いで、それから歸らうといふ積りなんだらうと思つた。

『俺を誤魔化さうとして居るのだ！』かう小村は僻んで考へた。『そんなことで欺されるほど坊つちやんではない。』

文龍は何か一つ二つ歌つたが、小村はつまらなささうに横を向いて居た。

『さて歸らうかな。』

やがて小村は如何にも平氣を装つて文龍等の暗示に少しも氣もつかかなかつたといふ風に言つた。

『今夜歸るの？』と、文龍は訊いた。

『勿論歸るさ。』

『泊つて行きなさいよ。歸つたつて一人寝るんでせう、善い藝妓を呼びますよ。』と女中が言つた。

『はつは、案の如くだ。』と小村は自分を嘲つた。

『いえ、小村さんには、待つて居る人があるのよ。』と、文龍は冗談に女中に言つた。

小村は擦られるやうな腹立たしい焦々した氣持になつた。悲痛な笑が彼の面に浮かんだ。やがて小村は文龍や女中や、女將やに玄關まで送り出された。

「何のこつたい！」

小村は恥かしめられたやうな氣になつて呟いた。

「もう待合なんかへ行かない！」

小村はまた表通りへ出た。人通りもまばらになつて、夜店も大方片附けられて、壽司屋やおでんやなどの屋臺店位しか残つて居なかつた。

時間前のことで、お座敷から歸つて来る藝妓や、これから待合へ出る藝妓やが、忙しさうに小走りに往き來して居た。小村は車夫のつきまとふのを顧みもせず、ただ無意味に歩いた。宿へ歸ることも忘れ、また何處へ行くといふあてもなしに、ただそとろに歩き廻つて居た。

三十分ばかりの後には、彼は宿の前に来て居た。入口の戸が二寸ばかりあいて居て、玄關の障子が薄明く見えて居た。彼は内の様子でも窺ふやうに一寸立ち止まつた。まだ起きて居ると見えて、小さな話聲が洩れ聞えた。小村は獨りうなづきながら入つた。

お民とお千代と金井との三人が、徳太郎の寝て居る枕元に火鉢を圍んで話して居るのを見て、小村は

欠

欠

して、薄い唇を横に長く一文字に引く癖があるので、笑ふ時の相恰は、また一段と可笑味を添へるのであつた。それを剽軽な金造が、自分の大きな口を無理に細くしてお君の眞似をするので、皆尙ほ更可笑しがつて笑つた。

仕事しながら、お君はよく歌を歌つた。

會ひたくないかと問はれた時に

會ひたくないよと言ふつらさ。

などと、自分の心情を寫したもののやうに彼女自身に思はれる文句を、よく口吟くちんむのであつた。

『君ちやん吞氣だね、歌ばかり歌つて。』

或日二階を掃除しながらいつものやうに歌つて居るので、小村はさう言つた。

『表面は吞氣に見えても、これで中々苦勞があるんだからね。』とお君は不平らしく、亂暴な、男のやうな言葉遣をした。

『さうかね、なにか艶つぽい話でもあるのかね。』と小村は態と知らぬ顔して彼女の急所をつくつと、

『そんなことでもなけりや、斯んなこととして居られませんやね。待つて居れと言ふんだからね。』と恥ぢらふ様子もなく平氣に言つて『へへ』と笑つた。私のやうな女でも、いゝといふ人があるんだからね、そんなに馬鹿にして貰ひますまいよ、とでも心の中に誇つて居る様子も見えた。

「驚いたな、さう正面から惚けられちや一言なしだ。」

お君もさすがに氣まりわるさうに、さつと顔を赧めて、

「ところが此頃は……」

「此頃はどうしたい？」

「待てど暮せど便りなしといふ次第なのよ——自烈たいつたら、ありやしない。」と彼女は獨り語のやうに言った。

「はゝあ。」と小村は笑つて、『片便りにでもなりやしないかと心配してるんだね。大丈夫だよ。』

『そんなことになんかなつたら、承知してやらないから！』とお君は力強く言ひ放つた。

何といふ正直な單純な心の女だらう、と小村は寧ろ愛らしいものにさへ思つた。

お君が來たらといふ約束があつたので、或る日小村はお千代に淺草へ行くことを勧めた。

併しお千代はあまりに氣乗りがして居なかつた。活動寫真なんか見たつて、面白さうでもないし、また淺草あたりまで行かなくても、近所にいくらもあるといふやうなことも言つて居た。けれどお君が是非行きたいから一緒に行かうと勧めたし、またお民も勧めた。

「折角小村さんが連れてつてやると仰有るんぢやないか、それに、外へ出た方が氣噴らしになつていゝよ。」

「同じ「活動」でも淺草のは違ふわよ。」とお君は主張した。

「無理に勧めるんぢやありませんよ。たゞ先達て話があつたから……」と小村は何氣なく言つて居たが、お千代の態度を慥らなく思つて居た。

「本當ですよ、こんな我儘な子つたらありやしない。自分から頼んで置いた辭に。」とお民は小村に氣を兼ねて、お千代を叱るやうな口調で言つた。

お千代は金井にも一緒に行かないかと誘つた。金井は行きたいけれど晝は社を休めないからと斷つた。夜なら行つてもいゝと言つた。

小村はお千代が厭ならよさうと言つた。厭なのに無理に引張つて行くと思はれるが厭だつた。彼はもとより淺草へなんか行きたいとは思つて居なかつた。そんな所は子供か田舎者が行く所だと思つて居た。たゞ最初はお千代と二人で行くといふ好奇心に驅られて勧めたのであつた。が今はそんな好奇心も殆ど失せて居た。おまけにお君も一緒に行くといふ事情になつて、尙ほ更氣乗りがしなくなつて居た。彼は先達ての約束があつたから、半分はその義理に勧めて見たまでであつた。

お千代が金井を誘つたので、小村はすぐお千代の心を揣摩つた。金井が行くのなら、お千代は進んで行くであらう、と彼は思つた。こんな所にもお千代の氣持が察せられるやうな氣がした。そして嫉ましい氣持が起らぬでもなかつた。

『ぢや此の次、氣の向いた時に行くことにしませう。そして金井君も一緒に行けるやうに、いつか都合のいい晩に行くことにしませう。その方がいゝでせう。』

小村はさう言つた。自分だけは厭味を交へたつもりで、しかしそれとは覺られぬやうに氣をつけて言つた。

『晩はまた晩に行つたらいいぢやないの。——行きなさいよ。』とお君は自分の遊びに行きたい心持を露骨にあらはして勧めた。

『さうおしよ。』とお民も言つた。

『しかし無理にお勧めするんぢやありませんよ。氣の進まないのに行つたつて面白くもないから。』

小村は冷やかに、多少荒々しい語氣で言つた。今はむしろ止めるやうになればいいと思つた。

『さうぢやないのよ、小村さん。連れて行つて戴きたいのですわ。』とお千代は慌てゝ辯解するやうに言つた。

『ぢや愚圖々々言はないで連れて行つて貰へばいいぢやないか、随分と世話を焼かす子だよ、ほんとに。』とお民は小言を言つた。

『そんなに思はせ振りをするもんぢやなくつてよ。』とお君は調戲ひ半分に言つた。

お千代は少してれたが、

『お願いしますわ、小村さん、連れてつて頂戴な。』と氣を直したやうにあつさりと言つた。しかしそれは小村の氣をわるくせまいために繕つて言つたのだといふことは、小村にもよく察せられた。

小村は何だか氣まづく思つた。何の興味もなく、むしろ厭に思つたが、自分から言ひ出したことだから斷ることも出来なかつた。それで翌くる日天氣なら正午頃から出掛けようといふことに定めた。

翌くる日は朝から晴れて居た。お君は子供のやうに嬉しがつてはしゃいで居た。皆なに調戲はれながら元氣よく立ち働いた。

お千代は朝飯をすますと、直ぐ髪を結ひにかゝつた。彼女は髪結へは行かずいつもお民が結ふのであつた。大きな島田に結ふのが常だが、その日は特に大きく、けばくしいほどであつた。それがよく彼女に似合つた。白いしなやかな襟筋から鬢にかけて、すつきりと水際立つて艶々しく滴るやうに光つて居た。

『よく出来たわね。』

お千代は合せ鏡をしながら、我ながらうつとりと、鏡に映つた自分の姿に見入るやうにして、後に立つてるお民に言つた。

お君もお民に結つて貰つた。顔の大きい割に毛が少いので、よく調和がとれなかつた。若く見せよう

爲か、前髪やたばを長く出したのも、却つて下品におどけて見えた。

二人とも湯から歸つて、更に化粧を済ました頃は、もう正午近い頃であつた。

三人は簡単に早晝飯をすました。それから二人の女が着物を着換へるのにも大分手間取つた。

『女が出るとなるとこの通り大事だからね。』とお民は小村に言つた。

『ほんとは、妾これだから出るのが億劫になつて仕方がないのよ。』と、お千代は昨夜の辯解のいゝ機会を見出したやうに言つた。

やがて彼等は外へ出た。

上下とも粗い縞お召をぞろりと着た上に、襟首から胸に時計の金鎖を垂れ、矢張り縞お召の半コート
を被て、クリーム色の日傘を斜に翳して、流行のキルク草履に、軽く裾をさばきながら歩くお千代は、
實際芝居に出て来る令嬢そのまゝの姿であつた。

小村は氣が引けてお千代と並んで歩けなかつた。まるで主人と下女のやうな有様で、お千代とお君と
並んで行くその後から、空々しい、見知らぬ人のやうな風を装つて電車まで行つた。

電車に乗つてもさうであつた。折よくか、折悪くか、場席が空いて居たのでお千代を真中にして三人
並んで腰かけたが、小村は窮屈さうに固くなつて居た。絶えず眼を他方に向けて、お千代と口をきかぬ
やうにして居た。お千代のけばくしい姿が、車中の焦點となつて、人々の視線を集めて居たが、小村

はなるべく他人の眼を避けるやうにして居た。しかし彼は、自分の肩がお千代の肩に觸れて、暖かい體
温が両方から通ひ合ふやうにすることだけは忘れなかつた。

お君はよく何や彼やとお千代に話しかけた。持前の粗野な言葉の上に、子供の時分から呼び馴れて居
るので、お千代を「お前さん」とか「千代ちゃん」などと呼び掛けるので、お千代はさも迷惑さうに顔をそむ
けた。實際お千代は、どこの令嬢かと思はれるやうな立派な装ひをして、つんとすまして居るのに、誰の
眼にも下女としか思はれぬお君に、かうして多勢の前に友達扱ひにされ、而もそれもすぐお里の知れる
やうな下卑た言葉に遠慮なく話しかけられるのが非常な苦痛であつたのだ。彼女はお君のやうな、こん
な醜い、こんな下品な女と友達のやうに人に思はれはしないかと氣にして居た。で彼女はなるべく口を
きかないやうにし、お君から何か言はれても、如何にも勿體ぶつた見識ぶつた調子であしらつて居た。
併しお君は一向お關ひなしといふ風で、『觀音様へ先にお参りしよう。』とか、『活動は〇〇館がいゝわ。あ
すこの辯士は……』などと、喋舌るので、お千代は餘計にじれくして居た。

小村はその様子を覺つて、お千代が氣の毒でもあつたが、また痛快でもあつた。何々家の令嬢が、女
中と書生を連れてお出掛けだといはんばかりの面構へして、乙に氣取つたお千代の高慢らしい態度を、
お君が遠慮會釋もなく無意識に裏切つて居るのを思ふと、彼は皮肉な微笑を禁じ得なかつた。

雷門で電車を降りた。氣がつくとその日は土曜であつた。丁度これから人が出盛る頃で、中店はかな

り雑沓して居た。滑るやうにつる／＼した敷石の道を、三人は人の間を縫ふやうにして歩いた。お千代は馬鹿に足早に歩くので、

『千代ちゃん、何故そんなに早く行くのよ。』

とお君は怒るやうに言つたりした。さう言はれてもお千代は關はず、こんな人込の中に、田舎者のやうにしてぞろ／＼して居るのを恥づるやうにさつさと歩いた。

『どうせ見物に來たんだもの、そんなに氣取らなくてもいいわ。』

お君は不平さうに、お千代に聞えぬやうに獨り言を言つて、

『人と一緒に遊びに行つても、いつでも自分だけあゝなのよ。』と小村に言つた。

お千代とお君とは観音の本堂へ上つてお参りをした。その間小村は階段下に立つて、人込の間々を潜り抜けるやうにして餌を拾つたり、バタ／＼飛び立つたりする鳩の群を眺めながら待つて居た。公園を抜けて池の端へ出た。そこからは活動寫眞館のみが一區劃をなして居た。三階四階の大きな洋館が十幾棟となく、人を壓するやうに兩側に建ち並んで、幟や彩旗が隧道のやうに兩側から上を掩うて仰いでも空が見えぬ位だつた。各館からごつちやに響きわたる樂隊の騒音や、赤や青やをべた／＼とあくどく塗りたてた、見るからに不氣味と物凄さを感じしめるやうな怪異な繪を描いた繪看板や、雑沓のどよめきや——色彩も、音響も、その刺戟があまりに強烈で、あまりに濃厚で、どんな人でもその強

い刺戟に感覺を眩惑され、神經を掻き亂され、意識を晦まされずには居られないほどだつた。

『まあ、綺麗なこと！』とお君が先づ驚嘆の聲を放つた。『夜、電飾イルミネーションがついたらどんなでせうね。』

『綺麗だね。』と小村は簡単に答へた。

お千代は雑沓を厭ふもののやうに、また四邊を見ようともせず何も言はずに居た。

『どこかへ入りませうか。』と、小村はお千代に言つた。

『随分込んでるでせうね。』と、お千代は進まぬ面地で言つた。

小村は強ひて勧めもせず、お千代と離れないように注意しながら、人込の中を縫うて歩いた。お君は繪看板を見い／＼歩くので、ともすれば二人から後れては、慌てゝ人をかき分けて走つて來たりした。

『何館へ入るの？』と、お君はもう入ることに極めて了つて、小村に尋ねた。

『さあ——』と、小村は立止まつた。お千代の氣持が解らなかつたので一寸躊躇して、『どうします？』と、

お千代に訊いた。

『千代ちゃん、何處へ入るの？』とお君もお千代を促した。

お千代は暫く考へるやうにして居たが、

『活動へ入るのを止さうぢやないの。』と言つた。

『どうしてさ？』と、お君は眼を圓くして、咎めるやうに言つた。

『つまらないぢやないの。』とお千代は言つたが、ふと気がついて、「妾、あんまり多勢人の居る所厭だわ。」と言ひ直した。

『だつて仕様がないわ、何所だつて活動は皆さうなもの。』

『それに妾なんだか身體の工合が悪いし。』

『どうしたんです、何處が悪いんです？』と、小村は氣づかはずに尋ねた。

『いえ、何でもないので。』

『活動見ないでどうするの？ そのために態々來たんぢやないかね、お前さん！』とお君は少しぶりぶりして言つた。

お千代は黙つて居た。小村も黙つて居た。お君は失望と、不平と、憤懣との表情を、代る／＼その赤ら顔に表した。そして彼等はただ無意味に人込の中をさまよつた。

『お前さん、そんな我儘言つては困るわ、折角小村さんに連れて來て貰つてからに。』

お君は、自分が活動を見られなくなりはいないかといふことが何よりも氣にかゝつて居た。

お千代は小村と少し離れて先に歩いた。お君は追ひかけるやうにして行つた。小村は敢て追ひつかうともせず、たゞふら／＼して居た。女等と彼との間は、五六人の人に隔てられて居た。

小村はすつぽかされたやうな、呆氣ない氣がした。張合抜けがした。欺かれたやうな、愚弄られたやうな、馬鹿にされたやうな氣がした。例へば、主人に呼ばれて、何か美味しい物でも貰ふつもりで、尾を振りながらいそ／＼と駈けて行つて、突然唾液をひつかけられた犬のやうに自分が思はれた。一種の侮蔑を受けたやうな氣にもなつた。

『勝手にしやがれ！』と彼は腹立たしく呟いた。

ふとお千代とお君の姿が、人込の中へかくれて見えなくなつた。——このまゝ黙つて何處かへ行つて了つてやらうか、といふ意地悪い復讐的の考が小村の心を掠めた。が次の瞬間に、彼は二人が池の中の茶店へ渡らうとする橋の側に自分を待つて居るのを見出した。お千代は人目を避けるやうに、後向に日傘を肩にかたむけて、池の中の鯉でも見て居るやうな様子をして居た。

『どうするんです？』と、小村は側へ近寄つて言つた。

『千代ちゃん、身體の工合が悪いから活動へ入るのが厭だといふんですよ。』と、お君は辯解するといふよりも、自分自身のつまらなさうな氣持を現はして言つた。

『それぢや、入らなくてもよい。』

『でも折角連れて來て貰つて——』

『なに、そんなことは——それで、どうするんです、こんなとこに立つて居ても仕様がなないが。』と小村は誰に言ふとなく言つた。

で三人はまた人込の中へ入つて、仕様事なしにぶら／＼と歩き出した。どうするのか、どうなるのか誰にも分つて居なかつた。

「何だ、つまらない！」

小村は心の中で言つて舌打をした。

「つまらないわ、折角来てからに、千代ちゃん随分我儘だわ。」とお君は恨めしげに呟いた。

「ぢや、お汁粉でも食べに行きませうか。」と小村は優しくいたはるやうにお千代に言つた。

「有り難う、私何も欲しくありませんわ。」お千代は冷やかに答へた。

小村は憤然とした。「蟲を殺して、機嫌を取つて居れば、可い加減に人を馬鹿にしてやがる、覺えて居ろ！」と腹の中で言つて居た。彼はそれでも尙ほ屈辱を忍んで、お千代の意を迎へるやうに、

「では歸りますか。」とやさしく言つた。

「一幕だけでも見て行きませうよ、來た甲斐がないぢやありませんか、このまゝ歸つては何しに來たのか分らないわ。」とお君は訴へるやうに言つた。

「君ちゃんだけ入つて御覽よ、待つてるわ。」

「そんな無茶なこと！」

「あんまりだ！ 大概にしろ！」と小村はひとり憤慨した。なにも活動寫眞を見るために來たわけ

はない、また自分もあまり好まないのであるけれど、淺草へ來るといふ以上、暗々裡にさういふ意味も含まつて居るのだ。またさうでもするより外に仕方がないことは最初から分つて居ることではないか、こゝまで態々出て來て、このまゝ歸るのなら、始めから來ない方がよいのだ、あんまり人を見縊つて居る、と小村は腹が立つた。ただ何故お千代が急にかういふ態度に出たのかそれが分らなかつた。單に人が多勢だとか、身體が悪いからといふばかりではないらしいことは小村にも知れて居た。

「俺と一緒に居るのが厭なんだらう。」とも思つた。

「金井が居ないからだらう、最初から來たくなかつたのを、俺への義理立てに無理に出て來たのだらう。」そんな風にも考へられた。

「お千代さん、歸るのなら歸りませう。」

花屋敷の前を通つて再び公園の中へ入つた時に小村は言つた。いくらか激したやうな調子があつた。

お千代はさすがに歸らうとは言ひ兼ねて居た。

「こんなことして居てもつまらない、どちらかにしませう。」と小村は更に言つた。

「小村さん、申譯ありませんわ、折角連れて來て頂いて——。」とお千代は詫びるやうに言つた。

「そんなことはどうでもいゝですが——歸りますか？」

「妾何だか気分が悪いんですのよ。ですから私だけ先に歸りますから、小村さんと君ちゃんはゆつくり

活動でも見て来て下さいな。」

「馬鹿にするな！ 失敬な。」

小村はさう言つて怒鳴りつけたかつた。彼は固く口を結んでお千代を睨んだ。

「そんな馬鹿なことが出来ますか、考へて御覽なさい。一緒に来て、僕等だけ残るなんて——僕だつて何も活動寫眞が見たくて来たのではありません。」

小村は涙を呑むやうな氣持で莊重に言つた。

かうなつては、もうお終ひだと小村は思つた。喧嘩だと思つた。

お千代は自分の我儘から、氣むらから、小村の氣を悪くしたことを知つて後悔する氣も起つたが、今更どうもならなかつた。今になつて機嫌よく、ぢや活動を見ませうなどと折れて出るやうな空々しい、氣の知れたことは義理にも出来ない羽目になつた。

お君は最初から活動のみをあてにして、全くそのために来たのだから、お千代の我儘からそれを見もせず、來るとすぐ歸ることを如何にもつまらなく思つた。そして皆がお千代のお蔭だとお千代を恨めしがつた。

『どうするのよ。』とお君はやがて情なささうにお千代に言つた。

お千代は黙つて向うを見て居た。

『折角こゝまで来て只歸つて行くのも變ですから、では斯うしませう。』と小村はいゝ事が思ひついたやうに言つた。『活動がいけなかつたら、花屋敷へでも一寸入つて、そして歸りませう。』

お千代はさすがに不承知を唱へるわけにもいかなかつた。

『活動はまたいつか晩に來て見よう、その方がいい。』

小村は態と元氣よく、お君をなだめるやうな調子で言つた。そして先に立つて花屋敷の方へ戻つた。

作り人形や、山雀の曲藝や、猿の戯れや、象や、熊や、操り人形や、お茶番狂言などを、三人とも離れぐゝの、氣まづい心で、黙つて見て歩いた。

やがてそこを出て再び公園から仲見世の方へ廻つた。汁粉でも食べて行かうと小村はもう一度勧めたが、お千代は厭だと言つた。

仕方なしに小村は一寸した土産物を買つて電車に乗つた。

お千代の顔は急に晴々となつた。

『金井さんはまだ歸らない？ 母やん。』

これがお千代が家に歸つてから發した第一の言葉であつた。彼女は部屋へ入るや否や、先づお民に斯う尋ねたのであつた。そしてまだ歸らないといふことを聞くと、彼女は落膽したやうな調子で『さう。』と言つて衣服を脱ぎもせずそのまま火鉢の前に坐つて煙草に火をつけた。

小村はお千代のこの言葉や態度やによつて、先刻から胸に蟠つて居た疑惑がすつかり釋けたやうな氣がした。すべてのことがこの簡単な言葉の裡に含まれて居ると思つた。

『さうか、これで解つた。お千代の心の中には、金井のことより外になかつたのだ……』

かう思ふと、小村は冷たいメスで胸を刺されるやうな氣がした。彼の心は、嫉妬に燃えるよりも、絶望に近い悲哀に充たされた。

『馬鹿に早いですね。』

お民は小村に禮を云つてから、彼等が意外に早く歸つたのを審しがつて尋ねた。

『えい、もつとゆつくりして晩飯でも食べてから歸らうと思つて居たんですが……』

『千代ちゃんが厭だつてもんだから、活動も見ないで歸つたのよ。』とお君は小村の言葉を引取つて、淺草に於ての事情をくはしく説明した。

『そりやつまらなかつたね、折角連れて行つて貰つて……』とお民は言つた。

『私もう落膽しちやつたわ。』とお君はまだ不平さうに言つた。

『どうもすみませんでした、小村さん。』とお千代は馬鹿丁寧に小村に言つて頭をさげた。そして立つて衣服を着換にかゝつた。

小村は二階にあがつた。そしてぼんやりと放心したやうに机に肘をついて居た。

故もなく癩癩に觸つてならなかつた。まるで口の中へ無理に砂利でもねぢこまれて、吐いてもくゝいつまでもがじくゝと残つて居るやうな、不快な自烈たい氣に充たされて居た。悶々した考へに心を閉ざされて、秩序だつて物を考へる氣力もなかつた。彼はただいらくゝして無暗に頭をむしつたり、足を叩いたりした。

『あんな女、何だ！ 淫賣だ！』などと絶望的に罵つたりした。

血が荒れ狂つて來るのを覺えた。彼はちつとして居れなくなつた。立つて縁側へ出て見た。もう彼は夕暮近かつた。太陽は筋向ひの洋食屋の屋根の彼方にかくれて了つて居た。向ひの待合では、綺麗に洗つた門口に、摘み鹽が新にされてあつた。ぼつくと軒燈に火が入りかけて居た。

「つまらない、何處かへ行つて飲んでやらうか。」

かうも思つたが、俄に決しかねて、また部屋へ入つて二三度ぐる／＼歩きまはつた。そして再び机の前にぐつしやり坐つて、髪の毛の中へ片手の指をつき込んで居た。

「馬鹿に考へ込んでますね。」と、此時お民はニコ／＼しながら十能に火を入れて上つて来て小村の前にべつたり坐つた。そして、苦笑しながら擡げた小村の顔を見つめながら、「どうしたんです？」と尋ねた。「どうもしないけど、疲れたんでせう。」と小村は力なく言つた。

お民は火をつぎ入れて了つた後も、すぐ立上らうとはせず、そのまま火鉢に手をかさした。

「文龍さんにも會つてゐらつしやい、気分が直りますよ。」と皮肉な笑ひ方をした。

「文龍々々つて、何でもありませんよ。」と、小村は腹立たしさうに言つて横を向いた。

「可笑しいわね、文龍のことを言はれるとそんなに氣にさはるんですか。」

「だつて何でもないので、いやに調戲ふからさ。」

「氣の小さい人だね、小村さんは——」とお民は小村の顔をしげ／＼眺めて居たが、「男がそんな氣の小さいことでどうなります、もつと大膽におなりなさいよ。——よう。」とニツと笑つて、小村の膝をくすぐるやうに突ツついた。

小村はくすぐつたい感じで、さつと身退ぎしようとする、と、「そんなに摸つたいんですか。」とお民は卑

しげな笑を口元に湛へながら、尙ほも手を伸ばして小村の股を衣服の上から撫でゆすつた。

小村は胸のくしや／＼して居る時が時とて、お民の冗談を無性に煩さく思つた。お民の心持などを推量する餘裕がなかつた。四十面さげて、年甲斐もない、と心の中で嘲りさへして居た。そして相手にもならずぶり／＼して居た。

「まだ若いわね、小村さんは。」

こんなことを言ひながらお民は降りて行つた、それと入れ違ひにお千代が入つて來た。

「小村さん、今日はどうもお氣の毒さまでした。」と彼女は、打ち解けた調子で言つた。

「どういたしまして。身體の工合はどうです？」と小村は素知らぬ顔して態と機嫌よく言つた。

「え、何ともなくなりましたけれど、先刻は何だか……」

そしてお千代は袂から栗饅頭を二つ紙に包んだのを取り出して、

「一つ召し上がれな、二つしかないのよ。」と掌に載せて小村にすゝめた。

小村は一つ取つた。お千代は残りの一つを半分に分けて、口の中へ入れた。

「小村さん、これに懲りないで、また今度連れてつて頂戴な、ねえ。」と、いくらか小村の機嫌を取るやうに、例の媚びある微笑を浮かべながら言つた。

「え、今度は晩に参りませう。金井君も一緒に。淺草は夜でなくちや面白くありませんよ。」

「私も今日のような我儘しませんわ、——随分私は我儘ですね、呆れちやつたでせう。」

「なアに、我儘な方がいゝですよ。何事でも我儘な者が勝つものです。他人の氣を兼ねて遠慮したりして居ては何も出来ませんよ。」と小村は自分自身を批評するつもりでさう言つた。「僕なんか我儘になれないので困るんですよ、一寸したことでも、斯うしたら人があゝ思はないかしら、あゝしたら斯う思はないかしらなどと、始終自分をお留守にして、他人のことばかり氣にして苦しんでるんです。臆病といへば臆病なんですが、つまり疑深いんですよ。他人も疑ふし、自分をも疑ふんです。これでは何事にも手が出やしないです。」

「そりや小村さんはいろ／＼世の中のことを知つて居なさるから、何でも氣が付きなさるんですわ。私なんか何も知らないで、たゞ我儘なばかりで困りますわ。」

「いやその方がいゝです。利益です。他人が我儘だとか、自惚が強いとか、何とか言つても、自分の思ふとほりに言つたり爲たり出来るほど結構なことがありますか。僕なんかも、どうかしてさうなりたいたいと思つてるんですが……」と、小村は強ひて微笑した。

「金井さんも、あんなに優しさうで居て、あれで中々我儘ですわね。」とお千代は残りの栗饅頭を口へ入れた。

「さうかも知れませんが、金井君などは一人息子で、僕なんかと違つて、素直に鷹揚に育つて來てゐるだ

けに、どこか違つてゐますよ。僕のやうないぢけた根性や、自分や、他人を疑ふやうなことは少しもありませんからね。だから或る場合には我儘とも駄々兒とも思はれるやうな所がないでもありませんが、そこが金井君の美點なんで、却つて人に好い感情を與へるんです、つまり自分を疑ふことがないかはりに、他人をも疑はないからです。」

「さうね、随分駄々兒の所があるわね。」

お千代は小村の言つたことが半ば解らなかつた。またさういふお談議めいたことは彼女の興味を引きもしなかつた。で、どう小村に調子を合してよいか解らなかつたので、ただ「駄々兒」といふ言葉だけを取り出して、小村の言つたことに同感を示すつもりで言つた。

「その駄々兒の所で、却つて人に可愛がられるんですよ。」と小村は淋しさうに笑つた。

お千代は金井のことについて小村に訊き質したいことがあつて、それかた／＼來たのであつたが、話が妙に六かしくなつて行つたので、それを言ひ出し兼ねて居たが、やがて、

「金井さんは今日は遅いわね。日曜なのに。」と稍々あつて話頭を轉じた。

「待ち遠しいでせう、もうぢき歸りますよ。」と小村は無氣味な笑ひ方をしてお千代を眺めた。

お千代は一寸顔色を變へたが、何氣なく装つて、

「小村さん、此人御存じ？」と懐から一通の封書を取り出した。